平成22年度
「日本／ユネスコパートナーシップ事業」報告書

2011年3月
国立大学法人　奈良教育大学

平成22年度　日本／ユネスコパートナーシップ事業　報告書

世界遺産学習全国サミット２０１０ inなら
奈良教育大学ユネスコスクール教育実践研究会

目次

○ごあいさつ：実践からの学び合いを
奈良教育大学学長　長友恒人 …… 1
○世界遺産学習全国サミット2010 inなら／
奈良教育大学ユネスコスクール教育実践研究会【概要版】 …… 2
○分科会１
①「ひろげる　ひろがる　世界遺産学習ー菜の花プロジェクトからー」 …… 8
②「世界遺産と科学」 …… 12
③「わくわくさんぽ　せいびの町」 …… 16
④「こんなにおもしろい奈良公園」 …… 20
⑤「地域遺産を通して世界とつながる学び」 …… 24
⑥「1300年記念参画プロジェクト」 …… 28
⑦「ふるさとに支えられてー体験活動を通してー」 …… 32
⑧「出会い・ふれあい・深め合い！地域の遺産と世界遺産」 …… 36
⑨「奈良を創った、繋いだ、守った」 …… 40
⑩「ユネスコ青年交流　2009・2010」 …… 44
⑪「仲間と共に学び合った奈良の世界遺産」 …… 48
○分科会２
①「環境教育を入り口としたESD」 …… 54
②「故郷の森『白神山地』を学ぶ」 …… 58
③「いっしょにあそぼう、かがやく奈良で」 …… 62
④「地域の文化や人との絆をつなぐ」 …… 66
⑤「無形文化遺産『能』の学習を通して」 …… 70
⑥「今井町は、どんな町？」 …… 74
⑦「奈良の遺産を守るということは・・・」 …… 78
⑧「中国のユネスコスクールにおけるESD実践と模索」 …… 82
⑨「ゴレ島から負の遺産の意味を考える」 …… 86
⑩「『木の文化』を未来に伝えるには」 …… 90
⑪「奈良の民話と語りの文化が持つESD力」 …… 94

【開催日時】　平成22年11月28日（日）
【会場】　奈良教育大学講堂
【主催】　文部科学省・奈良教育大学・奈良市教育委員会・奈良国立博物館
世界遺産学習連絡協議会
【後援】　社団法人平城遷都1300年記念事業協会
奈良県教育委員会
社団法人日本ユネスコ協会連盟
財団法人ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所
日本国際理解教育学会・日本環境教育学会

ごあいさつ：実践からの学び合いを

国立大学法人奈良教育大学　学長　長友　恒人

「世界遺産学習全国サミット2010 inなら」が本学の「ユネスコスクール教育実践研究会」と合同で開催されるにあたりまして、主催者の一員として、また会場校を代表して、ご挨拶を申し上げます。

世界遺産教育についての実践研究会は本年度で４回目の開催になります。第１回が212人、第２回が347人、そして、「世界遺産学習全国プレサミット in なら」として開催された昨年の第３回が547人、そして本サミットである今回は800人以上の方々が参加いただいていると伺っており、年々参加者の層の拡がりと内容の充実が伺えることは、ユネスコスクール加盟校の増加と相まって、大変うれしいことであります。

今回の「全国サミット」では、２つの特徴があげられるかと思います。

ひとつは、世界遺産を有する全国の自治体の教育委員会や学校の先生方の報告が増えていることであります。日本には14の世界遺産サイトがありますが、その内の半数の自治体及び暫定リストに登録された５つの自治体からご参加いただきました。

もうひとつの特徴は、古代奈良の文化に大きな影響を与えた韓国から韓敬九氏と中国から楊傑川氏が、実践報告者とシンポジストとして参加されていることであり、このシンポジウムは「国際的」に発展しつつあるといえます。

さて、今回のサミットでは、理論的にも実践的にも着実な深化が期待されます。それは、世界遺産学習から、ユネスコが提唱しているESD（Education for Sustainable Development；持続発展教育）へ迫る視点を明確に持っていることです。さらに、環境、平和・人権や国際理解などをテーマとするESDの視点のひとつとして、世界遺産を切り口にした実践が着実に展開されつつある状況を踏まえて、互いの情報交換から学び合いをすることも重要な事です。

奈良の子ども達にとって、奈良公園の鹿は見慣れた光景ですから、特別の感動を覚えることはないようですが、このように自分が生まれ育った「当たり前」になってしまっている地域の優れた価値を持つ自然や文化（世界遺産）が「かけがえのない素晴らしいもの」である、と自覚できない、つまり「客観化、対象化ができない」という傾向があります。地域の優れた文化遺産や自然景観と向き合って、それらを守り継承することの重要性、「それが未来のために掛け替えのない重要さを持つのだと自覚する」当事者に変容させる教育・・・このことがESDであり、「世界遺産学習」と「ユネスコスクール教育」が連携する意味はここにあります。

ESDでは地域に根ざした実践が基礎となります。このサミットが、世界遺産を切り口とした学習、実践の交流を通した豊かな学び合いとなることを期待しています。

最後になりますが、奈良市教育委員会をはじめ、このシンポジウムを支えてくださったみなさん、ボランティア精神をもって準備してくださった方々に心からの感謝を申し上げまして、挨拶と歓迎の言葉とさせていただきます。

平城遷都1300年祭　　日本／ユネスコパートナーシップ事業

【概要版】世界遺産学習全国サミット2010inなら 奈良教育大学ユネスコスクール教育実践研究会

平成２２年１１月２８日（日）、全国規模の世界遺産学習の研究大会として「世界遺産学習全国サミット２０１０in なら／奈良教育大学ユネスコスクール教育実践研究会」を開催いたしました。市立学校教職員や市民のほか、北海道から沖縄まで、全国各地から学校関係者や研究者など８００名以上が集い、講演会やシンポジウムの他、分科会では世界遺産学習やＥＳＤに関する意見交換を行うなど、充実した研究会となりました。

世界遺産学習は単に世界遺産について学ぶのではなく、世界遺産や地域遺産、伝統文化などの文化遺産について学ぶことを通して、地域を誇りに思い、大切にする心情を育てたり、国際理解教育や環境教育、平和教育、人権教育などへと展開したりすることで、持続可能な社会の担い手を育てることをねらいとしています。今回の全国サミットでの成果を今後の取組に生かしていただきたく、その概要をお知らせします。

第２回世界遺産学習連絡協議会総会

昨年度、世界遺産学習や持続発展教育（ＥＳＤ）に関する情報交換や共同研究を目的に「世界遺産学習連絡協議会」を設立しました。現在、１３の教育委員会と３つの学校が加盟しています。

今回が２回目となる世界遺産学習連絡協議会総会では、各教育委員会や学校における取組が紹介された他、来年度の全国サミットや同時開催される「大好き！みんなのたからもの」絵画作品展への協力などについて話し合われました。また会員の他に、文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長の浅井孝司様、気仙沼市教育委員会、金沢市教育委員会の代表にオブザーバーとしてご参加いただきました。

【正会員】
深浦町（青森）、平泉町（岩手）、斑鳩町（奈良）、橿原市（奈良）、桜井市（奈良）、堺市（大阪）、藤井寺市（大阪）、姫路市（兵庫）、大田市（島根）、大牟田市（福岡）、屋久島町（鹿児島）、読谷村（沖縄）、奈良市（奈良）

【学校会員】
奈良教育大学、奈良県立法隆寺国際高等学校、羽衣学園高等部（大阪）

基調講演：「奈良らしい教育の中核：世界遺産学習」奈良市教育長 中室 雄俊 氏

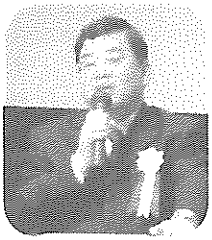
奈良市では「奈良で学んだことを誇らしげに語れる子ども」の育成を目指し、世界遺産学習を奈良らしい教育の中核と位置付け推進しています。世界遺産学習を通して子どもたちにもってもらいたい誇りとして次の３つがあります。

- 奈良にある素晴らしい文化財や伝統などに対する誇り
- 千年単位で文化財や伝統を守り、受け継いできた奈良の人々の営みに対する誇り
- 本物にふれて学ぶことができた自分に対する誇り

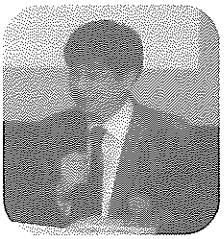
世界遺産学習は奈良市版ＥＳＤ（持続発展教育）です。世界遺産学習を通して、地域への誇りや愛着を育てると共に持続可能な社会の担い手は自分たちであるという当事者意識を養い、行動できる態度を形成していきたいと考えています。

世界遺産学習シンポジウム「持続発展教育と世界遺産学習」

コーディネーター：奈良教育大学教授　田渕 五十生 氏
シンポジスト　　：文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長 浅井 孝司 氏
ソウル大学教授・韓国国際理解教育学会会長 韓 敬九 氏
奈良市教育委員会事務局学校教育課長　石原 勉 氏



浅井：　普段見ているものが１０００年以上にわたってそこにあるということに気づき、それを共有できているということは、過去とのつながりを意識するということ。そして、次の世代にその文化的価値を託したいと思い、そのために自分たちが何をすべきかを考える世界遺産学習はＥＳＤである。



韓　：　韓国では伝統的な民族文化を強調する傾向がある。文化は本来多様性に富んでおり、他の文化と相互浸透し多層的なものである。ところが、文化遺産が国民国家のプライドの源泉とされ、自己の優秀性を強調する道具になりがちな面があることに留意する必要がある。今後、多文化理解や環境との調和など学生の日常生活との関連を考えていくことが大切だ。

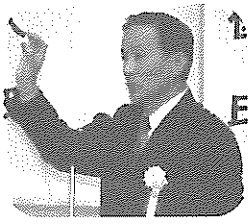
石原：　古都奈良の人々が文化財をはじめ、多くの素晴らしいものを守り、伝え、大事にしてきた心を学び、未来につなげるといった、心を学ぶ部分が奈良市版ＥＳＤである世界遺産学習の基盤になっている。どの地域にも先達が残してくれた素晴らしい文化遺産や自然遺産、伝統文化がある。それを大切にする心を育むと共に現在に生かし、さらに未来につなげていくというＥＳＤの視点をもって取り組んでいくことが世界遺産学習の理念である。

田渕：　自然への感謝、我々は自然によって生かされているということ。文化遺産を作り受け継いできた人々への感謝、この風土と文化の中で自分が生かされている喜び。そして未来に向かってどのような社会をつくっていくのか。自然と歴史・文化、そして未来とのつながりを一人一人が感じることがＥＳＤとしての世界遺産学習の中心である。

世界遺産学習会Ⅰ「平城京遷都の真実に迫る」奈良文化財研究所副所長　井上 和人 氏

藤原京は平城京より大きかった。なぜ大きな都を捨ててまで平城京をつくる必要があったのか。従来、衛生状態の悪化など６つの説が考えられていたが、私は国内の問題ではなく、中国大陸に存在した巨大帝国、唐の軍事的な圧力に対する防衛体制を追求した結果ではないかと考えている。

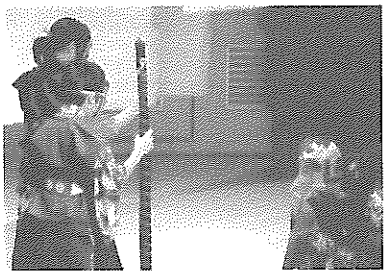
７０２年に３３年ぶりに遣唐使が派遣され、長安城の壮大さを目の当たりにして危機感を抱き、新都・平城京を建築することが決断された。巨大都城は当時の皇帝、天皇の力、国家の権力を示すためのものである。政治的な力を明らかにするために目にみえる形が必要であると同時に、華夷秩序の構築を追求する唐との力関係に配慮する必要があった。



城壁や羅城門など、平城京はあくまでも長安城を模倣して作られたが、朱雀大路の幅がちょうど半分に設計されていることから、平城京は長安城のちょうど４分の１になっている。私は、平城京を作るなら長安城よりも半分あるいはそれ以下のものを作るようにと正確なデータをもらったのではないかと考えている。しかも横長の長安城を９０度回転させ、縦長にすることによってより大きくみせることができた。日本の国家として、独自の力を示すことができた。それが平城京である。

世界遺産学習会Ⅱ

【奈良市立大安寺西小学校：創作音楽雅楽】

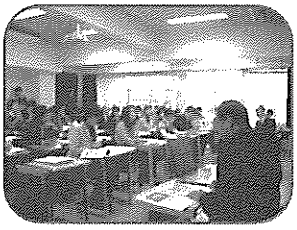


【奈良市立月ヶ瀬小学校：狂言】

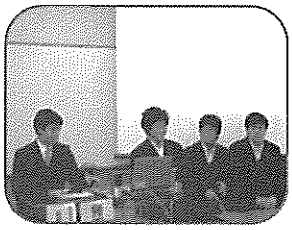
分科会での報告と協議内容

○【文化遺産を通した国際理解・多文化共生】
「中国のユネスコスクールにおけるＥＳＤ実践と模索」中国人民大学附属中学校高校　楊 傑川
「こんなにおもしろい奈良公園」奈良市立済美南小学校　竹本 貴美子
「奈良を創った、繋いだ、守った」奈良市立三笠中学校　深澤 吉隆
○【文化遺産・自然遺産を通した環境教育】
「ひろげるひろがる世界遺産学習」奈良市立六条幼稚園　松本 知子・ＮＰＯ法人宙塾　黒飛 啓
「環境教育を入り口としたＥＳＤ」岡山県立矢掛高等学校　室 貴由輝
「世界遺産と科学」奈良市立都南中学校　垣見 弘明・米田 力
「故郷の森『白神山地』を学ぶ」深浦町教育委員会　神林 友広

○【幼稚園・小学校低学年での世界遺産学習】
「いっしょにあそぼう、かがやく奈良で」奈良市立右京幼稚園　森口 千鶴代
「わくわくさんぽ、せいびの町」奈良市立済美小学校　西尾 美佳
○【文化遺産を活用した情報教育】
「世界遺産を通して世界とつながる学び」奈良市立椿井小学校　中川 素



○【郷土の食文化・伝統文化】
「ふるさとに支えられて」小浜市立田烏小学校　大下 容子
「地域の文化や人との絆をつなぐ」金沢市立森山町小学校　山村 薫・嶋崎 和良
「無形文化遺産『能』の学習を通して」斑鳩町立斑鳩小学校　遠藤 尊
○【文化遺産を通したＥＳＤ】
「１３００年記念参画プロジェクト」奈良市立飛鳥小学校　松浦 慎
「今井町は、どんな町？」橿原市立今井小学校　山上 真一
「奈良の遺産を守るということは‥」奈良市立済美小学校　大西 浩明
「ゴレ島から負の遺産の意味を考える」奈良教育大学附属中学校　吉田 寛
「ユネスコ青年交流２００９・２０１０」奈良市立一条高等学校　藤村 智子
「『木の文化』を未来に伝えるには」奈良県立法隆寺国際高等学校　祐岡 武志
「仲間と共に学び合った奈良の世界遺産」奈良教育大学　田渕 五十生
「奈良の民話と語りの文化が持つＥＳＤ力」奈良教育大学　竹原 威滋・青木 智史
「出会い・ふれあい・深め合い！地域の遺産と世界遺産」
桜井市立桜井南小学校　松本 友里・桜井市立大福小学校　笹岡 佳子

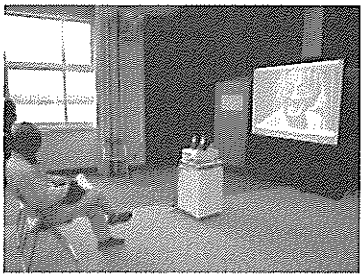


今回のサミットでは１１の分科会で２２本の実践が報告され、ＥＳＤの視点や大切にすべきポイントなどについて熱心な協議が行われました。

- 地域遺産や食文化、伝統産業など、どの地域にも受け継がれている大切にされているものがある。そこにスポットをあてるのは教師の役割。教師自身が本気になって、楽しめるＥＳＤを展開したい。
- ものだけでなく、それに関わる人物との出会い、思いにふれさせることでＥＳＤとして充実する。
- 体験的な活動、本物との出会いを組み入れ、自分を振り返らせることが大切だ。
- 取材や発信など、世界遺産学習を通してコミュニケーション力も育つ。

「大好き！みんなのたからもの」絵画作品展・「私のまちのたからもの」フォトストーリー作品展

【同時開催いたしました作品展にご出品いただいた教育委員会、友好姉妹都市、歴史都市等】
大牟田市、屋久島町、橿原市、桜井市、斑鳩町、平泉町、清水町、洞爺湖町、宇佐市、小浜市、郡山市、多賀城市、キャンベラ市、ベルサイユ市、トレド市、金沢市、京都市、慶州市、西安市、オデッサ市、ヴェリコ・タルノボ市、奈良市、奈良ユネスコ協会連盟、奈良女子大学附属中等教育学校



世界遺産学習講演会「こどもたちに伝えたい奈良」奈良国立博物館学芸部長　西山 厚 氏

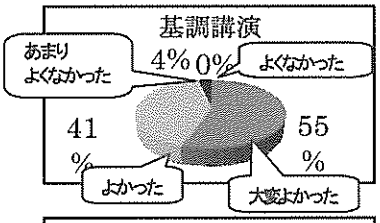
表面に見えている世界を支えている向こう側にある世界、それを本当に知ると世界は一変する。奈良にはそういうところがいっぱいある。その一つが東大寺の大仏だ。

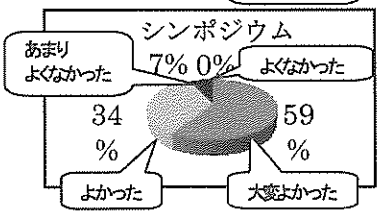
聖武天皇の時代は、干ばつや飢饉、大地震、天然痘の大流行と多くの人が苦しんでいた。聖武天皇は自分の政治が悪いから天が罰を下すと考え、「全ての動物・全ての植物がともに栄える世の中をつくりたい」という切なる想いで大仏を造ろうとした。しかも大きな力やたくさんの富で造るのではなく、一本の草を持ってきた人にも一握りの土を持ってきた人にも手伝ってもらおうと、多くの人々の協力を求めた。こうして「何もできないが、何かの形で関わりたい。」その思いが形になり、できないはずのものが本当にできた。ところが源氏と平氏の戦いで東大寺は焼かれてしまった。その時、大仏復興に立ち上がったのが重源だった。重源は尺布寸鉄といえどもと、全国に寄付を募った。まさしく聖武天皇と同じ想いだ。そうして３年後に大仏が復興できた。

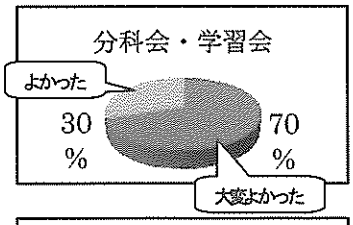
ところが、戦国時代にまた焼けてしまった。体はある程度修復されたが、重い頭をのせることができなかった。大仏様は１００年間以上も野ざらしのまま放置されていた。立ち上がったのが公慶。公慶も聖武天皇・重源と同じ想いで一人で全国をまわり勧進を続けた。お顔ができれば、次は大仏殿。木が２６７２３本も必要。特に困難だったのが大虹梁。屋根は３０００トンもある。大虹梁になる木がない。いくら探してもない。公慶は全国を探しまわり、やっと霧島の白鳥神社に５４ｍの２本のご神木を見つけた。公慶の想いがとうとう天に届いた。公慶はこの２本の大虹梁を設置した時点で亡くなった。公慶堂は大仏殿の方を向いている。公慶さんに出来上がった屋根を見せてあげたい想いがある。大仏殿に行き、「大きいなあ。」と思うことも大事。でも公慶の生涯を知ると、大仏殿の屋根が遠くに見えてきただけで、ぐっとくるものがある。このようなことを知っていると、大仏様の見方が劇的に変わる。

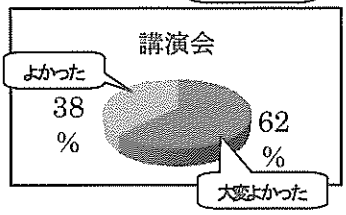
今日の研究会は「つながる」という言葉がキーワードだったと思う。俵万智さんの「手をのばす」という詩に、次のような一節がある。「つながる　つながる　つながる中で　私は私を見つけ出す」

地域遺産を学ぶということをうまくあらわしていると思う。人とつながる、自然とつながる、歴史とつながる。自然と、過去と、未来と、本当につながることができれば、人はどんな時も生きることができる。世界遺産・地域遺産を学ぶことでそれが実現できるのではないかと私は思う。（抜粋）









【参加者の声】

○世界遺産とＥＳＤのリンクのあり方が明確になってよかった。誇りの中味に「学ぶ自分への誇り」が含まれて、そこにハッとさせられました。（市外教員）

○感謝と敬意がＥＳＤにつながるというのがステキだなと思いました。（市外教員）

○熱い思いがよく伝わりました。文化と文明のとらえ方の点はとっても勉強になりました。（市立中学校教員）

○先生方の思いのある実践を聞き、自分も頑張っていこうと思いました。自分の実践にもつながります。（市立小学校教員）

○井上先生の話、古代ロマンとともに国家戦略のありようなどのスリリングなものを十分感じとることができました。（市外教員）

○子どもたちの取組の発表がどちらもすばらしかったです。自分たちの音楽、狂言に誇りをもっているのがよくわかりました。（市民）

○「こどもたちに伝えたい奈良」を通して、教育にとって本当に大切なことを聞くことができました。（市立小学校教員）

○今年参加した研究会の中で最も良かった。（市外教員）

○世界遺産学習といっても、自然や民話など学ぶ手段が多岐にわたっていることがわかった。実際の活動が聞けて、地域に根付いていることが重要だと思った。（大学生）

来年度は2011年11月26日・27日に開催する予定です。
ぜひご参加いただきますようお願いいたします。

分科会 Ⅰ

	（13：15～14：05）			指導助言
1	奈良市立六条幼稚園 園長　松本　知子 ＮＰＯ法人宙塾 黒飛　啓	「ひろげる　ひろがる 世界遺産学習 ー菜の花プロジェクトからー」	環境	奈良市立 神功小学校 校長　小松　一幸
2	奈良市立都南中学校 教諭　垣見　弘明 教諭　米田　力	中学理科１・３年 「世界遺産と科学」	環境	奈良教育大学 教授　森本　弘一
3	奈良市立済美小学校 教諭　西尾　美佳	２年 「わくわくさんぽ せいびの町」	生活科	奈良市立認定こども園 富雄南幼稚園 園長　中田　章子
4	奈良市立済美南小学校 教諭　竹本　貴美子	３年 「こんなにおもしろい 奈良公園」	国際理解	奈良市教育委員会 学校教育課 係長　石原　伸浩
5	奈良市立椿井小学校 教諭　中川　素	６年 「地域遺産を通して 世界とつながる学び」	情報教育	奈良教育大学 教授　谷口　義昭
6	奈良市立飛鳥小学校 教諭　松浦　慎	５年 「１３００年記念 参画プロジェクト」	文化遺産	奈良市立 朱雀小学校 校長　北村　恭康
7	小浜市立田烏小学校 教諭　大下　容子	５，６年 「ふるさとに支えられて ー体験学習を通してー」	郷土食	奈良教育大学 教授　岩本　廣美
8	桜井市立桜井南小学校 教諭　松本友里 教諭　笹岡佳子 （現・桜井市立大福小学校）	６年 「出会い・ふれあい・深め合い！ 地域の遺産と世界遺産」	文化遺産	奈良教育大学 准教授 渋谷　真樹
9	奈良市立三笠中学校 教諭　深澤　吉隆	中学１年 「奈良を創った、 繋いだ、守った」	多文化共生	奈良教育大学 教授　片岡　弘勝
10	奈良市立一条高等学校 教諭　藤村　智子	「ユネスコ青年交流 ２００９・２０１０」	文化遺産	奈良県教育委員会 学校教育課 係長　奥田　智
11	奈良教育大学 教授　田渕　五十生	「仲間と共に学び合った 奈良の世界遺産」	文化遺産	奈良教育大学 副学長 加藤　久雄

世界遺産学習会 Ⅰ

奈良文化財研究所　副所長　井上　和人　「平城京遷都の真実に迫る」

（コーディネーター：奈良教育大学　教授　淡野　明彦）

幼稚園

ひろげる　ひろがる　世界遺産学習

― 菜の花プロジェクトから ―

奈良市立六条幼稚園　園長　松本　知子

１．はじめに

本園は、薬師寺・唐招提寺が近くにあり、子どもたちの生活の一風景として目に飛び込んでくる。近くの大池のほとりに立つと、薬師寺の西塔・東塔が見え、両塔の間に東大寺を望むことができる。生活の一風景のなかに世界遺産がある、この地域の環境を生かして、「奈良で学んだことを誇らしげに語れる子どもの育成」に取り組んでいる。

奈良の子どもにもたせたい三つの誇り①「奈良にある素晴らしい文化財や伝統などに対する誇り」②「千年単位で文化財や伝統を守り、受け継いできた奈良の人々の営みに対する誇り」③「本物にふれて学ぶことができた自分に対する誇り」をもつには、幼児期に感動したり、不思議に思ったりして、心に残る豊かな体験をしておくことが大切である。

そこで、地域にある世界遺産の話を聞いたり見たりするだけでなく、ＮＰＯ法人宙塾の方に協力していただき「菜の花プロジェクト」に取り組むなかで、世界遺産を守り伝えてきた人々の気持ちを知ったり気付いたりしていくと考えている。また、資源が循環することに気付くとともに、そのことから資源の大切さや環境への気付きなど、いろいろなことに広がっていく芽を培うことができると考えている。

２．ねらい

- 「菜の花プロジェクト」を通して、世界遺産を身近に感じ、守り続ける心を育てる。
- 循環型の環境を知るとともに周りの環境に興味・関心をもち資源の大切さを知る。

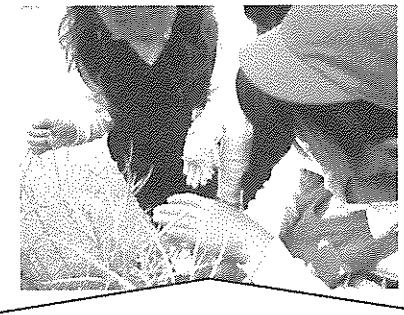
３．学習活動の概要

【菜の花を育てる　４月２７日】

菜の花が咲いてくると、子どもたちは花のにおいや形、種のでき方などに気付き興味や関心をもつ。また、「菜の花の種から油を絞って薬師寺に持っていくよ。」と、言っているが、「どうしたら油ができるのかな。」と、はじめての経験に期待をする。

子ども
「とってもいいにおいがするよ。」「ほらみて、豆もできてきたよ。」「油を作って薬師寺に持っていくからね。」

保護者
「ほんといいにおいやね。」「油ができるの、楽しみね。」



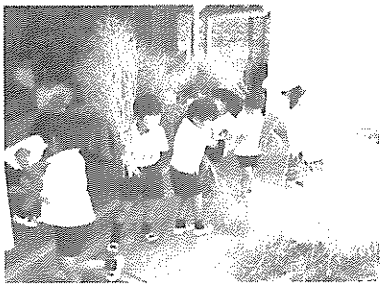
５歳児は、花びらが全部散った菜の花の葉についている青虫を見つけ、「きっと蝶々になるよ。」「黄色い蝶々かな。」と図鑑を出してきて調べ始める。「葉っぱを入れておこう。」と草を入れたが食べないことに気付き、どんな物を食べるのか、調べ試してみる。

【刈り取り乾かす　５月２４日～６月８日】

菜の花を刈り取り、毎日朝から天日に乾し、帰るときには保育室にいれる。雨が突然降ってきて、すぐに取り入れることもあった。また、最初は重かったが、乾くと軽くなることにも気付いてきて、毎日続けることで新しい気付きがあったり、「乾かす」ことの大変さを子どもたちなりに感じたりしてきた。

「重たいね。」
「一人では運べないよ。」
「乾かすのは大変。」

「だんだん茶色になってきたよ。」「少し、軽くなってきたね。」



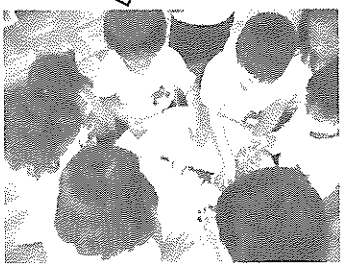
「乾くと軽くなるね。」
「一人でも持てるようになったよ。」「どうしてかな。」

【種おとし　６月８日】

十分に乾かした菜の花をみんなでふんだり、たたいたりして種をおとした。

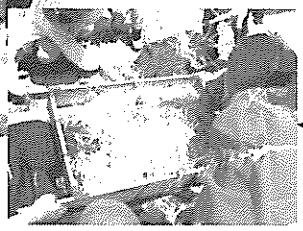
ＮＰＯ法人宙塾の方が、「とうみ」という機械や大きな「ふるい」を準備してくださり、新しい発見ができた。

「緑色の豆が黒くなっている。」
「ごまになったんかな。」
「ちがうよ、種だよ。」



「とうみ」の機械の仕組みに興味をもち、中をのぞき込もうとする。

「すごい、ゴミが飛んできた。」
「くるくる回すと、風がふいてくるね。」
「機械の中はどうなっているのかな。」



「種がいっぱい落ちてきた。」
「すごーい。」

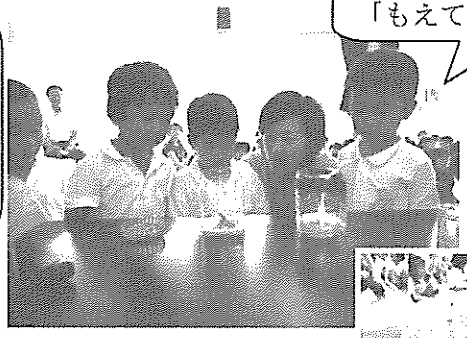
【油絞り　７月１日】

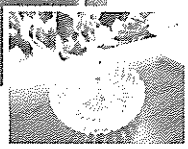
菜の花の種を機械に入れると、ポタポタと油が出てきて、子どもたちは、思わず「でてきた！」と大喜びをした。油かすをさわってみたり、においを嗅いだりして五感でいろいろなことを感じている。

絞りたての菜種油を使って、「灯心」に火がつくと「すごーい。」と興味深くみる。電気がなかったとき灯りに使っていた話をＮＰＯ法人宙塾の方にきいて、「昔のやね。」と何度も口にする。帰りに保護者にも「昔のやね。」と説明する様子が見られた。

「さらさらしてる。」
「ブロッコリーのにおいがする。」

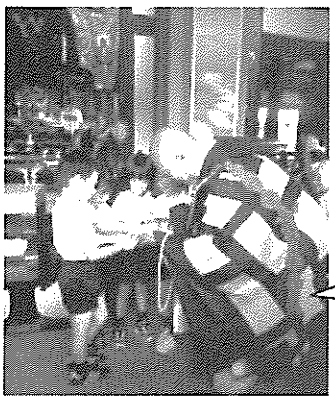
「すごい。」
「もえてる。」





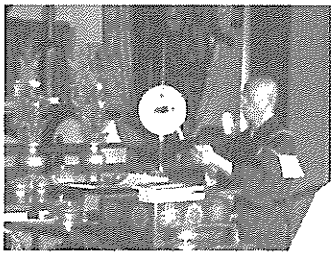
【薬師寺奉納　７月８日】

油になるまでに、大変手間がかかることを知った子どもたちは、「大切につかってほしいな。」と言いながら、薬師寺に届けた。薬師如来像を見て、「大仏様と手の形が違う。」東塔・西塔は「黒い塔とキンピカの塔。」「東塔の中にお花の絵が描いてあったよ、西塔の中も同じ絵だった。」などいろんな事に気付き友達と話している。



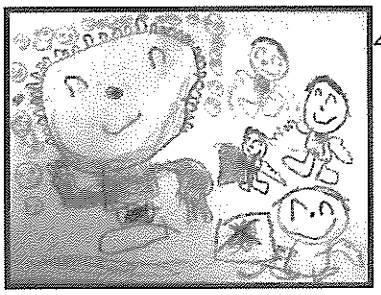
「六条幼稚園で作った油です。どうぞ使ってください。」

奉納した油をすぐに「燈明」に使ってくださいました。



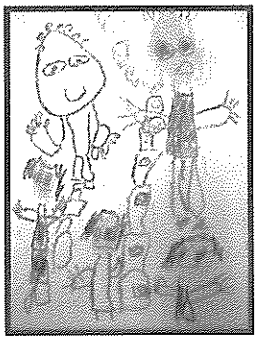
【絵に表現したりお話づくりをする】

子どもたちは、奉納式に出て今まで味わったことのないドキドキ感と、お礼を言ってもらったうれしさを絵に表現したり、みんなと話し合ってお話を考えたりしている。



「遠足で見た大仏さんと手の形が違うよ。」

「油を渡すと大切に使うよと喜んでもらって嬉しかった。」



<お話づくり>
・出てくる動物や場面や言葉を考えたり、「エコ」について知っていることを言い合ったりしている。

【保護者の声】

- 菜の花の種落としは、家で一生懸命に再現して話してくれた。頑張ったことが心に残っているようだ。家族も知らないことなので興味深くみんなで聞いていた。
- 家に帰って「昔のだよ。」と言ったり、「種を少しずつ入れると、油がぽとぽと落ちてきて、かさかさのものが出てきた。」と油絞りの話をしたり、「薬師寺の天井に絵があって、火が燃えているような花が描いてあった。」と見てきたことを真剣に話す姿を見て、自分たちも参加したいと思った。
- 昔のことや薬師寺の建物（世界遺産）に興味をもち、仏像や建物を見て感動していた。小さい子どもにも遺産の素晴らしさがわかるんだなぁと、本物を見せる大切さを痛感した。
- あんなにたくさんの種があったのに、とれた油は少しだったと聞いて、油の貴重さを知った。買い物に行き油を買おうとすると、「菜種油にしよう。」と言う。良く覚えていると感心した。
- 薬師寺の近くに住みながら、足を運ぶことのない場所だったが、これを機会に薬師寺や奈良の世界遺産を身近なものにしていきたいと思った。

４．成果と課題

・・・ひろげる・・・

○　菜の花を育てる・刈り取る・乾かす・種落としをする・油絞りをする・油粕を畑にまく・耕す・種をまくという一年間の流れを経験する中で、科学的なことや循環型環境などいろいろな学びにひろげることができた。また、菜の花から絞った油を使って灯心に火がつけられると、驚きと薬師寺に奉納することを楽しみにする気持ちが高まった。

○　奉納式に出席したことで、薬師寺の塔を見て、１３００年の古さを肌で感じたり、薬師如来と大仏の違いに気付いたりするなど、心に残ったことを友達と話したり絵に描いたり、家庭でも話題にしたりするなど人に伝えようとする気持ちが育ってきた。

・・・ひろがる・・・

○　子どもたちが園での経験を家庭で伝えたり保護者や地域の方と一緒に経験したりすることで、保護者や地域の方が世界遺産学習や環境教育について知りたいと思うようになり、ＥＳＤの大切さに気付いてきた。こうした幼稚園のＥＳＤの取組が、保護者や地域の方にひろがり、まず、大人がＥＳＤの推進の担い手となることが大切と考えている。

・・・今後・・・

○　先に取り組んでいる東市小学校や、鼓阪北小学校の取組を参考にしてひろげていきたい。

中学校理科

世界遺産と科学

奈良市立都南中学校　教諭　垣見　弘明
教諭　米田　力

1. はじめに

今年、本校はユネスコスクールとして加盟承認され、生徒会をはじめ、教科や学校全体として活動を進めているところである。一昨年度より取り組んでいる「エコキャップ」活動は、校区や市内の小中学校とも連携を取りながら地域としての活動となっている。また、９月には、ユネスコ協会代表団が来校し、本校の活動を紹介するとともに、全クラスで来校者と生徒が昼食をともにするなどして交流をはかる機会があった。いずれも、人と人とのつながり、そして、広がりが礎となり、生徒にとって大きな意味をもつものであると考える。

「奈良で学習できる」、「奈良で生活している」ことに重点を置き、「世界遺産学習」を教科で取り入れている。都があった奈良時代の位置で本校は、朱雀大路より東の八条大路から九条大路までを校区に含み、「東九条町」「西九条町」「五徳池」「姫寺」などの地名が残っている。

2. 学習内容

(1)「みかさの山に出でし月かも」(地球と宇宙)中学3年

― 天体の動きを観察しよう(月の運動と見え方) ―

天体の動きを知るために、自分の目で天体を観察する必要があるが、太陽以外の天体の場合は、授業時間中に観察することは難しい。そこで、生徒自身が自分の家から見る天体として月を選び、自分が住む場所から見える地形や建物・道路等をもとに方位を確認し、それらの目印を基準にして観察することができると考えた。また、市内のいろいろな場所から比較的見つけやすい目印として、若草山と生駒山も取り入れた。

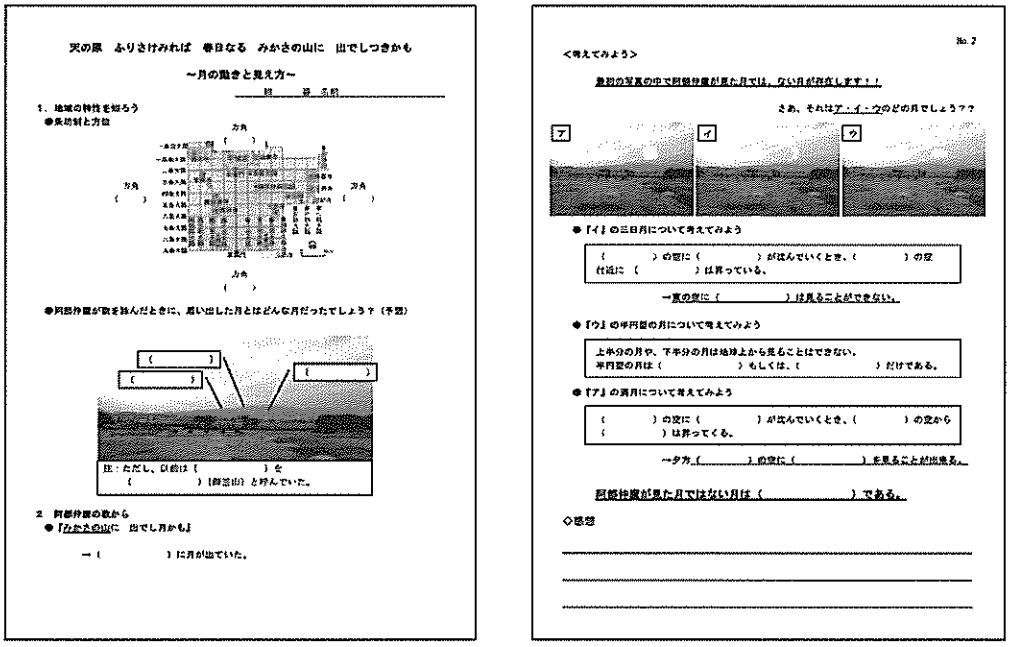


図1　授業で使用したワークシート

主な学習活動（2時間）　　全18時間

1．星や月の動きを予想してみよう。

2．自分のいる位置の方位を知ろう。
　①目印を見つけてみよう。
　②大極殿を見つけてみよう。
　・大極殿の大極は北極星を意味します。
　・平城京からは東に若草山、西に生駒山が見えました。
　・平城京では東西と南北に道が作られていました。

3．月の動きを観測しよう。
　阿倍仲麻呂　「天の原　ふりさけ見れば　春日なる　　みかさの山に　出でし月かも」
　の歌にあるようなみかさ山（御蓋山）に見える月を記録（予想して記入）しよう。
※この歌の山は御蓋山（みかさやま）をさし、現在の三笠山は若草山をさす。

4．月の動きと見え方についてまとめよう。

5．シミュレーションによって想像した月がどのようなものであったか確かめよう。
　みかさ山にかかる満月を例にとって、阿倍仲麻呂が当時見たかもしれない月をシミュレーションによって確認しよう。

6．満月が東の空に見えるのはいつか考えよう。
　満月は時間によってどの方向の空に見えるか確かめよう。

7．時間の経過と月の動きを確認し、自分の家からどの方向に月が見えるのかを考えて、観察しよう。

◇ 成果と課題

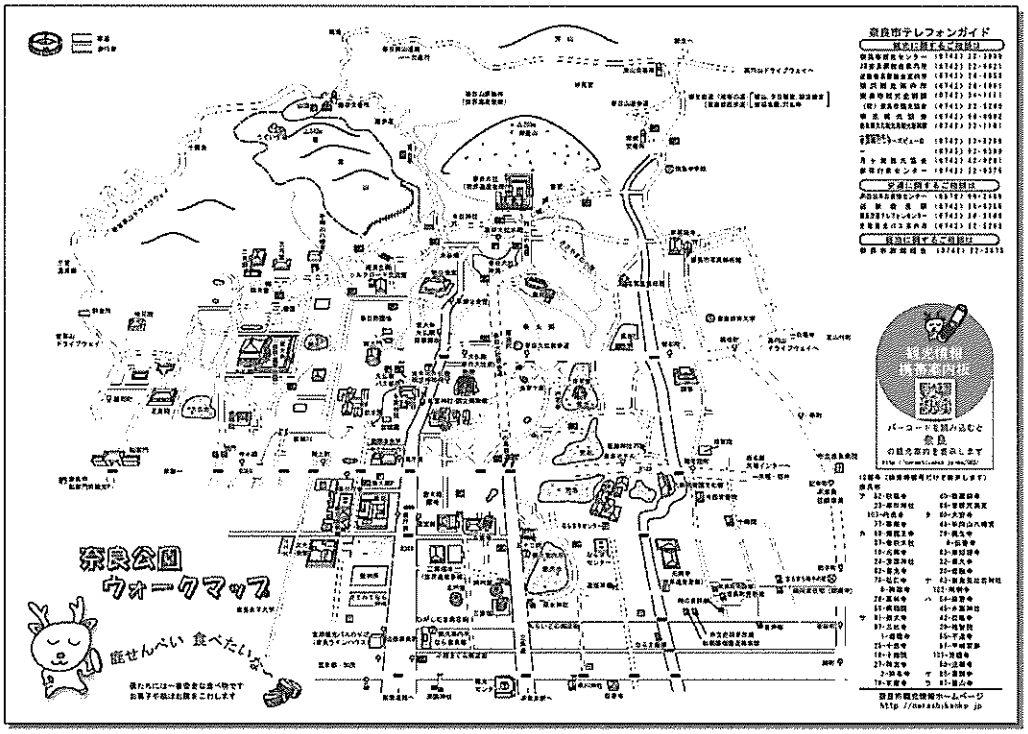
○　実際には見えない月やその時間的な移り変わりも、コンピュータなどの機器を使うことで、生徒たちにわかりやすくとらえることができるのではないかと考える。

○　天体の学習では、授業の中で観察することができない場合も多い。教科書の写真を見るだけで終わることも考えられるため、自分で観察する方法を身につけることも重要であると考える。

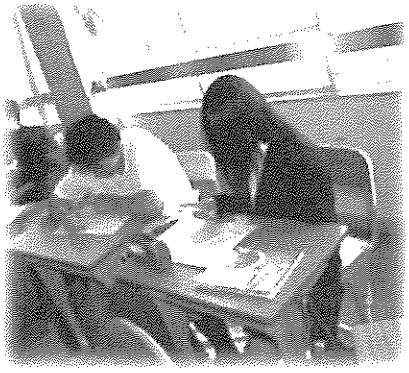
阿倍仲麻呂は奈良時代の人。717年に19歳で留学生として第9次遣唐使船で唐の長安に渡る。唐で科挙に合格し、玄宗皇帝に仕える。753年に帰国を許されるが、船が難破して安南（ベトナム）に漂着する。その後、唐の高官となるが帰国はできなかった。

（2）「岩石は語る」（大地の成り立ちと変化） 中学１年

— 岩石の分類とそのつくり —



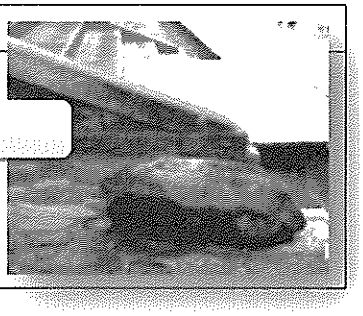
奈良公園やその周辺では、多くの石碑や、礎石、石垣が見られ、その岩石に注目し、分類とそのつくりについて学習を行う。東大寺大仏殿や興福寺五重塔など、木材の利用に注目することに加え、礎石や石碑など歴史を伝える岩石にも注目し、調べることにした。東大寺周辺に使われる岩石には、大阪や生駒から運ばれてきたと考えられる岩石がみられる。また、春日山石窟仏周辺では、石切り場の跡もみられる。このように、岩石が伝える歴史についても学びを広げていきたいと考える。



主 な 学 習 活 動（２時間）　　全 19 時間

１．この岩石は、どこにあるでしょう。

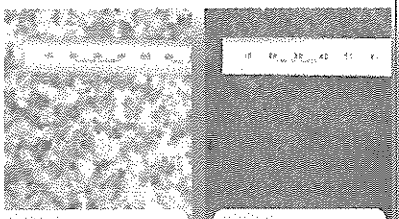
・大仏殿周辺・二月堂周辺



２．この岩石を観察して気付いたことをまとめよう。

・岩石の色　　・表面の模様　　・岩石の形

3．岩石について気付いたことを発表しよう。
・黒っぽい、白っぽい　・光沢がある　・しま模様がある　・黒と白の斑点がある


花崗岩　安山岩

4．花こう岩と安山岩の違いを調べよう。

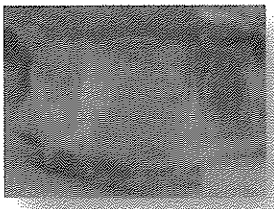
5．石碑を観察しよう。
・石碑の文字が読みにくくなっている。
・岩石の表面にひびが入っていて、ざらざらしている。

6．奈良公園周辺の石碑を調べ昔の様子を想像しよう。
・西大門の礎石　・雲井坂と轟橋の石碑
・二月堂、三月堂周辺の岩石
階段の岩石もよく見ると何かある。

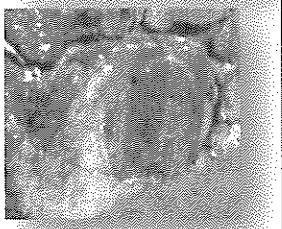
県庁東側西大門跡と二月堂

7．大仏殿前の岩石を調べよう。
・大仏殿へ続く石畳には、いろいろな国で取れる岩石が埋め込まれている。
（シルクロードとその周辺の国々）

8．春日山原始林の岩石（石仏）を調べよう。



9．若草山周辺の岩石を調べよう。
・三笠山安山岩（溶岩流として地表に出たもの）


上：地獄谷石窟仏
下：大仏殿周辺石垣

10．まとめ
身近な所に使われている岩石や、地形を見てどのようなことがわかるか考えてみよう。

◇成果と課題

大仏殿、二月堂周辺の岩石について学習したが、春日大社や興福寺周辺の岩石については、生徒自身が興味・関心をもって、写真を撮って、分類するなどの学習ができる。また、奈良公園周辺だけでなく、学校近くの社寺にある岩石を調べてもよいと考える。見えている岩石や地形などから、どのようなことがわかるのか発展した学習を行うことができる。

３．まとめ

授業時間の中で、奈良公園周辺で観察を行うことは困難で、学年または学校行事として行わなければならない。しかし、シミュレーションや写真などを用いて、理科の学習内容と連環することで、実際に生徒が多くの文化遺産、自然遺産にふれたときの興味・関心も高まるのではないかと考える。また、校区内の学習教材を取り上げることで、奈良時代以降の人々の生活や文化にふれることは十分に可能である。

第２学年

わくわくさんぽ　せいびの町

奈良市立済美小学校　教諭　西尾　美佳

１　はじめに

校区には、昔からの町並みが残る奈良町を含み、古都奈良を感じるところがたくさんある。一方、JR 奈良駅や近鉄奈良駅にも近く、近年はマンション建設も進み、比較的新しい店や住宅も多い。

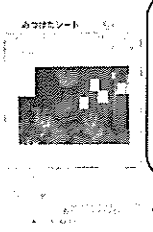
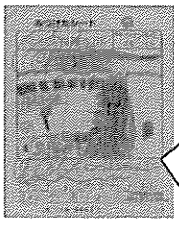
せいびの町をさんぽすると、町の良さだけでなく、人々の優しさにもふれることができる。これが、世界遺産学習の第一歩であると考える。自分の町の「すてき」に気付いた子ども達は、やがて奈良町、奈良公園、その他の世界遺産の「すてき」にも気付くことができると考える。

２年生の子ども達は、１年生の頃と比べると、行動範囲も広がってきており、自分で町のすてきな場所をたくさん見つけることができてきている。さらに、１学期にみんなで実際に町探検に出かけると、いつも歩いている道であっても「ここにこんなものがあったんだ。」と新しい発見があり、「もっとすてきな場所を知りたいな。」「みんなにも知らせたいな。」と意欲をもって学習を進めることができると考えられる。自分で選んだ「すてき」を伝え、友達の調べた「すてき」を聞き、交流し学び合いながら、「出会う」「深める」「広げる」「ふり返る」という４つの大きな学習の流れに沿って、そこから、自分の町を大切に思う気持ちを育てていきたいと願っている。

２　ねらい

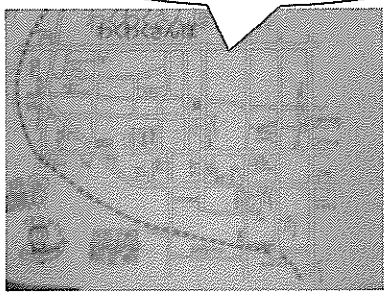
- せいびの町にあるすばらしいもの、人とのふれあいを楽しむことができる。（関心・意欲・態度）
- せいびの町にあるすばらしいもの、人から学んだことを友達やおうちの人に伝えるために工夫して表現することができる。（思考・表現）
- せいびの町にあるすばらしいもの、人との関わりを通して、せいびの町の良さに気付き、愛着をもつことができる。（気付き）

３　学習活動の概要（全６０時間）

主な学習活動	学習への支援	評価
出会う　**見つけたよ、せいびの町のすてきな場所（２０）**　＜１学期＞		
○　自分が見つけたすてきな場所を紹介し合う。  このたい焼きやさんは、一丁焼きというめずらしい焼き方で焼いています。	○　友達が見つけてきたすてきな場所から校区の魅力について関心をもてるように助言する。  155 年も前からやっているさとうやさんを見つけました。お米で作った水あめがありました。	・　友達の発表を聞き、せいびの町に関心をもっている。（関心・意欲・態度）

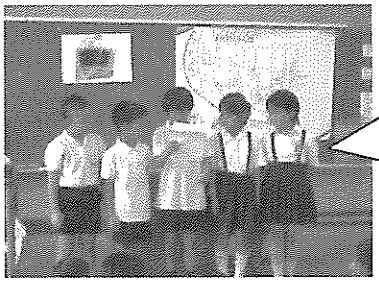
○ 校区をさんぽする。（学年２つに分かれる。A；1.2 組、B；3.4 組）

地図を持って出発！



魚屋さんでは、タコを触らせてもらったよ。ぬるぬるしているな。とても新鮮だね。

○ さんぽをして見つけたすてきスポットを紹介し合う。（1.4 組、2.3 組）

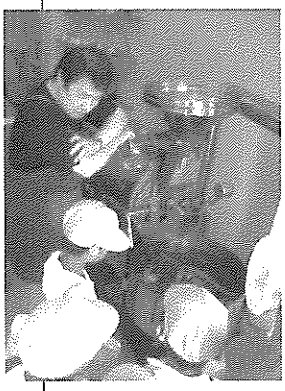


ぼくたちは、井戸のある八百屋さんについて、発表します。その井戸の水は昔、飲み水として使われていたそうです。

○ 児童の目に付きにくいところは指摘したり、人々の思いにふれられるようにしたりする。

せいびの町には、古いお寺もたくさんあるね。ここは、徳融寺というお寺だよ。

コーヒーの豆はこんな風にして細かくするんだね。挽きたてのコーヒーはいい香りがするな。



○ 分かりやすく伝えるために発表方法を例示する。

・ せいびの町の様子に関心をもち、進んで関わろうとしている。（関心・意欲・態度）

・ 友達に伝えるために工夫して表現している。（思考・表現）

子どもの感想より

- 発表を聞いて、行ったことがなかったところに行ってみたくなりました。
- いつも通っていたのにそんな場所があるなんて知りませんでした。
- 知らないところが多くてびっくりしたし、友達の発見を聞いて楽しかったです。

深める

もっと知りたいな、せいびの町（８）

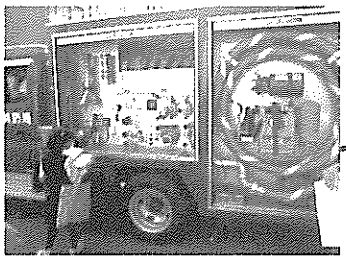
○　さんぽと発表をもとに、自分が行きたい場所を選び、１４のグループに分かれ、探検する。

音声館　生涯学習センター
徳融寺　竹細工　わがしや
さとうや　奈良町格子の家　魚や
消防署　お風呂や　ペットショップ
たいやきや　うどんや　すしや

○　人々の思いや願いにふれられるように、見学する視点や質問事項を整理するように助言する。

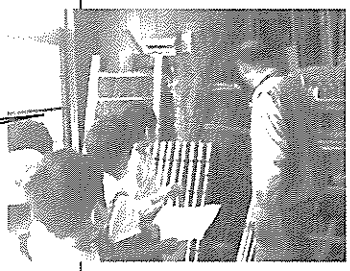
※　見学する１４ヶ所は、子どもの希望と地域の人との交渉により決定
　様々な場所（商店、公共施設、寺社など）に目を向けられるように助言

・　自分なりの思いをもって意欲的に探検している。（関心・意欲・態度）
・　探検先で知りたい事や体験したいことを考えている。（思考・表現）



消防車の中はこんな風になっているんだ。ホースは３０ｍもあるんだって。

一つ一つおじさんが手作りしているそうです。大きな竹ぼうきだな。竹のにおいがするよ。



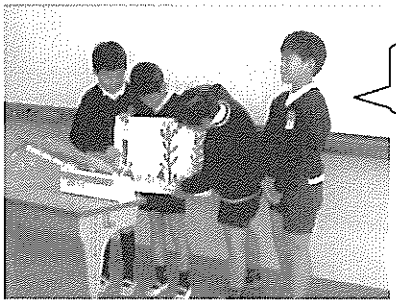
おすしをにぎらせてもらったよ。おじさんは、手早くすべて同じ大きさににぎっていたよ。

座禅は足がしびれるな。お坊さんのお話も聞いたよ。

広げる

みんなに伝えたいな、○○のこと（３０）

○　「わくわくさんぽ」発表会。

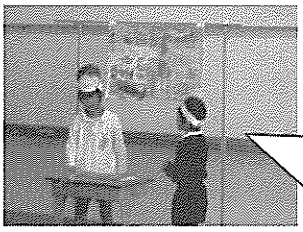


竹には、色々な種類があります。竹の子から大きな竹に成長していきます。

消防車の中には、ベッド、吸引機、ＡＥＤなどがあります。２４時間交代で働いて、私たちを守ってくれています。

○　分かりやすく伝えるために発表方法を例示する。

○　探検先の人々のうれしいことや頑張っていることを思い出させる。



魚屋さんでは、魚のさばき方を教えてもらいました。おじさんは、「みんなに新鮮な魚を食べてほしい。」と言っていました。

・　友達やおうちの人に伝えるために工夫して表現している。（思考・表現）
・　町の様子や働いている人の思いや願いに気付いている。（気付き）

ふり返る

ありがとう〇〇さん、大好きだよせいびの町（２）

〇 お世話になった人にお礼の手紙を書き、学習をふり返る。

お店にかざっていただきました

〇 探検できた喜び、探検して分かったこと、お世話になった人々への感謝の気持ちを書くように助言する。

・ せいびの町の良さに気付き、愛着をもっている。（気付き）

子どものふり返りより

・ 町の人に**喜んでもらいたくて毎日がんばっている**ことが分かりました。
・ **昔ながらの奈良の雰囲気を大事に**して商売をしているそうです。
・ **この人たちのおかげで、私たちは安心して暮らせる**んだなと思いました。

４ 成果と課題

〇 地域の方々や保護者の方々の協力もあり、実際に「見る・触る・やってみる」体験をさせていただけたことで、せいびの町の人の思いにふれたり、町のよさに気付いたりすることができた。また、見学を通して、子どもたちは自分が選んだ「すてき」な場所がより好きになり、みんなにも知らせたいと思えるようになり、意欲的に学習することができた。さらに子どもたちは、せいびの町にはすばらしい場所がたくさんあることが分かり、地域の人とのふれ合いを通して、せいびの町のよさを知り、より身近に感じられるようになった。

〇 また、個人で発表したり、グループで発表したりして、自分が体験したり見たりしてきたものを周りの人に伝えることを繰り返すことで、絵を描いたり物を作って実演してみせたりする等、発表方法にも工夫が見られた。回を重ねるごとに、より分かりやすくしようと様々なアイディアが子どもから出てくるようになった。そして、友達の発表を聞くと、「こんなふうに発表するとわかりやすいんだ。」「この場所には、こんな楽しいひみつがかくされていたんだ。」など、発表を聞いてよかった、楽しかったと実感でき、お互いの学びを共有できたようである。

〇 保護者の方々にも、子どもたちの発表を通して、せいびの町にはたくさんすばらしい場所があること、町の人々の思いを知らせることができた。また、子ども自身が体験するよさを感じられたという感想をもつ方も多かった。家族で出かけてみたいと、大人もせいびの町に改めて目を向けるよい機会になった。

〇 「身近なところに実際行ってみると知らないことがたくさんあったことに気付き、他のところももっと知りたいな。」と意欲につながる。本単元のように、自分の住んでいる身近な地域の人の優しさや思いに直接ふれることで、せいびの町の良さを実感し、好きになることができると思う。このように「せいびの町に親しむ」「せいびの町を好きになる」ことが、奈良に親しみ、奈良を好きになることになり、低学年における世界遺産学習の第一歩であると考える。

第３学年

こんなにおもしろい奈良公園

奈良市立済美南小学校　教諭　竹本　貴美子

１．はじめに

世界遺産学習と言えば、高学年の学習というイメージがあるが、３年生でも取り組める世界遺産学習について考えてみた。

本校の３年生の児童にとって、奈良公園は普段から家族と訪れる場所として親しみがあり、公園内にある興福寺の五重塔や東大寺などは、身近な存在である。しかし、それらが世界遺産として大切にされているものであるということは知らない。そこで、奈良公園には世界遺産があり、それを世界中から見に来る人たちがいるということを知ることから学習を始めた。

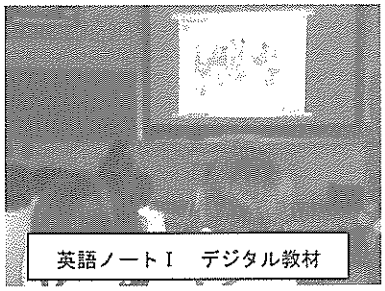
最初に、世界の国々の名前や挨拶を使ったゲームをすることによって、それぞれの国にそれぞれの文化が存在することを感じ取らせたうえで、奈良公園の世界遺産に目を向けさせた。そして、「世界の宝として大切にされているものが奈良公園にある。」ということを意識させて、調べ学習を始めた。また、調べ学習を始める際には、誰に伝えたいかを最初に児童と相談して決めておき、目的をもって進めることを大切にした。奈良公園を詳しく調べることによって、今まで以上に愛着をもち自分たちの住む奈良を誇りに感じ、大切にしたいという気持ちを育てたいと考える。

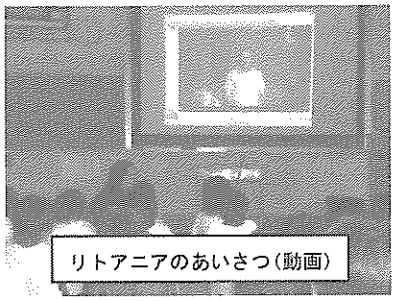
２．ねらい

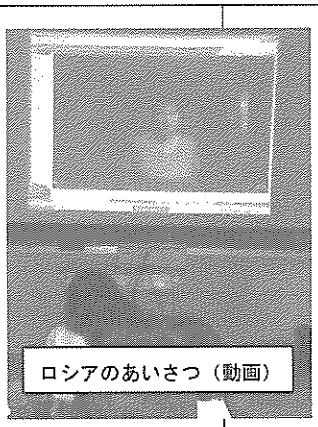
- 世界には多くの世界遺産があり、奈良公園周辺にも世界遺産が存在することを知る。
- 奈良には外国からの観光客が多く訪れることに気付き、様々な国、文化や言語に興味・関心をもつ。
- 奈良公園周辺のことを調べ奈良のよさに気付き、愛着をもち大切にしようとする態度を養う。

３．学習活動の概要（全２８時間）

主な学習活動	学習への支援	評　価	備考
１．写真で発見！（１時間） ・写真（奈良公園にある外国語表記の案内板）を見て気付いたことを話し合う。	 春日大社と書いてある看板に英語が書いてある。外国の人も読むのかな。	・外国語の文字に興味をもって参加している。	写真、ワークシート
２．世界の国の名前や挨拶を知ろう。（１時間） ・英語ノート１のデジタル教材で、世界の国の名前と挨拶を知り、一緒に挨拶をする。	・英語ノートのデジタル教材だけでなく実際に外国の人が挨拶をしている動画も使って身近に感じられるようにする。	・積極的に様々な挨拶を言おうとしている。	英語ノート、デジタル教材、挨拶の動画


英語ノートⅠ　デジタル教材

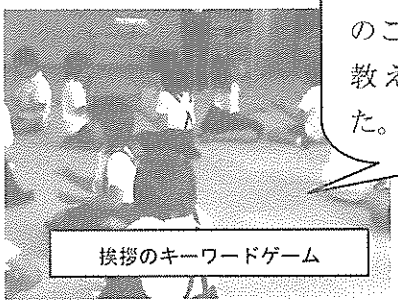

リトアニアのあいさつ（動画）


ロシアのあいさつ（動画）

・世界の国の名前と挨拶でゲームをする。

グループ分けのゲーム

背中に各国の挨拶が書いてあり、同じ国同士が挨拶で呼び合って集まる。


挨拶のキーワードゲーム

今日のじゅ業で初めて知ったあいさつや国のことを、お母さんに教えようと思いました。

あいさつは、日本語と英語しかないと思っていたので、他の国のあいさつもいっぱい知ることができてよかったです。

グループ分けゲームのカード

英語ノート１指導資料ｐ11 参照

3．世界遺産について知ろう。
（１時間）

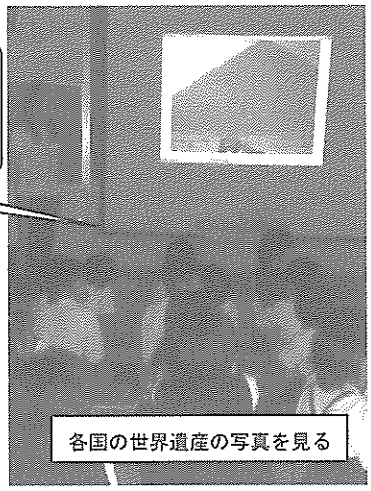
・色々な国の世界遺産を知り、ワークシートにまとめる。

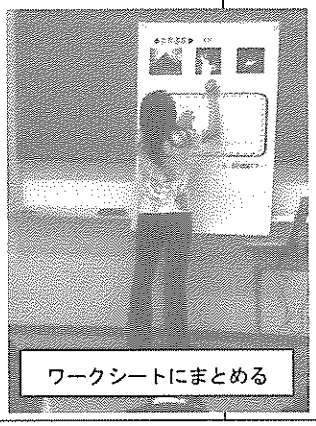
・世界遺産は、比較的有名で分かりやすいものを選び、プロジェクタで写真を見せる。世界地図で国も確認させる。

・身近な奈良公園にも、世界遺産があることに気付いている。

世界遺産の写真、ワークシート、世界地図

私たちの近くに世界遺産があるなんて知らなかったです。


各国の世界遺産の写真を見る


ワークシートにまとめる

4．奈良公園で興味や関心のあるものを選び、グループに分かれて調べよう。 （２時間） ・奈良公園から思い浮かぶものを挙げて、その中から自分が調べたいものを選ぶ。 ・調べたことを誰に知らせたいか話し合う。 ・テーマごとにグループに分かれ、調べる。	・できるだけ多くの選択ができるように、思い浮かんだものをたくさん挙げさせる。 ・おうちの人 ・奈良公園を知らない外国の人 ●グループ● 春日大社、しかせんべい、しか、興福寺、若草山、お土産、人力車、仁王、大仏、奈良のキャラクター、自動販売機の募金	・積極的に調べている。	
5．奈良公園に行こう。 （５時間） ・実際に奈良公園で「写真で発見！」で見付けた表示を確認する。	・「写真で発見！」で使った表示を確認させるため、写真付きのしおりにチェックを入れながら回れるようにする。	・自分が調べたいものを確認しながら奈良公園の見学をしている。	
・奈良公園（五重塔、猿沢池、鹿苑、春日大社、若草山、東大寺）を見学する。鹿苑では、愛護会の方の説明を聞く。	・建物や風景など、児童が興味・関心をもったものや資料になりそうなものを写真に撮る。		デジタルカメラ
6．調べてまとめよう。 （１０時間） ・グループごとに調べてまとめる。 ・発表の練習をする。	・電話インタビューの場合、事前にお願いをする。 ・資料の読み取りが難しい時は支援する。	・目的に応じた表現を工夫しながらまとめている。	
7．学年発表会をする。 （２時間） ・お互いに発表を見せ合って、よい点や気付いた点について話し合い、活動を振り返る。		・グループごとに調べた事を分かりやすく伝えようとしている。 ・他のグループのよい点を見付けようとしている。	

８．内容の修正と発表の練習（２時間） ・学年発表会での反省を元に、調べ直したりまとめ直したりする。	・発表の改善ポイントをアドバイスする。	・より分かりやすい発表を目指して工夫をしている。	
９．おうちの人に発表しよう。（１時間）	お母さんに「自動販売機の発表がんばったね。A君のお母さんとBさんのお母さんが、自動販売機の事を知らなかったから発表を聞いて驚いていたよ。」と言ってもらえて、すごくうれしかったです。	・学年発表の時の反省を生かして発表している。	
１０．外国の人にも知らせよう。（２時間） ・スペイン在住のミコラスさん一家に手紙を送る。 	・必要に応じて英語表記やローマ字表記を教える。 	・相手意識をもって、自分が伝えたいことを選んで書いている。 ミコラスさん一家	
１１．振り返る。（１時間） ・ミコラスさん一家からの返事を読む。 ・返事をもらった感想と、これまでの学習についての振り返りをする。	・手紙の返事を和訳して読む。 ●手紙がスペインから来てびっくりしました。うれしかったです。 ●私たちの町にある奈良公園のことを色々と知ってもらえてうれしかったです。ぜひ、奈良公園に遊びに来て欲しいです。	・これまでの学習を振り返り、奈良のよさに気付き、愛着をもち大切にしようとしている。	

４．成果と課題

- 自分たちが発信したものに対して反応があった時、子どもたちは学習したことに意味があると実感した様子だった。スペインから手紙が返ってきたことによって、「奈良公園のことを知ってもらえてよかった。」「他の外国の人にも知ってもらいたい。」と、奈良を誇りに思う気持ちがより強くなった。そして、子どもたちにとってスペインという国がとても身近な存在になった。この感動体験と達成感は、今後の世界遺産学習の意欲に繋がると思われる。
- 調べ学習の際に、寺社等の資料に難解な内容のものが多く、３年生にとっては理解しづらかった。児童向けの資料の開発が今後の課題である。

第６学年

「地域遺産を通して世界とつながる学び」

―わたしのまちのたからもの―

奈良市立椿井小学校　教諭　中川　素

１．　はじめに

本校区(椿井小校区)は、奈良市の中心的な地に位置しており、「ならまち」の町並みや、世界遺産に指定された興福寺や元興寺をはじめとした古社寺や奈良公園・猿沢池等の数多くの観光名所を有している。奈良国立博物館、奈良県文化会館、奈良女子大学等の文化的施設も多い。また、ＪＲ奈良駅や近鉄奈良駅、奈良県庁や銀行、墨・筆等の伝統を誇る老舗や観光土産物店、飲食店、さらに三条通りや東向き、餅飯殿等の商店街があり国際観光都市として経済・文化の中心地となっている。したがって、本校児童は、それら建造物や施設をはじめ、「春日若宮おん祭」や「采女（うねめ）祭」・「薪能」など、数多くの伝統的な行事や文化的な催し物に接する機会も多く、世界遺産教育にとって非常に恵まれた環境である。

本校は「国際理解教育、環境教育、特別支援教育（きこえの教室)」を学校教育における３つの柱と位置づけて教育活動を進めている。特に国際理解教育では「世界にはばたく椿井っ子」という教育目標のもと総合的な学習の時間を中心に、他教科の学習ともリンクさせながら、下記の３つの視点から学習活動を進めている。

（１）自分の地域や他の地域、文化に関心をもち、それを理解し尊重することのできる能力や態度を育てる。(自国、他国の文化理解)

（２）自分と異なる生き方や考え方をする他者の存在を認め、尊重することのできる能力や態度を育てる。(人間理解、人間尊重)

（３）自分の考えをはっきりと表現したり、主体的に意志を通い合わせたりすることのできる能力や態度を育てる。(自己表現、コミュニケーション能力)

そこで子どもたちにとって国際理解教育を机上の知識理解だけでなく、具体的な体験活動を取り入れてアプローチしていく学びが大切であると考える。

低学年の生活科や中・高学年の総合的な学習の時間では、これら地域の大切な宝物を教材として体験学習や調べ学習などさまざまな学習活動に活かしている。そして、この学習活動を通して、子どもたちが、世界遺産に関心をもつことと共に、自分たちの住む地域を愛し大切にする心を身につけることをねらいとしている。

また、本校では国際理解教育を１年生から行っており、ゲームや歌など体験活動を通して楽しく活動している。高学年では英語を使った自己表現と発表活動に取り組み、本物のコミュニケーション活動を行うことを目指している。

２．　ねらい

（１）　身近にある世界遺産の学習を通して、「私たちが暮らす奈良のよさを多くの人たちにもっと知ってもらいたい。」という思いをもち、まとめたことを発信することにより、自分たちの町のすばらしさを再認識する。

（2）　フォトストーリーの制作を通して、「映像・言葉・音楽」を効果的に使い「より分かりやすい」「より相手に印象づける」「より説得力を増す」というメディア表現を追求する活動を行い、子どもたちの表現力を育成する。

（3）　異年齢集団と交流を行うことで、自分たちとは違った考え方や感じ方があることに気づき、よりよいものを協働で作り上げる。

（4）　目標を「海外に向けて発信すること」にすることで、国際社会への関心を高め、意欲的に自己表現し、発表活動に取り組むことができる。

３．学習活動の概要

椿井小学校では、高学年の総合的な学習の時間（椿井っ子チャレンジタイム）を中心に各教科の時間において、身近に世界遺産等の文化財を感じることができる校区の特色を活かし、フォトストーリーを活用してメディア創造力の育成に取り組んでいる。本年度はそれに加え、国際理解教育とリンクさせ、海外とつながりをもつことはできないかと考えた。また、奈良市教育ビジョンにおいて「奈良らしい教育の推進」「奈良で学んだことを誇らしげに語れる子どもの育成」が示されている。

これらのことを踏まえ、外国語活動で身に付けた英語表現を使って自分たちが学習した奈良の良さを海外へも発信し、広く国際社会に目を向けさせていきたいと考えた。そして、以下のような流れで学習に取り組んだ。

（1）学習めあての設定

奈良の世界遺産や自分たちの町を紹介するため、「フォトストーリー３」を使って、写真（映像）とナレーション（言葉）、音楽（音）で綴る話（フォトストーリー）を作り、発信することにした。

（2）伝えたいテーマの設定

伝えたいテーマについては、奈良の世界遺産である「古都奈良の文化財」に加えて、「奈良漬」「奈良うちわ」「奈良筆」「ＪＲ奈良駅旧駅舎」「１３００年祭」「吉野杉の透かし彫り」「伝統工芸」の意見が子どもたちからあり、それらをテーマとして取り上げた。

（3）取材・調べ活動

インターネットや本で調べるだけでなく、それぞれがデジタルカメラを持って現場に行って取材を行った。「古都奈良の文化財」については、第５学年で行った世界遺産現地学習やボランティアガイドの方々から学んだことをもとにまとめた。また、これまでに撮影した写真をもとに、「写真集フォルダ」を作ることにした。なお、インターネットや本からの情報転用についても指導を行った。

（4）作品概要の決定

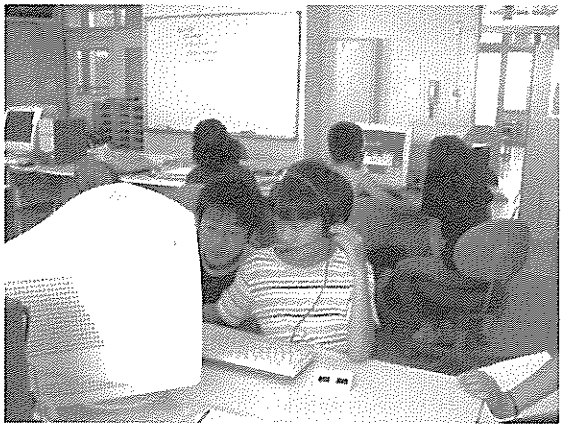
取材したことをもとに、自分たちの作品のねらいを決めるために話し合った。そして、おおまかなストーリーを作りながら、「写真集フォルダ」から必要と思われる写真を選び出し、それらの中から６枚に絞り込んでいく作業を行った。

（5）ナレーション原稿作り

（4）で作成したストーリーをもとに、6枚の写真にナレーション原稿を書き加えた。そして、役割を分担しそれぞれが書いた原稿の検討を行った。原稿の検討には教師も入り、「自分たちの思いを伝えられるようになっているか」「写真の順番は適切か」「やさしい言葉を使って分かりやすい書き方になっているか」「最初と最後の場面の表現は効果的か」「文章表現方法は適切か」など細かなところまで検討し修正を加えていった。

（6）編集1（映像効果、ナレーション録音）

本番の録音に向けてナレーションの練習を行った。その際、写真をプレビュー画面で何度も確かめながら、アップやルーズの組み合わせを考えた。



（7）編集2（BGM選定）

作品に音楽を挿入した。以前、本校で関西フィルハーモニー楽団とワークショップをもったときに演奏・録音していただいた曲の中から子どもたちが映像にふさわしい音楽を選んだ。

（8）発表会

中間発表の形で土曜参観に発表会を行った。参観された方から頂いたコメントの中には厳しい意見もあり、それをもとに作品のブラッシュアップを行った。

（9）海外発信に向けて

今年度、ＡＰＥＣ観光大臣会合が奈良で開催され、「青少年交流プログラム」に本校6年生が関わらせていただいた。そのとき、（8）の作品を手渡したが、英訳しなければならないことに気づいた。そこで、県立奈良高等学校ESS部との連携を行うことにした。この作品を高校生に見てもらい、感想とアドバイスをもらった。また、ナレーションを高校生に英訳してもらい、現在、英語版「わたしのまちのたからもの」を作成中である。

（10）海外交流

出来上がった作品は海外の学校に送り、見てもらい、評価をしてもらいたいと考え、相手の学校として韓国の学校を選んだ。あえて英語が第一言語でない国を選んでいる。目的は英語を使って交流することである。お互いの国の第一言語ではない英語を使い、作品の評価だけでなくお互いのことやそれぞれの国の文化のことを伝え合いたい。その手段としてテレビ会議システムを使うことを考えている。

4. 成果と課題

今年度、活動をするにあたり世界遺産ではないが、伝統産業などの地域遺産が奈良のよさではないかと子どもたちは考え、身近にあるものを中心に調べることができた。

フォトストーリーによる作品の制作過程において、初めのうちは考え方や意見が合わなくて話し合いが進まずもめることもあったが、そこでの話し合いに時間をかけたことで、お互い建設的な妥協点を見いだしながら、グループとしての作品を完成させることができた。

９月にはAPECの青少年交流イベントに参加する機会をいただいた。ここでは１学期に作成した作品をAPEC観光大臣会合に参加するアジア太平洋地域の２１の国・地域の観光担当大臣や国際機関の代表（以下HODという。）にお渡しした。自分たちが作ったものを海外の代表の方々に渡すために、担当の国の言語を使ったあいさつ等の練習を頑張り、「自分たちの思いを伝えよう。」と意欲的だった。子どもたちの感想を見ると、「自分たちが作った映像を渡すことができて嬉しかった。」「奈良の魅力を世界の人に知ってもらいたい。」「なかなか練習通りには話ができなかったので、英語が話せるようになりたい。」「自分も逆の立場で大臣として、国際会議の舞台に立ちたい。」などであった。作っている段階では、漠然と作っていた子どもも、外国の人に作品を渡せたのは貴重な体験であり、これからの学習や活動への動機づけともなった。各国のHODと交流をもつことで奈良の良さを海外に発信する喜びを子どもたちは実感することができた。

住んでいる地域に世界遺産・地域遺産が当たり前のようにあり、今まではその素晴らしさになかなか気付くことがなかったが、この学習を進めていく中で奈良を誇れる気持ちが育ってきた。また、実際に英語を話すことで、外国語活動での会話と異なることに気付き、海外に伝えるためにはどうすればよいかを考えることができた。

高校生との交流がESS部との活動であったため、小学校の授業時間と合わせるのが難しく、回数が制限されてしまったことが課題である。学校間で日程調整等の連絡を密にし、お互いにとってメリットのある取組にしていきたい。

また、TV会議をする相手を見つけるのも課題である。今回は私が参加した「ACCU の日韓教員交流プログラム」で、韓国の方に直接お願いしてきた。帰国後も連絡を取りながら進めてきたが、言葉の壁があり調整は難しい。この交流を今後も継続していくにあたっては、教員同士が連絡を密に取り続けていかなければならない。

第５学年

1300 年記念参画プロジェクト

奈良市立飛鳥小学校　教諭　松浦　慎

1．はじめに

本校は校区内に世界遺産を有する創立 137 年の歴史ある学校である。小さい頃から当たり前のように接してきた世界遺産のもつ素晴らしさを体感し、興味・関心をもつと共に、世界遺産にかかわる人たちの願いや思いに触れることで、世界遺産と共に歩む飛鳥の町や、そこに住んでいる自分たちに誇りをもってもらいたい。また、ここで生きる自分たちだからこそできることを考え、実践につなげていきたいと考えた。世界遺産を守り、伝えていくのは他人事ではなく、自分たち自身なのだという自覚を促したい。

2．ねらい

○　奈良の文化の素晴らしさを知り、大切に守り、伝えていこうとする心情を育てる。
○　文化財にかかわる人の思いに触れ、文化財を尊重する態度を育てる。
○　現代的な課題について、友達と協力して意欲的に調べ、学び、発信する力を育てる。

3．学習活動の概要（総時間数：38 時間）

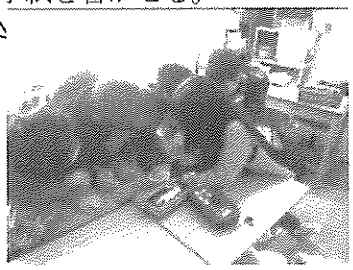
◎１学期･･･世界遺産調べ隊（知識・価値の理解）：14 時間

☆特色　⇒　観光ボランティアガイドと連携した小グループによる学習
ネパールの方との交流をきっかけに世界遺産に興味をもたせる。

主な学習内容	学習への支援	評価	備考
１．世界遺産について知る。 ・世界遺産の共通点や感じたことを出し合う。		◇自分なりに興味・関心をもっている。	ワークシート
２．世界遺産（東大寺・興福寺）を見学する。 	○見学のマナーを事前に学習すると共に、ルールをグループごとに考えさせる。 ○グループごとに国立博物館のボランティアの方や、朱雀の会の方に案内していただく。	◇友達と協力して世界遺産を回れている。 ボランティアの○○さんから、詳しく教えていただいたのでとても勉強になりました。知らないことばかり！	ワークシート
３．世界遺産めぐりを振り返る。 ・お世話になったボランティアガイドの方々にお礼の手紙を書く。	○国語教材「お願いの手紙・お礼の手紙」（光村図書）と関連させて手紙の書き方を練習する時間を設ける。	◇手紙の決まりに従って、適切な言葉で書けている。	ワークシート
４．ネパールの方と交流会を行う。 ・歓迎の歌を歌い、おもてなしをする。 ・ネパールを取り巻く環境について知る。	○ネパールについての基本的な情報を伝えておく。 ○ネパール茶を飲むなどの体験的な交流を計画する。		
５．１学期の活動を振り返る。			

◎２学期･･･世界遺産追究クラブ（参加・規範意識）：12 時間

☆特色　⇒　地域に根ざした「本物」との出会い・他教科で培ったまとめ方の応用

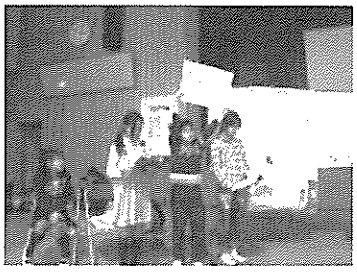
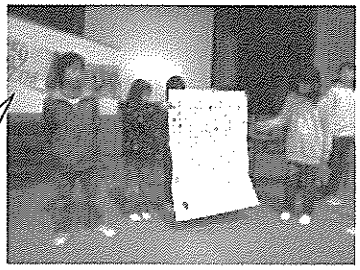
主な学習内容	学習への支援	評価	備考
１．目標を確認する。			
１学期のボランティアガイドさんとの出会いから、２学期は世界遺産に携わる方の話を直接聞き、その方の奈良に対する思いや願いを知ろう。			
２．奈良ホテルのチーフソムリエ神崎さんの話を聞く。 ３．奈良市写真美術館の学芸員説田さんの話を聞く。	○話の聞き方･メモの取り方を事前に指導する。	◇積極的に話を聞いている。	ﾜｰｸｼｰﾄ 姿勢
４．春日大社へ行く。 ・２グループに分かれて宮司さんに境内を案内していただく。	○NHK 番組「よみがえる春日大社」を視聴し、春日大社への興味・関心を高める。		
５．ゲストティーチャーの方々にお礼の手紙を書く。 ・３人から学んだことを作文にまとめる。	**最後の「胸を張って奈良のいいところを伝えていける人になってほしい」という言葉に胸を打たれました。** ○グループごとに工夫して手紙を書かせる。	◇友達と役割分担して作業を進めている。 ◇ｹﾞｽﾄﾃｨｰﾁｬｰの思いを自分なりに受け止めている。	ﾜｰｸｼｰﾄ
お礼の気持ちと学んだことをまとめました。私も私なりに奈良のことを発信していきたいです！			
６．２学期の活動を振り返る。			

◎３学期･･･平城遷都 1300 年祭応援プロジェクト（主体的参加型発信活動）：12 時間

～世界遺産や世界遺産と共に生きる飛鳥のために、自分たちにできることを考えよう～

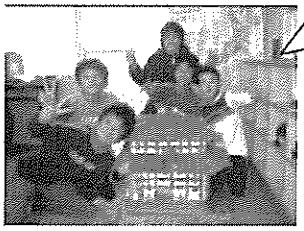
☆特色　⇒　平城遷都 1300 年祭記念事業協会との連携・マスメディアの活用

主な学習内容	学習への支援	評価	備考
１．１・２学期を振り返り、身の回りを見つめる。 ・平城遷都 1300 年祭について知っていることを挙げる。 ・新聞やｶﾞｲﾄﾞﾌﾞｯｸを見て、分かったことや興味をもったことをまとめる。	○平城遷都 1300 年祭記念事業協会のｶﾞｲﾄﾞﾌﾞｯｸを用意する。 ○正月からの新聞を自由に見れるようにする。	◇平城遷都 1300 年祭に興味をもって調べている。	ﾜｰｸｼｰﾄ
名前は知っていたけど、実際どんなことが行われているかは知らなかったなあ。			
２．３学期の学習の流れを確認する。 ・自分たちが平城遷都 1300 年祭を盛り上げよう！→企画を考えてプレゼンしよう！そのためには・・・？	○自分たちで何かしよう！という気持ちを喚起させるよう声かけをする。	◇ﾌﾟﾚｾﾞﾝの流れを真剣に考えている。	ﾜｰｸｼｰﾄ 発表

3．アイディアを出す練習をして、実際にアイディアを出す。 ・「マインドマップ」について知る。	○アイディアが出やすくなるよう、簡単な例を挙げる。	◇積極的にマインドマップを使用する。	ﾜｰｸｼｰﾄ
4．企画書の書き方を学び、企画書を書く。 ・たくさんの企画書を見て、共通する項目や、大事なことを確認する。 ・ポイントを押さえる。 ・企画書を書く	○自分で気付いてまとめるという過程を意識する。	◇企画書に自分の思いをしっかり書く。	ﾜｰｸｼｰﾄ
5．それぞれの企画書を見て、グルーピングし、グループで企画を検討する。	○ただ単に企画をあわせるのではなく、いいところを組み合わせたり、相談してさらに魅力的なものにするよう意識させる。	◇協力してまとめる。 	ﾜｰｸｼｰﾄ
6．プレゼンテーションについて学び、友達と協力して準備をする。 7．ゲストを招いてプレゼンテーション大会をする。 ・平城遷都1300年祭記念事業協会の方 ・保護者　・奈良ドットＦＭの方　・校長 ・毎日新聞記者　・教育委員会の方	○様々な事例を示し、自分たちで気づき、進められるように配慮する。 	◇友達と協力して準備を進めている。 ◇分かりやすく、説得力のある伝え方をしている。	ﾜｰｸｼｰﾄ ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ ﾊﾟｿｺﾝ ﾏｲｸ ﾋﾞﾃﾞｵ
8．活動を振り返り、来年度につなげる。 ・この学習を通して身に付いた力は？ ・改めて「世界遺産」とは？ 大きな声で抑揚つけて、心を込めて伝えます！役割分担もばっちり！仲間が心強いです！		◇自分を見つめ、成長を感じるとともに、世界遺産の価値について自分なりに考えをもっている。	ﾜｰｸｼｰﾄ

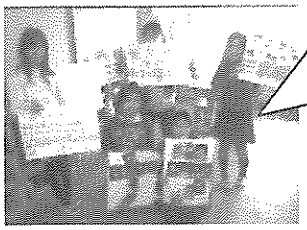
「語りかける奈良の歴史～1300年～」

和菓子や鹿笛をつくるクラフトコースとスタンプ＆クイズラリーのどちらかを選択できます。グループにはガイドさんがついて親切に教えてくれますよ！奈良の歴史や自然に触れ、大切さを知ってもらえます。



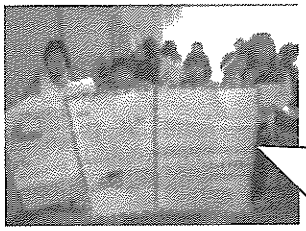
「自由に大仏ツアー」

大仏殿の境内でお祭りをします。クレーン車で大仏の目線で奈良の町や山焼きが見れますよ！大仏を造った人々の想いにも触れられます。参加料の一部は鹿愛護会に募金しますよ。模型やPowerPointで発表しました！



「星空の下であおによしの幸せ～秘密基地・いちご～」

奈良の自然・世界遺産・歴史・名産品（いちご）などの魅力を、子どもから大人まで、楽しく、笑顔で知ってもらいたいです。奈良公園で秘密基地を作ったり、笑顔の写真を貼り合わせて「夢の巨大写真」を創ります！



「観光を楽しんで!!ふれあいコース」

人力車かバンビーナ号に乗って奈良の風景を満喫してもらいます。人同士の触れ合いがメインです。鹿との触れ合いもあります。また来ようと思ってもらえるようにたくさんの工夫を凝らしました！

4．成果と課題

- 引っ込みがちで人前で話すことが苦手な児童が、本学習を通して、友達と協力して、大きな声で発表することができた。また、今後、必ず必要になってくるであろう「企画力」「プレゼンテーション能力」を実践を通して身につけることができた。
- 世界遺産にかかわる人に直接話をうかがうことで、多くの人の考えや想いにふれることができた。このことから、児童の中には、世界遺産の価値について、「協力するきっかけを与えてくれるもの」「昔の人たちの未来へのメッセージ」「かけがえのない宝物」というように、概念的なところに踏み込んで考えるようになった者もいた。
- 板書計画など事前にデジカメで撮り、担任間で共有して進めたため、指導方法について協議しながら、学年全体でほぼ同じような学習活動を展開することができた。
- 各クラスのプレゼン内容が充実したため、プレゼン大会の時間が長くなってしまった。２回に分けるなどの配慮が必要であった。また、一人一人の企画は良かったが、それをグループでまとめる作業が難しかったようである。個人の中で完成したものを、話し合いを通してさらに良くしようというのが児童にとってハードルが高かったようである。

～子どもたちの振り返りシートから～

【改めて世界遺産とは】

- 昔の人たちが未来の人たちに、ものなどの大切さを知ってほしいから昔の人たちが一生懸命造ったりしたんじゃないかな、と思います。あと、なんでも一生懸命するということを伝えたくて、遺してくれたのかなあと思います。
- 人々を感動させ、人々に何か気付かせてくれるもの。
- それは「もの」ではなく「気持ちからできるもの」です。
- ある人にとってはただの物・建物かもしれない、でも、ある人にはかけがえのない宝物であり、大切な物なのだと思います。

【どんな力がつきましたか？】

- 企画を自分で考えて、自分で「何を、どうするか」と考える力がつきました。
- プレゼンを通して、大きな声を恥ずかしがらずに出せる力がつきました。
- 世界遺産のことを「知ろう」「大切にしよう」と思う気持ちが身につきました。
- 一つの物をそのまま一つの部分だけを見るのでなく、違うところから見ていくことが大切？ということ、つまり、少し違う考えをもつ、ということを学びました。
- 模型作りを通して、最後までやり通す力がつきました。

第５，６学年

ふるさとに　支えられて

―体験活動を通して―

福井県小浜市立田烏小学校　教諭　大下　容子

１　はじめに

本校は全校生１９名のへき地複式校である。周囲を海と山に囲まれ、三世代同居による家族構成の中で児童は育っている。子どもが少ないこともあり、地域全体で温かく見守られ、学校に対してとても協力的で支えられている場面が多い。反面、多くの大人に手をかけられているためか自分に対する厳しさが足りない様子もうかがえる。そのため、本校では自立した児童育成を目指すべく、生きる力が如実に表れる学校行事を核とした教育計画を立てた。行事実践に向け、日頃からどのような取組をしていくべきか、長いスパンで見通しをもった計画を立てることを重要視した。また、そこには多くの人が自分たちのために関わってくれていることに気づき、感謝する心も大切にさせたいと考えた。

ここでは、第５，６学年の行事を例に挙げ、地域の応援や協力が子どもたちの支えになったことを述べていきたい。

２　ねらい

・わくわくどきどきするような体験を通し、何事にも前向きに挑戦しようとする心を育てる。

・地域の人をはじめたくさんの人に支えられていることに気づき、感謝する心とふるさとを誇りに思う心を育てる。

３　学習活動の概要

（１）田烏のＰＲ大使になろう！

本校では、５，６年が「なれずし」という伝統食品に挑戦することをふるさと学習の一環として取り入れている。「なれずし」は当地で大量に取れた鯖を保存するために受け継がれてきた発酵食品である。塩漬けした鯖を樽に入れ糠でおし夏を越す。これが「へしこ」で最近では県内外でも名前が知られるようになってきた。「なれずし」はこの「へしこ」の糠を取り、腹の中に米と麹を包み込みしばらく熟成させたものである。米や麹の甘味が加わりうまみが増す。正月や法事などハレの日の食卓に上ることが多い。各家庭で作られ、今でも家の味として受け継がれている。この「なれずし」を、地域の方に鯖を下ろすところから冬の米と麹を入れて完成させるまで指導をいただきながら自分たちで手作りしている。出来上がった「なれずし」は地域の方々に食してもらったり、様々な行事でお世話になった方々にお礼として差し上げたりしていたが、もっと広くいろいろな人に知ってもらいたいという思いがあったので修学旅行で取り扱うことにした。そして、「なれずし」の試食とともに田烏のことを知ってもらうために最適な場所として、小浜市と姉妹都市である奈良市を選んだ。１１月の実施に向けて、４月より田烏のＰＲをしていくことを子どもたちに告げ、これからどんな準備をしていくべきか話し合い、「なれずし」の試食を通して田烏について自分たちで紹介していくことに決まった。

当日までの取組

①「なれずし」の準備をする

Ⅰ　鯖を下ろし、塩漬けする

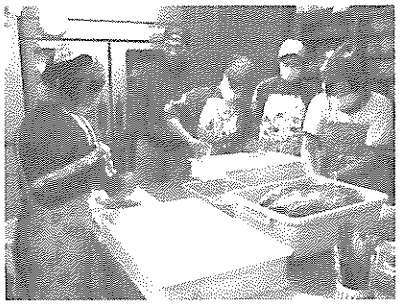
４月下旬、地域の方に来ていただき、指導していただきながら５，６年９名（今年は７名）で６０本の鯖を下ろした。６年生は昨年も経験があるため手際よく進められた。５年生は地域の方や６年生に教えてもらいながらすべての鯖を下ろすことができた。塩を振り２週間ほど置いてなじませた。

【鯖の下ろし方をマスター中】

Ⅱ　「へしこ」にする

５月中旬、塩漬けしてあった鯖の塩を落とし、糠をまぶしてひと夏を越させる。夏の間に鯖は発酵が進み、「へしこ」に生まれ変わる。作業は地域の方の作業小屋をお借りして行い、保管もお願いした。

【米、麹を入れて仕上げ】



Ⅲ　米、麹を入れる

１１月１８日に奈良市役所で試食の催しを行うため、１１月初めに炊いたご飯と麹を混ぜたものを糠を落とした鯖に詰め込んだ。１０日ほどで食べごろになるとのことであった。

Ⅳ　切り分け、冷凍する

出発の前日、熟成させた鯖を切り身にし、冷凍庫で保存した。

当日の朝、保冷剤を入れた容器で奈良市役所へ。着いた頃に解凍されていて試食してもらうことができた。

一連の体験学習に終わらせることのないよう、作業後はしたことを写真と共に記録する他に地域の方がなぜこのようにボランティアとして協力的に携わってくださるのか考えさせた。伝統食品の味や作り方を次の世代に残して欲しいと思う気持ちに答えるべき使命を果たすことも繰り返し指導してきた。

②発表の準備をする

本校では教育重点目標に「自分の思いを表現する」ことを掲げている。「なれずし」の作り方だけでなく、二条院讃岐が詠んだ沖の石や海など田鳥の美しい自然、小浜のお水送りなどの調べ学習を主に紹介していくことにした。１学期から準備を進めていたため、間際になって慌てることはなかった。他にも、どんな人の前でも堂々と発表するためには、日頃からの学習が重要と考え、教科の学習では話し合いや自分の意見、考えを伝える活動を意識して多く取り入れたり、全校や地域の人の前での発表会をしたりして「話す」ことに重きをおいた教育活動を展開してきた。

ＰＲ当日

【 好評だったなれずしの試食】

奈良市役所では入り口のロビーをお借りして、発表と試食のコーナーを設け、交代しながら市民の方々に話しかけることにした。最初は小さい声しか出なかったが、時間とともに慣れ「なれずしの試食どうですか。」「味見してください。」など大きな声で人を呼び止めることができるようになった。発表のコーナーでも質問を受けながら発表を進めることができた。奈良市役所では担当の方々に細かなところまで配慮していただき、ここでも支えられているという実感を持つことができた。

【パネルを使った発表】

２時間足らずで持っていった１０本のなれずしはすべてなくなり、思った以上の成果に子どもたちも満足の様子であった。「田鳥っていいとこやね。」「行ってみたいわ。」とふるさとをほめてもらうことが本人たちにとってこの上ない喜びになっていた。ＰＲ大使の役目が果たせたという充実感でいっぱいの顔であった。

修学旅行を終えて学校へ帰ってからも、このときに試食に来てくださった方から手紙をいただきふるさとを大切に思うこの活動をほめていただいた。しかし、子どもたちの活動だけでなく、それを支えている地域をほめていただいたのだと思っている。

（２）シーカヤックで沖の石に挑戦！

自分の力を信じ、途中であきらめることなく最後までやり遂げることをめあてに、シーカヤックに

挑戦する行事を組み入れた。沖の石は田烏から７ｋｍほどの沖合いの海上に出ている岩である。二条院讃岐が百人一首で詠った「わが袖は…」の舞台になっている。田烏の海の象徴ともなっているその沖の石に全員が上陸することを目標にした。シーカヤックで行くとなると片道約１時間半ぐらいの距離である。１０月中旬から下旬にかけて実施する計画で準備を進めることにした。実施に当たっては、シーカヤック、ウエットスーツの借用、救助船など若狭湾青少年自然の家に強力にバックアップをしていただくことになっていた。これも４月に子どもたちに実施することを告げ、おおまかな計画を伝えた。すぐさま「おもしろそう！」「ええっ、…できるん？」と異なる反応が返ってきた。地域がら海と共に育ってきた子どもたちのはずであるが、まだ「海っ子」のスイッチが入っていない。思いっきり海に触れていないのだと感じた。

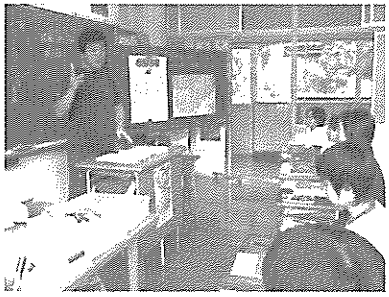
当日までの取り組み

①シーカヤックに慣れる

６月にまずは地上から沖の石が近くに見えるところまで出向き、目標をはっきりさせた。その後、若狭湾青少年自然の家で初めてシーカヤックに試乗し、パドルの扱いを教えてもらった。二人一組で乗ったが呼吸が合わず、思ったとおりに進まない様子に不安がる子どももいた。他にも目的地まで本当に行けるか、ひっくり返ったらどうするか、体力は持つのか、など不安に思っていることが次々に出てきた。

②心の準備をする

新しい挑戦を楽しめる子どもばかりではないので、その不安を少しでも払拭する方法として、自然の家から講師を招き、話を聞くことにした。１回目は、挑戦することの意義や海の風や波についての話を、２回目はこぎ方のテクニックや安全面についての話である。また、９月には２回目の試乗を行った。このときは少し時間と距離を伸ばし沖の方へと進んだ。「風を見る」など実践の中で体験することも多く、またそれらをこなしていくことで子どもたちは不安が減りやれそうだという前向きな気持ちになっていった。



【外部から講師を招く】

普段の学習でも、最後まで一生懸命やり遂げることを心がけていないと本番でも力が発揮できないことを繰り返し指導してきた。

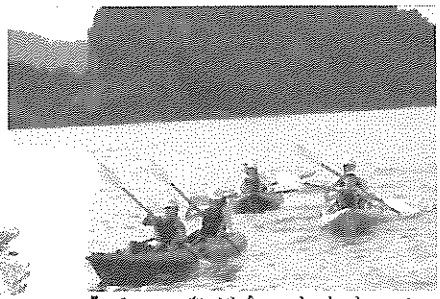
地域の方々にも本番に向けての協力をお願いした。実施するなら最上の天気や波の状態でやりたいし危険を伴う活動でもあるので、海の情報については地元の漁をする方々に毎朝情報をもらうことにした。また、当日の田烏区長さんを始め地域の方が救助用、報道用の船を出してくださることになった。実際、天気については学校側が実施できると読み連絡してみても、「今日はまだ風が残っているしだめだ。」「午後から波が高くなるしよくない。」「天気が良くても沖の石あたりは無理。明日の方がいい。」などと海に携わる方々ならではの情報から延期の日々が続いた。結局最適日とされたのは予定していた１週間の最終日であった。海に関することは地元の方に聞くことが最良であることを再認識した。と同時に非常に関心を持っていてくださることに子どもたちとともに感謝した。

実施当日

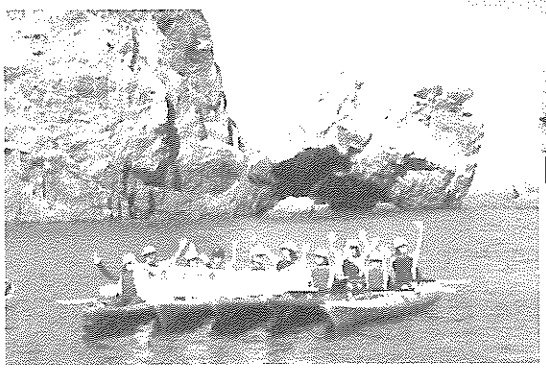
「沖の石に上陸する」という目標が前日に起こった釣り客の遭難事故で別ルートに変更することになった。しかし、穏やかな天気と静かな海の様子を見て子どもたちの表情は落ち着いていた。出発式を終えた後、シーカヤックに乗り込み出発した。地域の方々が小旗を手に応援に来てくださった。本校の１，２年生も小旗で応援、３，４年生は太鼓で送り出してくれた。不安に思う気持ちを後押ししてくれたのがこの応援であった。そして、

【頑張りのもとになったみんなの応援】

鏡のように美しい海の中を快調にこぎ出していった。距離を保ちながら船が見守ってくれているので、子どもたちの顔にシーカヤックを楽しむ余裕が見られた。しかし、沖に出て行くと静かだった波にうねりが生じ、シーカヤックが上下に揺れ出した。船酔いを起こし始めた子どもも見られたが、背中をさすってやることもできない。ペアの一人が励まし、パドルをこがせていた。「酔ってもつらくても、こがなあかんのやで。」どんなにつらくてもこがないことには岸に着かない、自分だけでなくペアの友達にも迷惑になることを感じ取ったのか、つらくてもこぎ続けていた。往復にして約２０km、昼食を含め５時間の体験活動となった。特に帰りは疲労もピークに達し、ただひたすらこぎつづけるのみ。互いに励ましあって自分の力を信じて田鳥の浜に帰ってきた。また出発同様に小旗と太鼓で出迎えてもらい、心地よい疲労感でいっぱいになっていた。



【ペアの息が合ったとき、シーカヤックは海面をすべるように進む】



【目標地点の獅子が岩で横断幕を持って記念撮影】

4　成果と課題

・初めての体験ばかりであったが、子どもたちが自分の可能性を信じるよい機会となった。不安や恐怖心があっても、見通しを立てて準備を進めていくことで前向きな姿勢に変わり、自信がついていった。また、「どんなことにもまず挑戦する」「最後まであきらめずに取り組む」「いろいろな人に支えられていることに感謝する」といった道徳的心情が、これらの体験をすることで自分の心の中に納得できることとして刻み込まれた。このことは、その後のあらゆる学習の場で困難が生じたときの気持ちを立て直す励ましにもなった。また、「あんな高学年になりたい」と低学年に思わせる成長ぶりを見せた。

・ふるさと学習を主軸にした活動を展開したことで、より深くふるさとを知る機会が増え地域の方々の学校へ向ける温かい協力と理解を知ることができた。また、ふるさとを知らない人にふるさとの良さをほめてもらうことで、自分たちがそんな素晴らしい地域で住んでいるというふるさとへの誇りとなっていった。シーカヤックでは海を熟知している地域の人の知識や知恵に感心し、尊敬の念を抱いた。ふるさとの自然や人を見つめなおすよい機会であった。これに応えるべく、学校側が育てたいと思っている子どもの姿やそのためにやろうとしていること、子どもたちの成長の様子をこれからも地域にどんどん発信していく必要があるだろう。

・行事の目的が何であるのかをはっきりさせ、子どもたちと見通しをもった計画を立てていくことの重要性を感じた。そうすることで、全員が同じ方向を向き、日頃からの学習の積み重ねが大切であることに気づくからである。常に意識していくだけでも取り組む姿勢が変わるものだと思われた。行事や活動を一つひとつ終わらせていくことに終始しがちであるが、日頃の学習活動と関連づけることで教育効果が大きいと考えらる。自分自身の行事や日頃の教育活動を見直すよい機会にもなった。今後もどんな子どもたちに育てたいかをはっきりさせ、見通しをもって意識した学習活動に取り組んでいきたいと思っている。

帰り道、「お帰り。」と声をかけてくださる地域の方々。
見守られていることに感謝して。

第６学年

出会い・ふれあい・深め合い！地域の遺産と世界遺産

～日本の宝を発信しよう！～

桜井市立桜井南小学校　教諭　松本　友里
桜井市立大福小学校　　教諭　笹岡　佳子

１．はじめに

本校は、奈良県の北西部に位置している。２０数年前に桜井市立多武峰小学校と統合しているため、校区は南北に広がっており、バス通学の児童もいる。地域の環境は、商業地・住宅地・農山地と多様である。地域の遺産や世界遺産に触れる機会を充実させることにより、より郷土を愛し、郷土を誇りに思う児童を育てていきたい。

地域の遺産としては、聖林寺・談山神社・山田寺跡・箸墓古墳に目を向けさせた。特に聖林寺や談山神社は校区にあるため、子どもたちも知っていたが、今回詳しく歴史を学んだことで、さらに深く知ることができた。世界遺産としては、奈良への遠足と広島への修学旅行で、古都奈良の文化財や原爆ドーム・厳島神社を見学することができた。またそれだけではなく、保存・継承にかかわっている人の話を聞くこともでき、遺産を伝えていくことの大切さについても考えることができた。

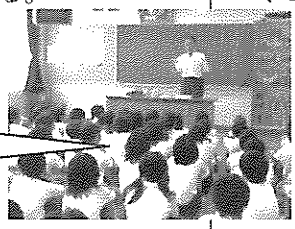
２．ねらい

○校区や市内に伝わる伝統文化を知り、地域を見つめ愛する気持ちを育てる。
○地域の遺産や世界遺産にかかわる人々の想いに触れ、遺産を尊重する態度を養う。
○地域の人々やなかまと共に、自分たちの役割を認識し、豊かに生きる力を身に付ける。

３．学習活動の概要（全４０時間）

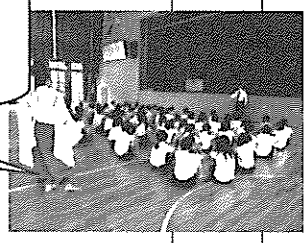
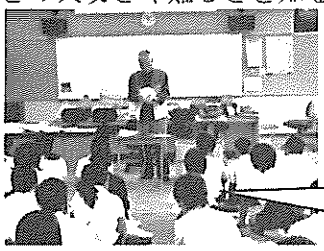
◎１学期

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．日本に残されている地域の遺産や世界遺産について知る。 ・桜井市内、奈良県内の寺社や遺跡。 ・修学旅行のコースになっている寺社や遺跡。	・今までに行ったり、家族から聞いたりした経験を思い出させる。	・興味をもち、地域の遺産や世界遺産について知ろうとしている。	
	・奈良県にはたくさんの寺や神社があるなあ。 ・海の中に社がある厳島神社を早く見てみたいなあ。		
２．聖林寺を見学する。　4/30 ・国宝の存在について知る。	・住職から、聖林寺の歴史や寺に残されている多くの仏さまについて聞き、メモを取らせる。		
	・すごくきれいな仏さまやなあ。 ・長い歴史の中で、残されてきているのはなぜだろう。 ・近くのお寺に国宝があったんや！		

3．遠足で奈良公園へ行く。5/15 ・個人で調べてきたことをもとに、グループで行く場所などの計画を立てる。 ・外国人の方と話すための練習をする。 ・１０班に分かれ、ボランティアガイドさんと共に奈良公園を巡る。	・見学できる寺社、施設の資料や料金表を準備し、グループ全員が満足できるような計画を立てるよう支援する。 ・ボランティアガイドさんと十分打ち合わせをして、遠足のめあてを理解していただく。	・奈良公園やそこにある寺社について、積極的に調べようとしている。 ・興味をもって世界遺産などに触れ、ガイドさんの話をしっかりと聞いている。	
子どもたちが見学場所に選んだ所…東大寺・興福寺・春日大社・猿沢池・浮見堂 飛火野・若草山・二月堂・シルクロード博物館 奈良国立博物館・県庁屋上・正倉院			
 ・五重塔ってきれい！ ・鹿はどこにいるのかなあ。	 ・大仏さん、大きかったなあ。 ・初めて見たから感動したよ！	 ・池に浮いている感じが不思議や。 ・この屋根、何角形？	
4．ボランティアガイドさんにお礼の手紙を書く。 6月中旬	・国語の授業で学んだことを基に、遠足のお礼や今の自分たちの様子を知らせる手紙を、心をこめて書くように指導する。	・感謝の気持ちが表れるように手紙を書いている。	
5．世界遺産ミニ発表会をする。 6/30 ・グループごとに、劇・クイズ・大型新聞などで自分の班が学習したことをまとめて発表し、出会った世界遺産のすばらしさを共有できるようにする。	・他の班が知らなかったことを紹介できるよう、アドバイスをする。	・奈良公園で出会ったものやガイドさんの話、自分たちの想いがしっかりと伝わるように発表している。	
6．被爆体験の方のお話を聞く。 7/14 ・修学旅行に向けて、低学年のときから学習してきたことを思い出しながら、さらに学習を深めていけるようにする。	・どんな想いで話してくださっているのかを考えて聞くよう指導する。	・被爆体験の方の想いを感じながら聞くことができる。	
・苦しい話を、あんなに、にこにこと話してくださるのはなぜやろ。不思議。			
7．談山神社・山田寺跡・箸墓古墳を見学する。（夏休み中に希望者のみで実施）	・メモを取り、参加していない友達に伝えられるよう、ノートや新聞にまとめさせる。	・ノートや新聞にまとめることができている。	

・談山神社は権禰宜さんに、山田寺跡・箸墓古墳は校長先生に説明を聞く。			

◎２学期

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．談山神社の権禰宜さんのお話を聞き、蹴鞠体験をする。 9/18 ・談山神社の歴史や蹴鞠について学習する。	・話をよく聞き、必要なことはメモを取らせる。	・校区にある談山神社や蹴鞠が歴史に深く関わっていることを理解している。	
詳しく知れて面白かった。一番「へえ。」と思ったことは、平安時代には蹴鞠は貴族の遊びだったけど、その後、織田信長が「蹴鞠より相撲だ。」と言い、蹴鞠をしなくなったことだ。もし、織田信長がこんなことを言っていなかったら、蹴鞠は今よりもっと広まっていたのかな。 			
２．修学旅行の事前学習・南っ子祭り（学習発表会）の準備をする。 ・図書館やインターネットでヒロシマについて詳しく調べる。 ・グループ（劇・歌・蹴鞠の実演・道具作りなど）に分かれて発表の練習をする。	・本やインターネットからヒロシマのことについて学ばせる。 ・１学期の被爆体験の方の話を思い出させる。 ・「しんちゃんの三輪車」のビデオを見せる。	・ノートにヒロシマについてまとめている。	
３．蹴鞠職人さんのお話を聞き、本物の鞠と出会う。 10/6 ・鞠の作り方や伝統を守っていくことの大切さや難しさを知る。	・話をよく聞き、必要なことはメモを取らせる。 ・実物を自分の目でしっかりと見るように指導する。	・伝統を守っていくことの大切さや難しさに気付くことができる。	
 鞠の作り方を教えてもらい、材料に驚いた。鹿の皮や馬の皮を触らせてもらったときとても固かったのに、ボールのような形になるなんてびっくりした。			
４．修学旅行で広島（原爆ドーム・厳島神社）へ行く。 10/21, 22 ・ボランティアガイドさんと共に平和公園を巡る。 ・語り部さんからお話を聞く。	・ボランティアガイドさんや語り部さんの話をよく聞き、必要なことはメモに取らせる。	・学習してきたことを思い出しながら見学している。 ・必要なことを選び、メモを取っている。	

※新型インフルエンザで学級閉鎖・学校閉鎖が続き、南っ子祭り（学習発表会）が延期される。

◎３学期

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．南っ子祭り（学習発表会）の準備・練習をする。 ・グループ（劇・歌・蹴鞠の実演	・伝える方法を工夫し、内容をわかりやすくするよう指導する。	・友達と協力して、練習している。	

など）に分かれて発表の練習をする。 2．南っ子祭り（学習発表会）で、自分達が出会った日本の宝について発表する。　1/22 3．和太鼓の演奏練習をする。　2/15～ （伝統文化の学習） 4．和太鼓演奏会で発表する。　2/23 	・聞いている人の方をしっかり見て発表するように指導する。 ・和太鼓のリズムの感覚を身に付けさせる。	・遺産を見て感じたことや考えたことをしっかりと伝えようとしている。 ・意欲的に練習に取り組んでいる。 ・楽しく演奏している。	
5．この１年間に出会った人たちにお礼の手紙を書く。　3月	・お世話になったことを思い出させて、お礼の手紙を書く。	・１年間を振り返り、感動したことや感謝の気持ちを手紙に綴ることができている。	

4．成果と課題

○　桜井市には世界遺産がないので、この学習は、もとは歴史学習との関連で地域に残されている寺社や遺跡に興味をもたせるための取組であった。春の遠足で奈良公園を選んだのも、奈良県に住んでいるにもかかわらず、本校では今までに大仏さまに出会ったことのない児童が多かったからである。結果的には、今年から修学旅行に厳島神社を組み込んだこともあり、１年間でたくさんの世界遺産を訪れ、また地域遺産にもたくさん出会わせることができた。

児童一人一人が日本の宝のすばらしさに気付き、それらを大切にしていこうという意識をもてたことは、ふり返りカードに書かれた文章やいくつかの発表会の様子などから感じ取れた。ふり返りカードには、多くの児童が「長い歴史の中で大切にされ、守られてきたことがすごい。」と書いていた。それは世界遺産になっていない地域の宝に出会ったときも同様であった。桜井市や奈良県にあるすばらしい遺産を通して、郷土に愛着をもてたのではないだろうか。

○　一昨年度から引き続いて、伝統文化の学習に取り組んでいる。特に、多くの方に実際に来校していただき、話を聞いたり、体験したりできたことは多くの点において効果的であった。児童は、伝統を守り続けることの苦労や難しさにまで学習を深めることができた。この取組で出会ったゲストティーチャーとの連携を大事にし、本校では今後も継続して児童に伝統文化に触れさせていきたいと考える。

○　ミニ発表会や南っ子祭り・和太鼓演奏会などを通して、全校児童や地域の方々にも世界遺産のことや地域遺産である蹴鞠・和太鼓のことを紹介し、守っていくことの大切さを伝えることができた。発信することで、さらに自分たちの心にも深く刻むことができたようである。

○　卒業を控えた子どもたちがこの取組をふり返ったときに、世界遺産と同じくらい心の中に宝物として残っていたこと、それは多くの人との出会いであった。遠足での１０人のガイドさん、戦争の体験を語ってくださった二人の語り部さんや平和公園での１０人のガイドさん、寺社の人たち、蹴鞠職人さん、そして和太鼓を教えてくださった人たち…。何と多くの人たちと出会えたことか。それぞれの人びとが自分の貴重な経験を生かしながらしてくださったお話に子どもたちは感動し、教室の授業だけでは学ぶことが困難な『感謝』や『尊敬』という気持ちを育ててもらえた。そのことは、日記や卒業文集、そしてお礼の手紙にしっかりと表れていた。

日本の宝をつくった人びと、守ってきた人びと、伝えようとする人びと…子どもたちがその伝統のバトンを少しでもつないでほしいと思う。

中学１年

奈良を創った、繋いだ、守った

～地域教材を使って人権学習～

奈良市立三笠中学校　教諭　深澤　吉隆

１．はじめに

奈良市立三笠中学校は奈良市の中心部に位置し、校区内には市役所、警察署などの官公庁、三条通りや新大宮などの繁華街なども含み、校区内や周縁部に世界遺産「古都奈良の文化財」をはじめとする多くの文化財も点在するという場所にある。そのような恵まれた環境にありながら、近年の取組では、地域に目を向けたものがあまりなかった。そこで、昨年度から道徳の時間を中心に、地域教材を活用する取組を始めた。

まず、地域からの学習の第一歩として、2009 年５月の校外学習において、テーマを持ってフィールドワークを行った。また、７月の平和学習においては、校外学習でのフィールドワークを活用し、「奈良にも戦争があった」と題した学習に取り組んだ。

平和学習までの取組については、2010 年１月の奈良市人権教育研究大会において報告しているので、今回は２月に実施した多文化理解を目的とした取組を報告する。

２．ねらい

- 地域を見つめ直し、人権、いのち、平和などに関する関心を高める。
- 多様な文化を受け入れる寛容な態度を養う。
- 現在の私たちの生活の中に外国にルーツのあるものが多く存在することに気づく。
- 奈良の文化も日本の人々だけでなく、多くの国の人々に支えられてきた事実を知る。

３．学習活動の概要（全４時間）

◎　導入…三笠中学校の部活動の種目に見る海外文化（１時間）

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．私たちの日常生活には、外国にルーツがあるものが多く存在することを知る。 ２．三笠中学校の部活動のルーツを考える。 ３．予想と理由を発表する。 ４．奈良の文化にも多くの国の人が関わっていることを聞き、関心を高める。	・ワークシートを用意し、知っているものを書かせ、交流させる。 ・活動内容や名前から予想し、ワークシートに記入させる。 ・同じ部活動で相談させ、発表を促す。 ・次時の予告	【生徒の感想】 ・身の回りの物の多くが、外国から来ていると気づいてびっくりした。 ・三笠中学校の部活動のルーツはほとんど日本以外だったけど、アメリカやヨーロッパのものが多いと思った。 ・ウォシュレットやカラオケやインスタントラーメンの話を聞いて、日本は改良するのが得意だと、社会科で習ったのを思い出した。	

◎　奈良の文化遺産を支えた海外からの人々（２時間）

プレゼンテーション「奈良を創った、繋いだ、守った」（教師作成）をもとに。

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．プレゼンテーション「奈良を創った、繋いだ、守った」を見る。 ○奈良の文化遺産に大きく関わった３人の人物。 ★奈良を創った（奈良時代） 国中公麻呂・行基 ★奈良を繋いだ（鎌倉時代） 陳和卿 ★奈良を守った（明治時代） フェノロサ	・メモを取りながら、説明を聞くよう指導する。	・メモを取りながら話を聞き、自分の感想をもつことができる。	
	・次時には、フェノロサを取り上げることを予告する。		

【国中公麻呂はどんな人】

・祖父：国骨富（こくこつふ）

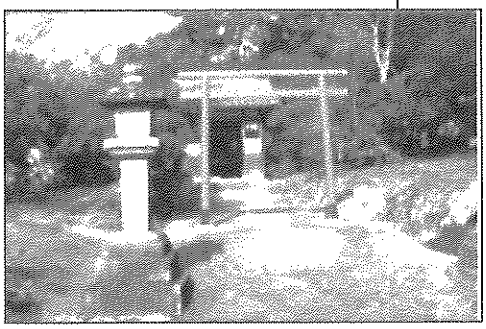
百済出身の貴族。百済国滅亡時に倭国に亡命した。

・職業：仏師

大仏プロジェクトが本格的に始まると、位が正七位下から、外五位下へと特進。これは、彼の仏像制作における技量が認められたためとみられる。最終的に従四位下という異例の出世を果たした。

【国中公麻呂の作品】

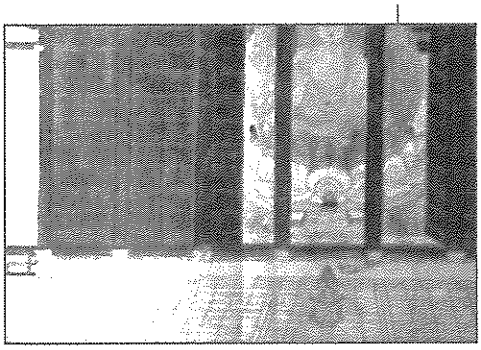
公麻呂の指揮した大仏は、今は見ることができないが、東大寺法華堂（三月堂）の不空羂策観音は彼の作品と言われている。



【辛国神社】

【辛国神社】

東大寺大仏殿の東の小高い場所にひっそりと建っている。東大寺を建てるのに功労が大きかった百済系の人々を祀った場所。



【信貴山縁起絵巻に描かれた二代目の大仏】

【陳和卿について】

陳和卿は鋳物師大工という立場で、大仏の鋳造と大仏殿の再建に中心的な役割を果たす。

【生徒の感想】

・行基さんも大仏造りに活躍したことを初めて知った。近鉄奈良駅の行基さんの噴水の意味がわかった。

・辛国神社は校外学習で行った場所。思い出した。

・フェノロサが講演した浄教寺は、私の家だ。次までにしっかり聞いておこう。

◎　フェノロサの講演（２時間）

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．１８８８（明治２１）年６月５日に奈良三条通りの浄教寺で行われた、フェノロサの講演を描いた場面を抜粋した教材を読む。	・明治初め頃の廃仏毀釈などの状況について、解説する。 森川杜園：奈良の伝統工芸である奈良人形一刀彫の中興の祖と言われる。	・時代背景が理解できる。	大津昌昭著『森川杜園の生涯』
２．役割を決めて読み合わせをする。	・読み合わせをすることで、臨場感を感じさせたい。	ワークシートへの記入 ・講演を聞いて拍手喝采した当時の人々の思いを理解する。 ・森川杜園の心情を共感的に理解する。 ・文化財保護に関するフェノロサの果たした役割を理解する。	
３．ワークシートに感想を記入する。			ワークシート

【浄教寺】

主な登場人物
　森川杜園
　フェノロサ
　岡倉天心

【フェノロサ】

フェノロサは寺院や仏像が破壊されていることに強い衝撃を受け、日本美術の保護に立ち上がった。自らの文化を低く評価する日本人に対して、日本文化がいかに素晴らしいものであるかを熱心に説いた。そして、奈良を何度も訪問している。

「奈良は日本のローマである。」

「奈良は中央アジアの博物館である。」

「日本の美術は、ヨーロッパのものと少しも劣るものではない。」

「奈良の古物は日本の宝である。世界においても、もはや得ることのできない貴重な宝である。」

「古物の保護保存は奈良の人の義務であり、栄誉でもある。」

【フェノロサ】

・奈良の文化財は奈良の人だけでなく、多くの外国の人によって維持されてきたことを理解する。

【生徒の感想】

○「奈良の古物は、奈良という一地方の宝であるのみならず、実に日本の宝でもあります。いや世界においても、もはや得ることのできない貴重な宝なのです。」というところが、私はすごいと思ったし、しかもそれに気づいて皆に教えたのがアメリカ人であるということに驚いた。

○日本の文化財を残すのには、他の国の人も協力してくれていたのを初めて知って、ありがたいと思った。

○自分がいろんなものをどう見ているか、考えさせられた。これからは何事にも広い視野に立ってものを見ようと思った。奈良の宝は世界の宝。奈良は色々な物事を発信できたらいいと思った。

4．成果と課題

・　地域教材を用いて人権学習を展開していくよさは２点ある。一つ目に身近な地域の題材だけに日常生活との接点が多いということである。これまでは読み物教材を使用することが多かったが、身近な具体的な事実を教材化することで、生徒は自分の問題としてとらえ、考えることができた。二つ目に新たな気づきがあるということである。教材として取り上げ、今までと違った側面を提示したことで、生徒は驚きをもって見つめ直していた。そして他のものも見つめ直す態度が形成されるとともに、新たな気づきもあり効果的であった。今後も取組を続けていき、もっと地域に目を向けるとともに、様々な人権の課題を自分のものとしてとらえ、さらに解決にむけて行動していく力をつけていくことができると期待している。

・　きわめて日本的であり、日本文化の代表であると思っていた東大寺大仏の造立や復興に、海外にルーツをもつ人たちが深くかかわっていたという事実は、生徒にとって驚きであった。また、奈良時代から多様な文化が交わることで、豊かな文化が形成され、現在に至っていることを理解することができた。

・　実践は継続的・系統的に取り組むことで、生徒の力になっていく。地域教材がもつ教育力を生かすためにも、全職員が地域に学ぶことの意義や楽しさを明確に持ち、計画的、発展的な展望を構築していき、次年度以降も継続して実施していくことが必要である。また道徳だけでなく、他の教科や領域に広げることが課題である。

【ワークシートから抜粋】

これまで私たちは、日本の文化は、昔から外国との交流によって受け入れたものを発展させてきたことを学んできましたが、現在でも多くの国と交流し、多くの人々が日本にやって来ます。そして現在、200 万人（日本の人口の２％）の外国人が日本に住んでいます。それ以外にも、日本国籍を取得していますが、ルーツは外国にあるという人が多くいます。また旅行者や仕事で一時的に滞在している人、移住者、難民などがいることを知っていましたか。

そういう人たちから見て、必ずしも日本は安心して住める国ではないと思います。また日本で生活していく中で何か困っていることがあるはずです。２年生になったら、私たちの周りにある多文化との関わりについての課題も学んでいきます。ですから、みなさん、今回学んだことを頭の片隅に置いていてくださいね。

※　この続きの取り組みとして、２０１０年５月に神戸の校外学習から阪神・淡路大震災を題材に、現在の在日外国人たちが置かれた問題点や、震災で生まれた共生についての学習を行った。

人文科学科第１学年・外国語科第３学年

ユネスコ青年交流　2009・2010

奈良市立一条高等学校　教諭　藤村　智子

１．はじめに

本校では、人文科学科１年生が「ユネスコ青年交流信託基金事業－文化遺産保護青年指導者研修・交流プログラム－」に協力し、アジア太平洋地域からの研修生（下記参照）に平城宮跡を案内し、一日行動を共にすることで、交流を深める活動（以下「ユネスコ青年交流」と言う）を行っている。生徒達は、最も身近な世界遺産について学び、知り、その成果を海外の研修生に紹介することで、文化遺産に対する関心をより深め、各自が今後の学習を進めていくきっかけにすることを目標に取り組んでいる。

インド	1	インドネシア	4	ウズベキスタン	4	カザフスタン	1
韓国	2	カンボジア	2	シンガポール	2	タイ	2
中国	4	ナウル	1	ニュージーランド	1	ネパール	2
パキスタン	1	パプアニューギニア	2	パラオ	2	バングラデシュ	1
フィジー	1	フィリピン	4	ブータン	1	ブルネイ	1
ベトナム	3	マーシャル諸島	1	ミクロネシア	1	モンゴル	3
ラオス	3						

2006～2010研究生の内訳

２．ねらい

・　講演会やフィールドワーク、調べ学習を通して、奈良の世界遺産（平城宮跡）についての知識を深めるとともに、その価値について考える。

・　海外の研修生との交流から、語学力の必要性や、国際理解・異文化理解はいかにあるべきかについて考える。

・　下記のような、過去３年の生徒の感想を受けて、2009年度は日本の伝統文化にふれることを、2010年度は積極的に英語を使って会話をすることを重点目標とした。

○　ディスカッションで、「日本の伝統についてどう思いますか。」と聞かれ、自分はあまりよく知らないと反省した。

○　日本にはたくさんの文化や長い歴史があるにもかかわらず、私達の多くはそれを知ろうとしない。「それはもったいないことだ。」と研修生の人も言っていた。

○　日本語でならちゃんと説明できるのに、英語では何と言えば良いか分からなくて、全然説明できなかったり、会話をしようと思っても、先輩に訳してもらわなきゃいけなかったりで、もどかしかった。「先輩に悪いなあ。」と思ったし、もっと英語を喋れるようになりたいと思った。

○　日本の文化・歴史について興味をもって来てくれた研修生なのに、英語が喋れなくて、せっかく調べたことを教えられなくて残念だった。もし、またこのような機会があれば、調べるだけでなく、英語に訳せるようにしようと思う。

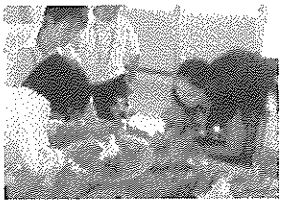
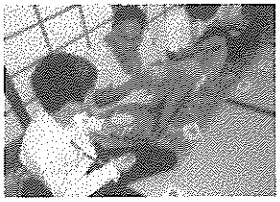
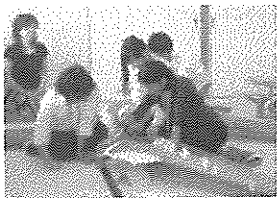
３．学習活動の概要

（2009年度）

ユネスコ青年交流〔６月25日〕

開会行事→ウワナベコナベ→遺構展示館→東院庭園→昼食→文化体験（３班に分かれて、華道・茶道・箏曲の体験をする。）→ディスカッション→閉会行事

○　一緒に演奏したお琴は、日本文化の一つとして体験できて嬉しかったです。伝えようと必死でジェスチャーすれば理解してもらえることや、言葉の大切さ、文化の違いの大きさを改めて知った一日でした。

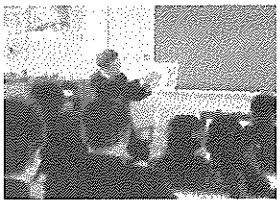
（2010年度）

英会話レッスン〔４月16日〕

簡単な挨拶や自己紹介からスタートして、外国の人との会話に対する苦手意識を克服する。

○　自分が好きな食べ物や、趣味についてスムーズに言えるようにした。また、研修生に絶対聞きたいこと（好きな日本食や趣味など）を英語でどう質問するか考えた。

特別講演〔５月７日〕

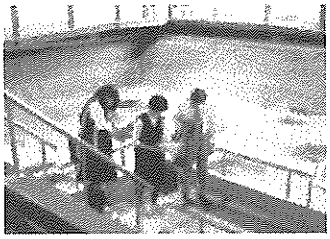


奈良大学名誉教授　水野　正好　氏

「平城京・遷都1300年祭・おめでとう」

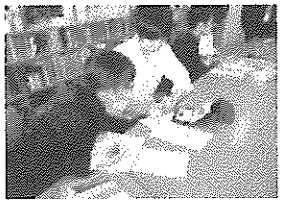
平城宮跡資料館　　見学〔５月11日〕
遺構展示館・東院庭園　　見学〔５月18日〕
ウワナベ・コナベ・大極殿　見学〔６月１日〕

ボランティアガイドの説明を聞き、展示資料を見学する。
これまでの質問リストの答えをさがしながら、案内の仕方を考える。



○　身近な史跡なのに知らないことが多く、ボランティアガイドの人に聞きまくった。
○　大極殿の、四神や十二支、高御座、造られた理由等、質問されそうなことを調べた。
○　時間が無くて、その分フィールドワークをしっかりやった。ボランティアガイドの人に聞いたことをメモし、それと自分が調べたことをリンクさせ、頑張って知識を詰め込んだ。

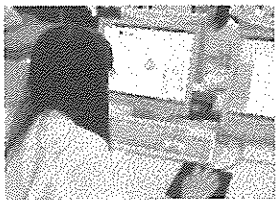
自己紹介文原案の完成〔６月８日〕



一対一で３年生の助言を受けて、自己紹介文を作成する。

○　上手にアドバイスできるか不安だったけれど、話しながら楽しく文章を考えることができて良かったです。
○　外国の人とコミュニケーションすることは、とても大切だと思うので、１年生にはこの機会をしっかりと活かして頑張って欲しいと思います。

通訳担当の３年生と、開会式の打ち合わせ〔６月９日〕

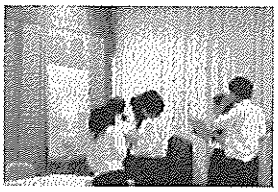


開会行事では、研修生の母国語で挨拶するので、班ごとにどうするかを考える。

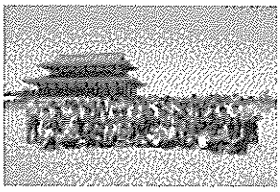
自己紹介文の完成〔６月15日〕

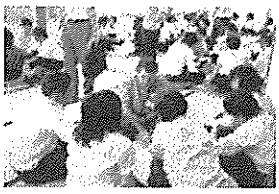
コンピュータを使って原案を清書し、イラストなどを入れる。

英会話レッスン〔6月22日〕
研修生役とガイド役に分かれて、当日、できるだけ3年生に頼らずにすむようにリハーサルをする。



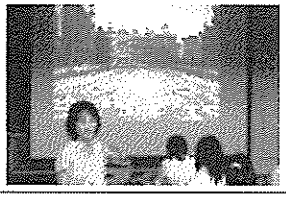
ユネスコ青年交流〔6月24日〕
開会行事→ウワナベコナベ→大極殿→遺構展示館→昼食→ディスカッション→閉会行事

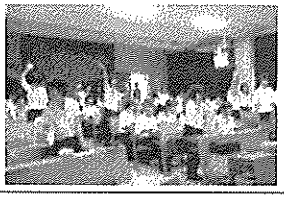




レポート『ユネスコ青年交流』提出〔6月30日〕
グループごとに学習の成果や、当日の記録ををまとめる。

特別講演〔7月12日〕
フリーアナウンサー　久保　美智代 氏
「世界遺産“おもしろ”ゼミナール」





レポート『私の好きな世界遺産』作成〔夏休み〕

4．成果と今後の課題

1．成果について

人文科学科に入学したばかりの1年生は、自分たちが知っていると思っていた、奈良や平城宮跡についての知識はごく一部で、少し違う視点から質問をされると何も答えられないことに気がつき、学習には探究・継続が大切だと実感した。また研修生との交流を通して、語学力の必要性、国際理解・異文化理解のあり方について感じることも多くあった。

○　ディスカッションから閉会式までの時間はとても短く、もっと話したいと思った。閉会式で研修生の人が泣いているのを見て自分も泣きそうになった。『相手といた時間の長さ』ではなく、『相手と過ごした時間の濃さ』が、人との関わりで一番大切なことだと思った。
○　「質問したいのに英語で言えない。どうしよう。」という気持ちになりました。でも、単語、単語また単語で話しても、研修生は分かろうと熱心に聞いてくれました。話が通じた時はとても嬉しかったです。ぐだぐだになっても、声に出してみるものだと思いました。
○　とても意外な質問が多く、答えられないまま終わってしまった。もっと広く深く調べておけば良かったと思いました。色々な国の人と喋りましたが、どの人も自分の国が本当に好きなんだと思いました。どの人も話が尽きなかったし、とても楽しそうに話されたからです。私ももっと日本のことを知り、外国の人に伝えられるようになりたいと思いました。
○　外国の文化など、実際にはなかなか聞けない話をたくさん聞くことができました。インターネットで得られる情報より中身の濃い情報を得ることができました。また今まで自分に欠けていた『相手に伝えようとする気持ち』が現れてきました。
○　海外の人達と交流する機会はめったにないと思うので、今回の経験を色々な分野で活かしていけたらと思います。外国の人と話す時は、とにかく体当たりしていくことが大切だなと感じました。フィールドワークではちょっと心配でしたが、少しでも奈良や日本の良さが伝えられたと思います。また事前学習を通して、自分も知らなかった奈良のことが分かって、新しい発見もたくさんありました。
○　初めは緊張しすぎて「どうしよう。」と思ったけれど、常に明るく、消極的になって後悔するよりは、積極的に話す方が正解だと思う。今日のような交流会は人生でもめったに経験できないから、とても良い日になったと思う。
○　初めは不安と緊張がものすごかったけれど、研修生が話しかけてくれたり、先輩が助け

てくれたので、すぐにそれもなくなりました。英語は上手くないけれど、単語とジェスチャーで伝わったので会話が楽しかった。会話を盛り上げるために、もっと研修生の国について調べておけば良かったと思います。研修生は、私達が疑問に思わないことや些細なことを質問するので、日本のこと、奈良のこと、平城宮跡のことなど、知識はいっぱい必要だと思いました。改めて奈良のことを理解したり、他国の人と話したり、先輩と行動できたり、本当に良い交流会だったと思います。

○　先輩が会話している姿や、私達の説明や質問をその場で英語にかえていくのを見てすごいと感じ、「やっぱり英語は世界共通語なんだなあ。」と思いました。けれども、その共通語も国によって発音が違ったり、イントネーションが変わっているのが驚きでした。

○　先輩から聞いて大変だとは分かっていましたが、違う国の文化に触れることができたし、身振り手振りで何とか会話が成り立って、とても充実した一日でした。「自分が学んで溜め込んだ知識を人に教えることで、自分の自信になっていくんだ。」と思えた一日でした。

○　この交流会を通して、日本についてもっと知ることと、英語の大切さを知った。調べていたら、自分が知らないことが多すぎて驚いたし、言葉が通じないことで『壁』を感じた。「もっとたくさんのことを知っていて、英語が上手に話せたら、研修生の人にもっと楽しんでもらえたかなあ。」と思うと悔しい。

通訳として参加した３年生は、英語を母国語とする人達と流暢に会話するだけが、外国の人とコミュニケーションをとるということではなく、英語を母国語としない者同士が意思の疎通を図ることも大切なことだと身に染みて理解した。さらに、将来海外を活動の場と考えているなら、まず自分の国について十分な知識をもたねばならないことを、研修生の姿から学んだ。

○　ネイティブの英語ではなく、色々な言語を話す人達の英語が聞けて面白かった。すごく簡単な単語なのに全く聞き取れないこともあって、日本語の訛りも、外国の人にとっては同じように聞きづらいんだろうなと感じた。１年生とも仲良くできたし、自分の英語力を確かめるだけでなく、改善すべき点も見つけられたので、本当に参加して良かった。

○　１年生がラオス語を少し勉強してくれていたので、昼食の時にラオス語で「乾杯！」と言ったらすごく喜んでくれました。英語だけでなく、お互いの国の言語を話すことで、たくさんコミュニケーションを取ることができて良かったです。

○　通訳をしていて、自分の未熟さを実感することができた。研修生の方に「もっともっと奈良に誇りをもつべきだ。」と言われて、今まで気付かなかった、古都奈良の素晴らしさに気付くことができた。

○　特に英語が得意というわけではないので、説明や会話が拙かったことが心配だったけれど、研修生の人が言いたいことを汲み取ってくれて助かった。ディスカッション等で、研修生の方の国の文化等の話を聞き、皆さんが、それぞれ自国の民族文化をとても大切にしていると知り、私も改めて日本の様々な文化を学びたいと思い、同様に、他国の文化を学び国際理解を深めていくことも重要なことだと思った。

２．今後の課題について

11月下旬であったこの行事が、昨年より６月下旬の実施に変わった。準備期間が２ヶ月半になり、非常に限られた時間でより効率よく準備を進めるにはどうすればよいか、高校生活が始まったばかりの１年生と、初対面の研修生が、楽しく積極的に交流できるために工夫できることはないか知恵を絞るとともに、これまでのプログラムをより精選していくことが必要だと考える。

○　知っていたつもりの『奈良』や『平城宮跡』についても知らないことが多く、もっと勉強しておけば良かったと思いました。英会話には一番苦労しましたが、研修生の方が何回も尋ねてくれたので、こちらもだいたいの内容がつかめたら、短い英文と身振りで答えると頷いてくれました「研修生の国について調べておいたら、もっと会話も弾み良かったな。」と少し後悔しました。

○　下調べの量が少なかった。自分の担当の国だけでなく、ディスカッションの相手の研修生の国も調べておくべきだった。準備不足だったけれど、興味深い話がたくさん聞けて楽しかった。今後同じような機会があれば、きちんと下調べをして臨みたい。

○　自分の英作文の力の無さに驚いた。単語は先輩に教えてもらったり辞書を引けば何とかなるけれど、自分が質問したいことを事前に英訳しておけば良かったと思った。

大学２回生

仲間と共に学び合った奈良の世界遺産

—初等教科教育法（社会）における世界遺産の教材作成—

奈良教育大学　教授　田渕　五十生

１．はじめに

「世界遺産教育は世界遺産がある地域だから実践可能だ」というのは謬見である。ＥＳＤ（Education for Sustainable Development）の観点に立てば、どの地域にも未来に残したい自然景観や次世代に伝えたい文化遺産が存在している。したがって地域遺産・世界遺産教育という考えに立てば、どの地域でも実践可能な普遍性をもっている。

また、どの発達段階でも実践できる。「総合的な学習の時間」を使用すれば、小・中学校の全学年を通して「地域を愛し、地球の未来を考える」ＥＳＤ実践は展開できる。報告者が関わる社会科教育でも、小学校の３・４年の地域学習はもとより、５年の産業学習、６年の歴史学習でも実践できる。もちろん中学校・高校の地理・歴史・公民の各分野でも地域の世界遺産を学習材にすれば、学習者により切実感をもたせ当事者意識の涵養に有益である。その経緯は大学教育でも同じで、地域に拘る学習が地域を突き抜けてグローバルな普遍性をもつことができる。

報告者は２回生用の「初等教科教育法（社会）」を担当しているが、４年前から、地域の世界遺産を学習材に据えて参加型授業を展開してきた。授業者がどのような願いを込めて学生に臨み、学生がどのような学びをしたか、学生の作品発表を交えながら報告したい。学習集団を組織し、だれに依拠して授業づくりを行ってきたかの実践報告は、大学教育では稀有な例であろう。地域の教育力、すなわち博物館やボランティアガイドさんたちに依拠する教育の有効性は、すべての教育に通底するものと確信している。

２．ねらい

- 地域の世界遺産を題材にして、小学校社会科の教育目標、教育内容、教育方法について、仲間と相互啓発しながら理解を深める。
- 自分たちの地域奈良を対象化して意識的に学ぶために、地域のボランティアガイド「朱雀の会」や奈良国立博物館と連携して、仲間と共に世界遺産サイトへのフィールドワークを行い、その成果をパワーポイントの教材作成に結実させる。
- 社会科の教材研究の基本である自分の足を使った体験を通して活動したり、学ぶことの楽しさや面白さを実感したりすることから、教師教育の必須な条件である「学ぶことの楽しさ」に気づかせる。

３．学習活動の概要

① 学習集団づくりと「概念砕き」

まず、オリエンテーションで「この講義で何を学びたいか？」と問いかけて集団討議を行い、授業への参加意欲を高めた。そして、「講義対話カード」や各種のレポート課題について常にグループで相互批評を行い、多面的な見方や他者の考えに触れるよ

うに配慮した。そのようなプロセスを経て、学生たちの「社会科＝暗記科目」という固定観念も徐々に変化していった。

② 奈良の世界遺産についての文献学習と相互啓発

奈良の世界遺産についての理解を深めるために、テキスト『奈良大好き世界遺産学習』を読ませて、「そうだったのか奈良の世界遺産―３つの発見―」と題してレポートを書かせて相互批評を行った。その後、過去最も優れた教材を作成した先輩を招いて教材のデモンストレーションをしてもらい、俄然、「われわれも！」といい刺激が与えられた。

「指導案の書き方」の講義では、６年生の歴史学習の「大陸の文化に学ぶ」（天平文化）を題材に指導案を書かせてその相互批評の後、報告者が書いた指導案を示し（モデリング）、実際にパワーポイントを用いて天平文化についての講義を行い、受講者の関心を高めた。さらに筆者の論文「世界遺産教育とその可能性―ＥＳＤを視野に入れて―」の書評を書かせて相互批評を行った。そのような「仕掛け」で学生の奈良の世界遺産についての教材製作のモティベーションは徐々に高まっていった。

③ 「なら奈良館」と奈良国立博物館「大遣唐使展」へのフィールドワーク

形象（イメージ）化されない知識を暗記する言葉主義の社会科教育が罷り通っている。学生たちは被教育体験者である。「ホンモノ」に触れさせ、地域に熱い思いを抱く人物に出会わせることは、彼らの感性を刺激し、知的探究心を喚起させる。

多くの学生が、「教科書の太字で書かれた『遣唐使』という言葉の背後に、このようなモノやコトや物語があったのかと圧倒された」とレポートに記していた。また、なら奈良館でのボランティアガイドさんの説明に「もっと知りたい！」と興味を掻き立てられ、次のフィールドワークへの心構えが醸成されていった。

④ フィールドワークの実施と教材製作

学科も専攻も違う学生６人が放課後に２回も学外でフィールドワークを行うこと自体、大変である。ゲストティーチャーの招聘、現地学習の問題点は講師に「丸投げ」することである。それを防ぐために、２回のフィールドワークを課した。１回目は、自分たちだけで現地を訪れ多くの疑問・質問を準備することにした。２回目は、その疑問・質問をぶつけながらボランティアガイドさんから解説を受けて理解を深めた。

フィールドワーク後は、その成果をパワーポイントで教材作成するグループ学習である。「学習＝個人的営為」と考えていた学生にとっては、放課後、集団での討議は刺激的であったと語っている。作成した教材を１４回目と１５回目の講義で９グループ全てがプレゼンテーションを行った。１回目のプレゼンでは準備不足が目立ったが、２回目には発表の質も向上していた。失敗からも学び合っていたのである。他グループの発表を通して、８つの世界遺産サイトと奈良町について学び合ったことはいうまでもない。

⑤ 体験の振り返り

「講義対話カード」や各種のレポートをグループで相互批評するだけでなく、優れたものを全員にフィードバックして全体での学びに転化させてきた。最後に、別紙の「最終レポート課題の書き方」を配布して「この講義を通して学んだもの３点」に絞ってレポートするように指示した。お互いの学びをクラス全員でシェアするためである。冊子から彼らの学びの内実を読み取っていただけたら幸いである。

初等教科教育法（社会）のシラバス　　**田渕　五十生**

小学校における社会科の目的は何か。また、どのようなカリキュラムを編成し、どのような教授＝学習過程を組織すれば、その目的を達成することができるかについて、参加型の授業を通して一緒に学びたいと考えます。また、教材づくりの訓練として、奈良の世界遺産を教材化して、グループでパワーポイントの教材を作成してもらいます。あらためて、奈良で学ぶ意味について考え、学生生活を充実する契機にしてください。

授業予定

1. オリエンテーションⅠ：この講義で何を学びたいか？　グループ討議
2. 「講義対話カード」の相互批評　フィールドワークのグループ編成　先輩の作品鑑賞
3. 社会科はなぜ生まれたのか？　社会科誕生の経緯　講義形式で行います
4. バンコク出張で留守。海外青年協力隊経験者を迎えてのイスラムの人々・文化の講演。
5. 木原元校長先生の特別講演
   「社会科はSocial Studies（社会研究科）である。「モノが語る社会科―弥生の土笛を通して―」
6. 学習指導要領は何を求めているのか？：学習指導要領のカリキュラム編成原理
7. 指導案の書き方、指導案とは？地域の世界遺産をどう教材化するか？
   「地域の歴史」「国際的な天平文化」の指導案を持ち寄り集団討議
8. 田渕の指導案に基づいた、「天平文化」の講義。「万葉集」の魅力＝言霊
9. 第１回、フィールドワーク：「なら奈良館」（近鉄奈良駅４Ｆ）９時集合
10. ３・４年生の地域学習をどう授業化するか？ビデオ視聴を通して考える。
11. ５年生の産業学習：「日本の農業」の教材化：モノ教材　ビデオとグループ討議
12. ６年生の歴史学習：「現代と過去との対話」としての歴史学習論　ダイヤモンドランキングを使って「日本の経済復興」の主要因を考える。参加型学習の授業づくり
13. フィールドワークの発表の準備
14. フィールドワーク発表１：パワーポイント30枚のスライド13分間で５組
15. フィールドワーク発表２：パワーポイント30枚のスライド13分間で４組と課題説明

参考図書

① 文科省　『小学校指導書社会編』（生協で購入してください　教員採用試験には必携）
② 奈良市教育委員会『奈良大好き世界遺産学習』　無料送呈
③ 田渕五十生「世界遺産教育の可能性―ＥＳＤを視野に入れて」無料送呈

評価

参加型授業なので、①出席重視。②「講義対話カード」の記述内容。③課題レポート『奈良好き世界遺産学習』と「世界遺産教育とその可能性－ＥＳＤを視野に入れて－」への書評。④「大遣唐使展」の鑑賞レポート。⑤グループ作品などの総合評価。

備考

① 「古都奈良の文化財」の８サイトへのフィールドワークを行います。グループで放課後または休日に時間調整をして行ってください。（同僚性の訓練）。結果をグループ単位でパワーポイントの作品にして発表します。（ＩＴＣ教材作成の基礎力）
② 「奈良で学ぶ意味」の確認と「知ることは楽しい」という経験をしてもらいます。

4．成果と課題

1．社会科教育法としての学び

「社会科=暗記科目」という固定観念を壊し、社会科が地域社会に出かけて自分なりに社会研究をする(Social Studies) 教科であることと、グループで参加型学習を通して多様な見方や考え方をシェアする有効性の確認ができたようである。

また、奈良国立博物館、なら奈良館、世界遺産サイトへのフィールドワークを通して、体験のもつ意味を理解して、社会科の教材研究の要諦を把握したようである。

2．奈良と地域の世界遺産についての学び

「あらためて奈良で学ぶ意味を確認しました」とか「奈良で学べることは幸運です」という趣旨の記述が多く、地域が対象化でき意図的に地域を見つめる姿勢が育ったようである。ボランティアガイドさんとの出会いが貴重な経験になった。奈良を愛し、それを他者に伝えようとする人物に出会えたのが成果である。人を変革させるのは、知識ではなく人物との出会いである。

ボランティアガイドさんとのフィールドワーク

3．教師を目指すものとしての学び

他の教科教育法に比して負担が大きかったが、怨嗟の声を上回る「何か」があった。

それは感動ではないかと思う。ホンモノに触れて驚き、現地を訪れて疑問を抱き、それをガイドさんにぶつけて納得する、そのような面白さを満喫したはずである。学生のレポートには「知ることの楽しさ」とか「学ぶことの面白さ」とか「社会科は楽しい」という意見があった。自分が感動したものでなければ学習者の感動にならない。その意味で「学び続ける者のみが教える資格がある」というメッセージを受けとめてくれたようである。

元興寺のガイドさんの万葉集の感動がメンバーからクラスに伝播した。教育とは感動の組織化ではないかと思っている。

白玉は　人に知らえず　知らずともよし
知らずとも　我し知れらば　知らずともよし
（元興寺の僧　巻6の1018）

教育とは、教師の「言霊」なのである。教員生活40年の気づきである。

5．残された課題

本年度で4回目であり、はじめて納得できた実践であった。製作した教材の活用（配布）など課題を残している。報告者は本年度で本学を去る。大学教育において地域の教育力に依拠した実践が継続されることを望むのみである。

分科会Ⅱ

	（14：15～15：05）			指導助言
1	岡山県立矢掛高等学校 教諭　室　貴由輝	環境科 「環境教育を入り口としたESD」	環境	奈良市立 神功小学校 校長　小松　一幸
2	青森県深浦町教育委員会 社会教育課 係長　神林　友広	中学２・３年 「故郷の森『白神山地』を学ぶ」	環境	奈良教育大学 教授　森本　弘一
3	奈良市立右京幼稚園 教諭　森口　千鶴代	４歳児 「いっしょにあそぼう、 かがやく奈良で」	幼稚園	奈良市立認定こども園 富雄南幼稚園 園長　中田　章子
4	金沢市立森山町小学校 教諭　嶋﨑　和良 教諭　山村　薫	学校全体 「地域の文化や 人との絆をつなぐ」	文化遺産	奈良市教育委員会 学校教育課 係長　石原　伸浩
5	斑鳩町立斑鳩小学校 教諭　遠藤　尊	３年・能クラブ（４～６年） 「無形文化遺産『能』の 学習を通して」	文化遺産	奈良教育大学 教授　谷口　義昭
6	橿原市立今井小学校 教諭　山上　真一	６年 「今井町は、どんな町？」	文化遺産	奈良市立 朱雀小学校 校長　北村　恭康
7	奈良市立済美小学校 教諭　大西　浩明	５年 「奈良の遺産を守る ということは…」	文化遺産	奈良教育大学 教授　岩本　廣美
8	中国人民大学附属 中学校高校 教諭　楊　傑川	「中国のユネスコスクールに おけるESD実践と模索」	国際理解	奈良教育大学 准教授 渋谷　真樹
9	奈良教育大学附属中学校 教諭　吉田　寛	中学１年 「ゴレ島から 負の遺産の意味を考える」	文化遺産	奈良教育大学 教授　片岡　弘勝
10	奈良県立 法隆寺国際高等学校 教諭　祐岡　武志	歴史文化科 「『木の文化』を 未来に伝えるには」	文化遺産	奈良県教育委員会 学校教育課 係長　奥田　智
11	奈良教育大学 特任教授　竹原　威滋 特任講師　青木　智史	「奈良の民話と 語りの文化が持つESD力」	文化遺産	奈良教育大学 副学長 加藤　久雄

世界遺産学習会Ⅱ

奈良市立大安寺西小学校（創作音楽雅楽）・奈良市立月ヶ瀬小学校（狂言）
（コーディネーター：奈良教育大学　教授　淡野　明彦）

環境科

環境教育を入り口としたＥＳＤ

岡山県立矢掛高等学校　教諭　室　貴由輝

１．はじめに

矢掛高校では平成１６年からの矢掛商業高校との再編整備を機に、矢掛商業高校の総合的な学習の時間における「環境教育」の実績を踏まえ、「環境や環境問題に関心・知識を持ち、人間と環境とのかかわりについての総合的な理解と認識の上にたって、環境に配慮した生き方ができる技能や思考力、判断力を身に付け、地域社会の中で環境に対して主体的に働きかける態度や行動力を育成する。」ことを目的とし、学校設定教科「環境」を中心に環境教育を推進していくことを一つの柱とした。

１年次に全員履修の「環境基礎」２単位、２年次で選択科目として「環境演習Ⅰ」２単位、３年次で「環境演習Ⅱ」２単位、「環境科学」２単位を開設した。開設までの道のりは困難を極めた。環境問題に関する情報はあふれかえるようにあるものの、整理されておらず、関係する書籍を読めば読むほど混乱していくばかりだった。そのようななかで、本校ではほぼ全教科の教員が教科「環境」の授業に関わり、教科の枠を超えてティームティーチングで指導にあたることにより、単に自然保護や科学的数値の検証、環境問題に関する解説の詰め込みに偏ることなく、環境問題が生じる社会的背景やその多面性を捉えながら、日常生活と結びつけて考え、問題解決の方法を見つけ出していける授業を確立しつつある。

２．ねらい

・環境と環境問題に対する関心や感受性を高めるとともに、環境問題に積極的に取り組む姿勢を育てる。

・環境に対して責任を持ち、様々な環境問題に主体的な働きかけができる態度を育てる。

・環境や環境問題を正確に捉える科学的な技能や分析力を身に付け、地域社会に働きかける能力を育てる。

・環境や環境問題を多様な経験を通して理解し、環境問題を科学的、社会的、経済的視点に立って捉える諸能力を育てる。

・環境や環境問題を客観的に捉え、環境に配慮した生き方ができる思考力や判断力を身に付ける。

３．学習活動の概要

(1)環境基礎

１年次生全員の必修科目として「環境基礎」２単位を設定した。この科目は、一般的な環境問題の講義であるが、まず『環境眼鏡』の概念を導入することから始める。環境眼鏡とは「身の回りの事象を批判的な視点をもって見る」という概念を表したものである。日ごろ目にしている日常の風景から視覚教材を作成し、通常の生活では見過ごされてしまっている問題に気づき、自分たちの生活そのものに問題意識をもたせることをねらいとしている。

最近では、小中学校で環境に関する学習を経験した生徒も増えてきている。しかし、系統立てた

環境教育は確立していないため、一つの環境問題を取り上げた調べ学習にとどまっていることが多い。また、環境問題に関する情報も地球温暖化を中心としたグローバルな問題が多く、自分たちの生活と関連づけることができていない場合もある。このようなことから、「環境基礎」の前半では廃棄物や水などの身近な問題を認識させることに重点を置いている。その後、地球温暖化や酸性雨、野生生物種の減少などの地球環境問題へと発展させていき、後半には循環型社会から持続可能な社会の構築へのプロセスで自然環境に限らず歴史、文化や国際関係まで言及し、ディベートやパネルディスカッションで考え方を深化させている。

教材として各単元の「ワークシート」を作成した。ワークシートには授業のキーワードや自分の考えを書く欄を設けており、授業の内容に沿って生徒自身が書き込む形となっている。また、他人の意見を書き込む欄も設けた。これは授業を通して意見の交換をし、他人の意見を受け入れ自分の意見を主張する力を身につけることを目的としている。このようなワークシートを用い、ディスカッションを含めた授業を展開した。また、身近な問題の単元では家庭科、保健、化学、現代社会などとの関連を意識させながら授業を行った。地球環境問題の単元では、現代社会、地理、化学、生物、英語などとの関連を意識させている。

(2)環境演習Ⅰ

２年の選択科目として実習を中心とした選択科目「環境演習Ⅰ」を設定した。地域の自然環境を理解するとともに、環境問題の多面性を理解し、多角的に探究することができる態度や行動力を育成することをねらいとした。前半では、環境や環境問題を正確に捉える科学的な技能や分析力を身に付けるための基礎的な実習を行う。その後、環境問題を科学的、社会的、経済的視点に立って捉える諸能力を育てるための講義を行い、後半では自分たちの興味、関心に基づきグループによる課題研究を行う。探究活動の成果はコンピュータを活用して発表を行う。

自然科学分野では水生生物、水質調査、発電システムなど、社会科学分野ではゴミの分別、漂着ゴミ、地域の観光資源などについての探求活動を行っている。

(3)環境演習Ⅱ

３年では、選択科目「環境演習Ⅰ」を設定した。自然環境や環境問題に関する課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図るとともに、問題解決の能力や自発的・創造的な学習態度を育成することをねらいとし、２年次の「環境演習Ⅰ」でのグループ活動で学んだことを発展させ、グループや個人で研究テーマを設定し、課題研究を行う。

環境演習Ⅱでは研究内容も専門的になってきており、関連教科の教員による指導が必要になってくるため、一講座に三名の教員を配置している。研究内容も自然科学分野では抽水植物による水質浄化について、竹粉を活用した土壌改良材について、県産材の活用について、絶滅危惧種の（淡水魚）の保護増殖についてなど、社会科学分野では森づくり県民税について、川のゴミと海の漂着ゴミの比較について、環境行政と地域社会について、エコツーリズムについてなどである。探究活動の成果は校外での研究発表会や環境関連イベント等において、コンピュータを活用したり、ポスターを用いたりして発表を行う。また、研究の過程で、問題解決へむけて啓発活動の必要性を感じるグループもあり、校内外において啓発イベントの企画・運営も行っている。

(4)環境科学

３年では、もうひとつの選択科目「環境科学」を設定した。環境と社会をテーマに国や企業の環境に関する取り組み、環境保全に関する諸法令や廃棄物処理，リサイクル，新エネルギー等に関する技術を学習するとともに、持続可能な社会を実現するために必要な行動力や態度を育成すること

をねらいとし、「環境基礎」で学習した環境と環境に関する学習をさらに深める内容となっている。

(5)教科「環境」関連行事

本校では「環境」を教科としての開設を計画した時点で、地域との連携と専門機関との連携を必要不可欠なものと考えていた。

現行の学習指導要領に基づいた各教科の教科書を見ても、ほとんどの教科で「環境」や「環境問題」に関する内容を取り扱っている。しかし、環境に関する専門的な教育を受けていない私達は、各自で日々変化しながら深刻化していく環境問題とその原因になっている社会的背景について理解し、教材として取り扱っていかなくてはならない。実際、国語、社会、数学、理科、家庭、保健体育、商業、英語の教員で構成している本校の「環境科」のなかでも「環境や環境問題」の捉え方や問題意識には大きな差がある。このような現状の中、教員だけによる教材開発、授業展開では環境教育の目的を達成することは困難であり、外部機関との連携は必然であった。

また、ＥＳＤとは従来的な教育の方向から、環境・経済・社会の面において持続可能な将来を実現できる価値観と行動に結びつくものにパラダイムチェンジしていくことであり、具体的な行動、体験、体感の重視、自発的な行動を学ぶことを通して、体系的思考力、人間・多様性・環境を尊重する価値観、批判力、情報収集と分析能力、コミュニケーション能力を育むものである。複数の外部機関との連携の中から、「環境」に関する体験活動を伴う行事が開発された。

① 白石島ＥＳＤプログラム

島での体験的な活動や島の歴史や文化の学習を通じて、人間の活動と環境とのかかわりについて理解させる。また島における持続可能な発展のための課題を認識するとともに、環境、経済、社会などの事象の関係性を認識すること、それらを体系的に思案すること、そして、自発的な行動をどのように起こすかを発想することをねらいとしたプログラムである。

第１日目	
10:00	講義Ⅰ　「白石島の現状と課題」　白石島公民館長
11:20	講義Ⅱ　「白石島を知ろう！！」　岡山大学ユネスコチェア
13:20	実習Ⅰ　「シーカヤック体験」
15:50	環境保全活動Ⅰ　海岸清掃
18:15	実習Ⅱ　「白石島踊り体験」
21:30	実習Ⅲ　「夜の水辺観察」
第２日目	
8:30	実習Ⅳ　「自然観察（トレッキング）」
	環境保全活動Ⅱ　遊歩道整備
14:00	講義Ⅲ　「持続可能な社会の実現に向けて」　矢掛高校　環境科

地元の方と一緒に「白石踊り」を体験

②発電所視察研修（エネルギー教育）

火力発電、原子力発電、風力発電、太陽光発電それぞれの見学を行い、エネルギー生産現場の規模や内容、家庭で使えるようになるまでの工程を理解する。また、発電方法の違いを施設・設備、周囲の自然環境の違いから捉えるとともに周辺地域に与える影響等についても理解を深めることをねらいとしたプログラムである。

③おかやまエコ＆フードフェアへの参加

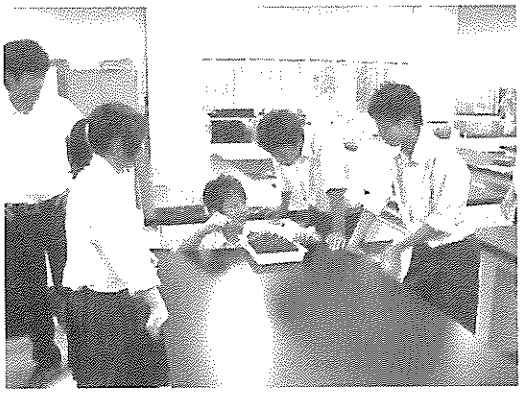
岡山県環境文化部主催のイベントで毎年１１月に実施される。前年までは「おかやまエコフェスタ」として実施。本校での「環境」に関する取り組みをポスター発表すると同時に、企業の出展ベースにて最先端の取り組みに触れることを狙いにしている。

④上勝町視察研修

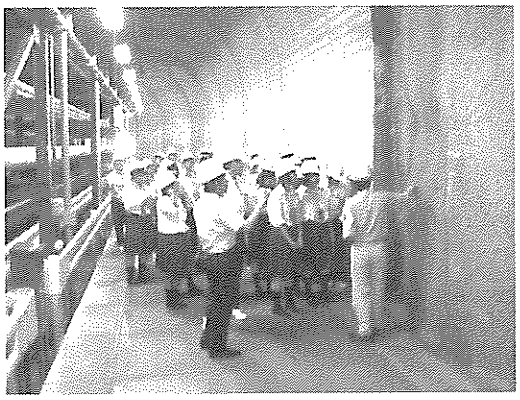
全国初の「ゴミゼロ宣言」による３４種分別、葉っぱ産業で有名な「彩事業」、地区ごとに町を活性化するアイデアを競い合うユニークな取り組みの「１Ｑ運動会」などの取り組みについて視察し、研修を通して得たものの見方や考え方を将来設計能力や意志決定能力に発展させることをねらいとしたプログラムである。

⑤その他の活動

その他にも、町内の河川の清掃活動や水質調査、希少野生生物の保護増殖活動を行っている有志団体「川レンジャー」、地域のイベントでの啓発活動、幼稚園や小学校での環境教室実施などの活動も行っている。



「環境演習１」の授業の様子



地下石油備蓄基地の見学

４．成果と課題

矢掛高校では、環境教育をＥＳＤの入り口として考えている。学校設定教科「環境」の授業、「白石島ＥＳＤプログラム」、その他の環境関連行事をとおして、持続可能かそうでないか、どうすれば持続可能になるかという考え方ができる生徒が増えてきた。また環境に関する問題の多くは、Yes か No で答えられる単純なものではない。その原因を理解するためにも多面的に物事を見る力が必要になる。さらに問題の解決になると、より複雑な思考が必要になる。このようなことから問題を理解するためには多くの教科の知識が必要なこと、問題を解決するためには、様々な社会的な問題や経済的な問題、宗教的な問題などを理解する必要があることに気付き、学習意欲を高める生徒も増えてきている。

しかし、教科「環境」の授業や「白石島ＥＳＤプログラム」などの関連行事を通じて、高まった「持続発展（ＳＤ）」意識をさらに発展させるためのプログラムはない。白石島で気付いた「つながり」や「かかわり」を矢掛町やそれぞれの地域で活かすことができるようなプログラムを準備する必要がある。さらに社会的・経済的な側面を考える生徒には、グローバルな視野がもてるようなプログラムが必要となる。今後ユネスコスクールのネットワークを活用し、発展的なプログラムを作り上げていきたい。

中学校２・３年

故郷の森「白神山地」を学ぶ

～ 総合的な学習の時間「十二湖ブナ林モニタリング調査」～

青森県深浦町教育委員会社会教育課　係長　神林　友広

１．はじめに

私たちの住む青森県深浦町岩崎地区は、白神山地の主峰白神岳の麓にあります。西には日本海が広がり、東には世界自然遺産に登録された白神山地があり、ブナ林を主とした豊かな自然が広がっています。

そんな白神山地と身近にふれあえる場が岩崎中学校から車で20分程度の所にあります。「十二湖」です。十二湖は津軽国定公園に指定され、「青池」で有名な青森県西海岸を代表する観光地です。

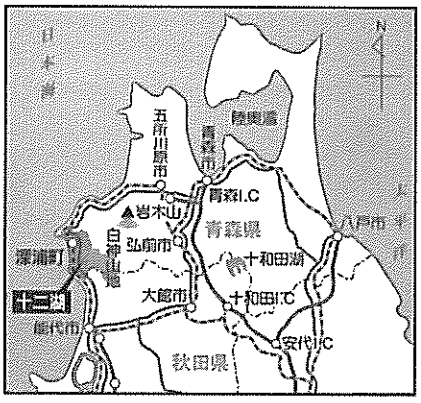


図１　白神山地・十二湖位置図

十二湖は、ＪＲ五能線十二湖駅から東へ３kmほど入った海抜約250mの台地に点在する33の湖沼群の名前です。このうち、大崩山頂から見ると12の湖沼が見えることから「十二湖」と呼ばれています。世界自然遺産登録地ではありませんが、白神山地で見られる地滑り地形や、そのふもとに発達するブナ林などの特徴を兼ね備えた所です。十二湖を知ることは白神山地を知ることにつながることから、岩崎中学校では十二湖において白神山地について学ぶ取り組みをしています。

2、3年生において33の湖沼巡りや大崩登山、白神岳登山にも取り組んできたほか、白神山地に生息する動物や植物、地形などについて調べ学習をしています。

このような活動に加え、岩崎中学校では平成17年10月に行われた世界自然遺産会議の発表を機会に、十二湖ブナ林モニタリング調査を始めました。

白神山地主峰白神岳と山麓の岩崎地区

２．ねらい

十二湖の森については、どのような種類の植物が生育しているのかといった記述的報告はありますが、どのような特徴のある森なのかを調べた長期的な調査は知られていません。

本調査は岩崎に生まれ育った子どもたちが、十二湖の森の移り変わりを長期的に、科学的にアプローチすることによって、十二湖のブナ林について、ひいては白神山地についてより深く知り、森を愛でる心を育み、故郷に自信と誇りをもってもらうことを目的としています。

- 十二湖ブナ林の移り変わりを科学的に把握し、ブナ林や自然の営みを理解する。
- 十二湖ひいては白神山地の希少性を学び、森を愛で、故郷を愛する心を育てる。
- 岩崎中学校の継続活動としてデータを蓄積し、得られた情報を町民、観光客等に還元する。

３．学習活動の概要

１）故郷理解の授業として、総合的な学習の時間の中で次のような内容で取り組んでいます。

学　年	内　　容
２学年	テーマ　「自然とふれ合い自然を愛そう」 【重点目標】体験活動を通して、自然の大切さを学び、ありがたさを実感する。 （２学期）十二湖３３湖めぐり・「白神山地調査のまとめ・発表」
３学年	テーマ　「岩崎と自分の未来を考えよう」 【重点目標】白神山地に直接触れ、ブナ林モニタリング調査を行うことを通して、自然の営みや環境に関する知識や考え方を追求する。 【１学期】白神山地に関する講話、リタートラップ設置、毎木調査説明と実施、リターの回収 【２学期】リター回収と仕分け、白神山地調査のまとめ、発表

２）十二湖ブナ林モニタリング調査報告

（１）調査地

調査は青森県西南端に位置する深浦町(旧岩崎村)津軽国定公園十二湖地内の大崩山麓で行った。青池から南へ 100mほど入ったブナ林に調査地を設置した。

調査実施にあたっては、津軽森林管理署から同意を得たほか、青森県から作業許可を受けている。

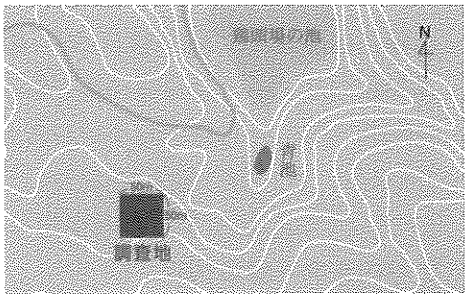


図２　モニタリングサイト位置図

（２）調査方形区（コドラート）の設定

ブナを主とする森林内（標高 250m付近）に、水平距離 10mの格子状に杭を打ち、50m×50m（0.25ha）の方形区を設定した。測量には、トランシットコンパスを用い、作業は大学研究者に協力いただいた。

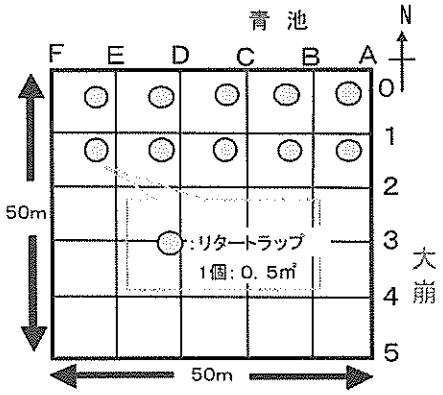


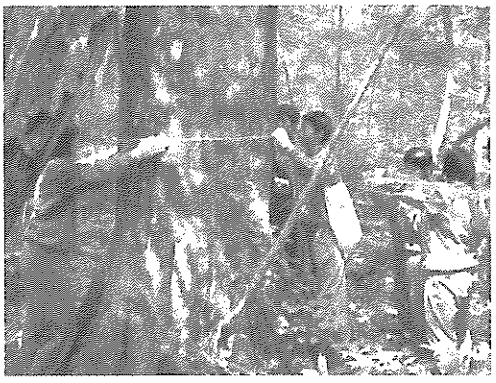
図３　コドラート模式図

（３）調査内容

① 成木調査(毎木調査)

平成17年から毎年初夏に 1回、調査区内に生育する胸高（地面から 130cm）の幹の直径が 5cm以上の樹木について、太さ・種類・状態を調べた。

樹木の根元に番号付のビニールテープを固定し、個体識別し、樹種、幹番号、生死を把握した。胸高の幹周りを巻尺で測定し、測定部位に木材チョークによるマーキングを施し、減耗を防ぐため冬期前に再度マーキングを施した。



ブナの幹周囲を測定する岩崎中生

十二湖ブナ林モニタリング調査区（初夏）

表1　毎木調査結果(2005 年)

樹木名	幹本数	Ba(㎡/ha)	Ba(%)
ブナ	47	29.05	81.272
イタヤカエデ	29	2.64	7.389
ハウチワカエデ	54	1.47	4.124
ハクウンボク	10	0.62	1.738
ホオノキ	6	0.58	1.610
ミズキ	2	0.35	0.981
サワグルミ	2	0.25	0.699
ウワミズザクラ	4	0.18	0.511
トチノキ	2	0.14	0.394
コシアブラ	1	0.13	0.350
アオダモ	2	0.09	0.252
ヤマモミジ	3	0.07	0.207
サワシバ	2	0.05	0.153
カツラ	1	0.04	0.123
ヤマザクラ	1	0.03	0.079
シナノキ	1	0.02	0.060
キブシ	1	0.01	0.031
ノリウツギ	1	0.01	0.026
合　計	169	35.75	

幹本数は調査したコドラート(0.25ha)で確認された数。
Baは胸高断面積を種ごとに合計し、1ha当たりに換算し、Baの大きい順に並べた。

② 種子生産および落葉・枝(リター)の生産量測定

0.5㎡のリタートラップ10個を調査区域に設置した。毎年5月上旬から11月上旬まで設置し、毎月1回リターを回収し、葉、枝、種子等に分け、乾燥して重量を測定した。なお、積雪期（11月中旬～4月）は撤去した。

③ 林内気象等環境調査

林内における気象変動とそれが樹木に及ぼす影響を調査するために、気温・地温・湿度を１時間毎に自動測定している。

４．成果と課題

① 成木調査（毎木調査）の結果

2005年の調査の結果(表1)、調査区域内（0.25ha）で１８種、幹数169本（樹木数162本）の樹木が生育していた。また、各個体の胸高円周から胸高直径を算出し胸高断面積（Basal are：Ba）を求め、種ごとの合計値を１ha当たりに換算した。

2005年の幹本数では、ハウチワカエデ(54本)、ブナ(47本)、イタヤカエデ（29本）、ハクウンボク(10本)の順であったが、2008年にブナ(50本)、ハウチワカエデ(48本)となり順位が入れ替わった。

晩秋、降雪下でのリター回収と撤収

現存量を示すBaの値は、ブナが29.05（2005）、30.60(2010）となり、調査期間を通してブナが全体の約8割を占めている。

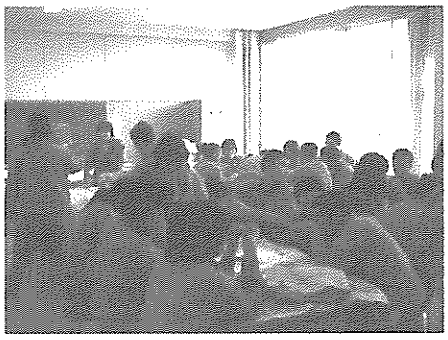
②種子生産及び落葉・枝（リター）の生産量測定

ブナ種子の生産量の推移を調べたところ、１㎡当たり2005年が364個、2006年が19個、2007年が438個、2008年が144個、2009年が270個だった。その内、2005年が87%、2006年が95%、2008年が88%、2009年が87%という割合で食害を受けており、2007年だけが26%と低く、健全な種子が比較

的多く生産されていた。

また、2005年を例に種子落下数の季節変化を見ると、7月が507個、8月が41個、9月が214個と推移し、食害割合は7月98.6%、8月87.8%、9月34.6%となり、夏季に落下した種子の多くが食害を受けていた。

リター量については、1ha当たり 2005年 4,699kg、2006年 5,172kg、2007年 5,049kg、2008年 4,789kg、2009年 4,816kg、毎年約5ｔのリターが作られていた。



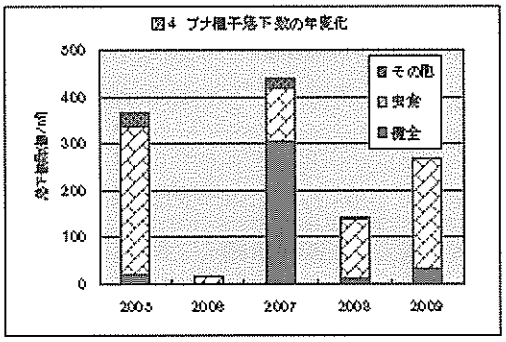
リターの分別と乾燥重量の測定

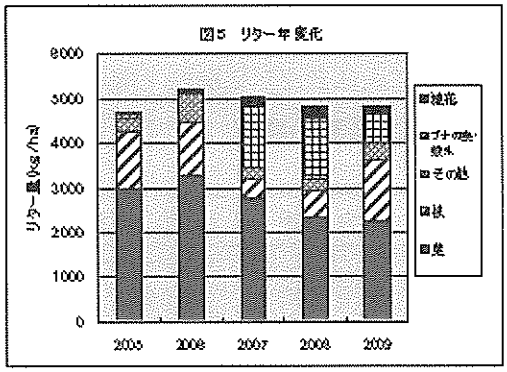
まとめ

十二湖ブナ林の Baは、調査開始年の2005年から今年2010年まで 35.75㎡／ha～37.29㎡／ha間で推移している。国内のブナ林標準値Ｂa30～35㎡／haに比較して少し高めであるが、直径分布図のＬ字型をとあわせ、日本海側の多雪地帯のブナ林の特徴を示していた。

十二湖は1704年に発生したＭ７の大地震によって大崩が大崩落を起こし、この時に生じたとされる。これに従えば、調査地周辺のブナ林は300年余りの時間をかけて形成されたと考えられる。 本調査サイト内にも胸高直径約1mのブナの大径木が生育しており、これらは十二湖誕生と共に生きてきたものなのだろう。

海岸から僅か3ｋｍのエリアに広がる十二湖の森はとても貴重であり、その魅力が多くの観光客を呼び寄せている。本調査は開始からまだ6年目であるが、今後も岩崎中学生等の手で継続し、得られたデータは十二湖を訪れる皆さんに伝えていきたいと考えている。





発表等実績

- 2005年世界自然遺産会議（弘前市）にて調査結果口頭発表
- 2006年度　森林・林業技術交流発表会で調査発表（秋田市）　優秀賞
- 2006年度　コカ・コーラ環境教育賞　主催者賞
- 白神山地ブナ林モニタリングの１０年記念シンポジウム事例報告
- 世界遺産白神山地ブナ林モニタリング調査会・環境省東北地方環境事務所（2009）　世界遺産白神山地ブナ林モニタリング調査報告書ｐ34～40，ｐ66～71

調査に参加した岩中生：（2005）伊藤武 七戸孝文 神慶介 高橋翔太 中村大紀 平沢駿 秋元華奈絵 榎本美香 川村栄美子 川村真美 佐藤莉江 原田奈々 堀内なつみ 吉田歩惟 （2006）岩根恵介 岩森将太 大屋和敬 大屋正礼 菊池孔明 菊池大貴 佐藤健吾 渋谷東陽 須藤航大 三輪優希 秋穂享子 伊藤優菜 蝦名成子 大高ありさ 菊池梢 七戸美智子 神馬彩湖 神馬玲那 勢州谷綾香 田崎優香 盛美沙子 （2007）大沢学 壹森秀也 川口和也 川村栄貴 斉藤大貴 原田真太朗 堀内大希 伊藤千尋 伊藤遠 亀川満里奈 菊池香恋 中村彩香 原田奈緒 堀内杏奈 松橋由 （2008）大屋章紀 熊谷竜之 斉藤倫範 勢州谷武淑 村山康文 岩谷千寿 川村真優 七戸円香 七戸美紅 東海林凪 神馬瑠海 高橋由衣 平沢美優 堀内沙葵 百川亞里 山本加奈 埒見まりの （2009）岩谷拳悟 岩谷武郎 榎本優太 大屋正乙 川村栄二 佐藤栄博 神馬航史 田崎修平 堀内光 吉田世良 伊藤紗耶加 伊藤季 岩根真美 川口美穂 菊池萌 斉藤弓万 平澤里乃 山正美幸 （2010）秋穂健 秋元恭太 岩谷一寿 大屋幹 川幡哲志 堀内佑大 松井佑人 百川祐生 秋穂宜子 加藤梨沙 斉藤穂 笹森茉也 七戸亜子 神宏佳

二年保育年少　４歳児

いっしょにあそぼう、かがやく奈良で

―― 大仏さまとの出会いを通して ――

奈良市立右京幼稚園　教諭　森口　千鶴代

１．はじめに

当園は近鉄高の原駅に位置し、昭和４８年平城ニュータウン開発に伴い開園された。近くには大型スーパーや図書館などがあり、様々な生活環境に囲まれている。一方、園周辺は住宅街で集合住宅も大半を占め、歴史的な建物や文化財などに触れる機会が少ない。そのため、年間計画に奈良公園や大仏殿への遠足を位置付け、奈良の文化財や自然に触れ親しみ、興味や関心がもてるようにと考える。また日々の保育の中では、地域の人から奈良の昔話を聞いたり紙芝居を視聴したりしているほか、ゲストティーチャーを招いて大和のわらべうた遊びを教えてもらったりしている。このように年少の時期から教師や友達、家の人と一緒に楽しく活動することを通して、幼児の心に奈良の素晴らしいものへの関心が蓄積され“奈良大好きな子”に育ってほしいと願っている。

２．ねらい

◎　友達と一緒にいろいろな活動に取り組む楽しさを味わう。

◎“大仏さま”に興味・関心をもち、身近に感じたり親しんだりする。

３．保育活動の概要

幼児の姿　◎ねらい　教師の環境構成・援助　反省・評価

遠足（奈良公園、大仏殿）に行こう　＜５月＞

◎　大仏に興味、関心をもつ。

◎　春の自然に触れ親しむ。

身近な所に絵本を置いたり、創作童話“大仏さまのこと知ってる”を読んで大仏の話をしたりして、期待がもてるようにする。

「大仏さま、ぼくたちが行くのを待ってくれてるかなあ。」「鹿がいっぱいいる。」「大仏さまのお家見えてきた。」などとワクワクする思いを話しながら歩いている。

「先生も早く会いたいな。」と一人一人の思いを受け止める。

「鼻の穴くぐれておもしろかったなぁ。」と、経験した喜びを伝え合っている。

「屋根に金の角みたいなのがある。」「広いお庭やなぁ。」「大仏さま、大きい！」「頭、ブツブツや。」「ちょっと怖そう。」などと見たことや感じたことを口々に話している。

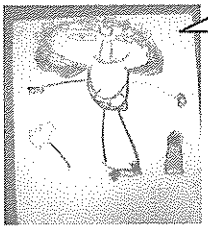
「大きいね。」「あのブツブツは何かな。」と感動を共有する。

大仏や鹿に会えることを楽しみにしていた幼児たちが、実際に大仏を見て、予想以上の大きさに驚き、厳かな雰囲気を感じていたようだ。教師が一人一人の思いを受け止め、感動を共有したり疑問を投げかけたりすることで、さらにイメージが広がり、興味・関心が高まっていったようだ。

大仏さまの絵をかこう

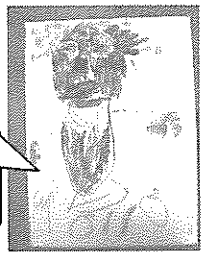
◎ 大仏さまを思い出しながら、かくことを楽しむ。

大仏の姿を思い出せるように、また、幼児のイメージが膨らむように具体的に話したり、一人一人の表現や楽しくかいている姿を認めたりする。



「お花やろうそくもあった。」
「大仏さま、笑ってたよ。」

「すごく大きかったよ。」
「耳も大きくて長かった。」
「頭のブツブツ、いっぱいかいたよ。」



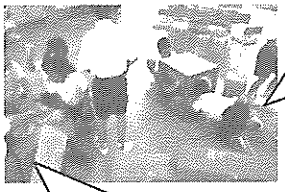
どの幼児も大仏さまを思い出しながら、見たことや感じたことをのびのびとかいていた。かいている時の表情やつぶやきから強く心に残っている部分は、様々であることが分かった。

大仏さまになって遊ぼう

◎ 好きな遊びを見つけて、教師や友達と楽しむ。

＜6月～7月＞

遠足での経験を思い出して遊んでいる幼児の発想や姿を認めたり受け止めたりして楽しさを共有する。

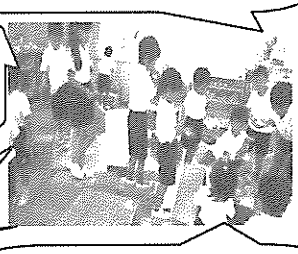


「この穴、大仏さまの鼻の穴みたい！」と、くぐることを楽しんでいる。

「ぼく家でも大仏さまになっているよ。お母さんに何かお願い事をしてねっていうんだ。」

「１番目の子すずめは頭に止まった、大きい大きいお山だよ、チュンチュンチュンチュンチュン。」

数日後大仏さまになっている幼児にままごとのご馳走を運んだり、挨拶をしたりしている。



「ぼくも大仏さまになりたいな。」

「ご馳走あげてるねん。」

「大仏さま、こんにちは。」

友達と一緒に遊ぶ中で、親しみをもって大仏さまをまねてみたり、語りかけたりして遊ぶ姿が見られた。家庭でも大仏さまになって遊ぶ楽しさを感じていたようだ。

みんなで大仏さまをつくろう

◎ 友達と一緒に大きな大仏の絵をかくことを楽しむ。

＜9月＞

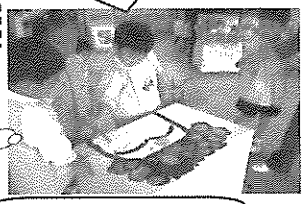
「夏休みに、また大仏さまのところに行ったよ。」と夏休みの思い出を話す幼児がいる。

幼児たちは一学期にした大仏さまごっこや手遊び、遠足の後にかいた「大仏さま」の絵を見たりして、興味をもっている。

本物みたいな大きな大仏さまをつくりたいという幼児の思いを受け止め、大きな紙や段ボール箱を用意する。

「わあ！ここにかくの。」「大きい大仏さまができるな。」と、みんなで大仏さまになり、友達の姿を見ながら、頭や顔、手や足はどんな姿だったかを話している。

「目はちょっとだけ開いてたなあ。」



友達と一緒にじっくりと取り組めるようなスペースや時間を確保する。

でっかい大仏さま、だんだんできてきたなあ。

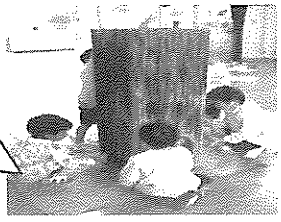
柱も作りたいという幼児の思いも受け止め、材料を一緒に用意する。

「ぼくは、体をぬろう。」

「お花もかこう。」

一人一人の工夫しているところや、友達と相談しているところを認める。

「パズルみたい！」



「柱も通っておもしろかったね。」

自分たちがかいた絵がだんだん仕上がっていく楽しさや、絵を組み合わせることで大きな大仏ができるおもしろさを感じていたようだ。一人ではできないが、教師や友だちと一緒に取り組むことでできたという満足感を味わい、「大仏さまのパズルみたい」と大切に扱おうとする態度になった。

運動会で「右京の大仏さん」をしよう　◎ ルールを守って親子競技を楽しむ。

＜１０月上旬＞

「どれかな？一緒に探そう。」

力を合わせて「よいしょ。」

『右京の大仏さん』完成！

自分たちでつくったという思いが強いことから、「これだよ！」などと保護者に知らせたり、家の人と一緒に組み立てたりすることを楽しんでいた。

この競技を通して、世界遺産である大仏さまを身近に感じ、家の人と共有する楽しさが味わえたようだ。

保護者の声

・「子どもと一緒に力を合わせたり考えたりして、組み立てていくことが楽しかったので、勝ち負けのことは気にならなかったです。」

・「運動会後、右京の大仏さまを作り上げてきた様子を話してくれたり、自分のつくったところを何度も説明してくれたりしました。」

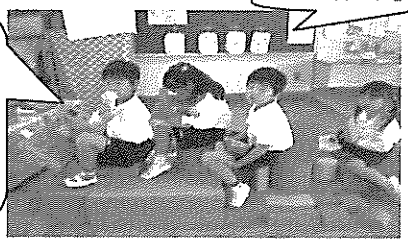
遠足ごっこをしよう　◎ 自分の思いを出しながら、友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わう。

＜１０月＞

遠足の経験が思い出せるように、運動会で使った大仏のパズルを保育室に置いたり、幼児の活動を予測してシートを準備したり敷いたりしておく。

「この電車はどこへ行くのかな。」

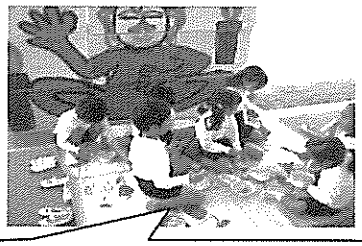
「奈良えき～、奈良えき～、大仏さんに着きましたよ。」



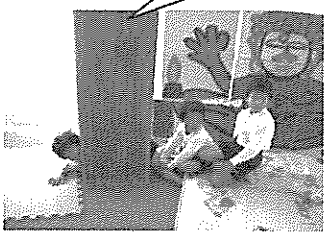
「お弁当も持っているよ！」

「楽しいなぁ。もう一回くぐろう！」

教師も遊びに加わり、個々のイメージが広がるような声かけや、友だちとイメージが伝え合えるように仲立ちをする。



「大仏さまの前でお弁当食べよう。」
「おいしいね。」



大仏のパズルや柱を自由に使って遊べるようにしたことで、電車ごっこをしていた幼児にイメージが遠足と結びつき、個々に遊んでいた幼児たちも興味をもって集まってきた。

大仏や柱など具体物があることで、イメージが伝えやすくなり、会話も活発になったようだ。

大仏さまについていろいろな話を聞いたよ　◎　大仏の話に興味・関心をもつ。

事前にゲストテーチャーに、子どもたちが大仏に興味をもっていることを伝えておく。

♪てんびにやーけーて♪「長い間お日様に照らされたり雨にぬれたりしていたんだよ。」

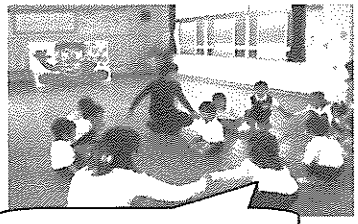
お家なくなってかわいそう。

話を聞いて知ったことは・・・
「頭のブツブツは“らほつ”という。」
「眉間にある“びゃくごう”は白髪で、引っ張ると伸びて縮む。」
「左右の手は、みんなを守ったり助けたりする。」
「指の間に水かきがある。」
「手の平には、みんなと先生が乗れる。」

「“びゃくごう”って白髪やの？」
「水かきがあるの？カエルみたい。」
「手の上に乗ってみたいなぁ。」

わらべうた“奈良の大仏さん”をして遊ぼう　◎　教師や友達と一緒にわらべうた遊びを楽しむ。

「誰が大仏さまになるのかな？」
（大仏さまを決める替え歌）
♪奈良の大仏さんに聞いたらよくわかる～♪



♪うしろにだれがいる♪

遠足で見たことを思い出しながら幼児が興味をもって聞いていたことには、見ただけではわからなかった新たな気付きや、「不思議だな。」と感じる内容が多くあった。幼児の興味や関心を高めるためには、歴史に詳しいボランティア等との連携が効果的であると感じた。

わらべうた遊びでは、動物の鳴き声を考えたり友達の名前を言ったりして、楽しい雰囲気の中で遊ぶことができた。声だけで友達を当てる幼児もあり、友達とのつながりが深まっているようだ。

4．成果と課題

○　遠足で奈良公園や大仏殿に行ったことで、自分たちの住んでいる所にはこんなに大きな仏像がある事を知るよい機会になった。幼い時期から、身近な文化財や自然に触れる活動を指導計画に位置付け実施することで、自分たちが住んでいる奈良を好きになる素地を培っていきたい。

○　4歳児にとっては、大仏が想像以上の大きさであったことの驚きが共通したものであった。幼児の印象や思いをきっかけに制作活動に展開していったことが、興味をもって取り組む姿につながった。

○　見たままを素直に表現する幼児期ならではの感性をしっかりと育てていくことが大切である。また、友達と一緒に見るという体験によって、幼児間で思いやイメージが伝えやすくなり、個々のイメージも一層膨らんだ。大仏を見るという共通体験が、幼児の遊びや言語力、表現力を豊かにしたと考える。

○　幼児たちの経験を家庭につなぐ手立てを考えることで、身近な地域や文化財に触れた幼児たちが感動を保護者に伝えることができる。幼い時期は、特に保護者を巻き込んだ取組を工夫することが世界遺産を大切にしたり、継承していく素地作りになったりすると考える。

学校全体での取組

地域の文化や人との絆をつなぐ

―金沢の伝統産業及びそこに携わる人々との交流を通して―

金沢市立森山町小学校　教諭　嶋﨑　和良
教諭　山村　　薫

1．はじめに

(1)「ユネスコ・クラフト創造都市」「歴史都市」としての金沢市

金沢市は、平成21年６月に世界で初めて「ユネスコ・クラフト創造都市」の認定を受けている。「創造都市」とは、独自の文化をもち、それらを産業と結びつけ、新しい価値を創造して、町を元気にしている都市のことで、ユネスコがこのネットワークづくりを広く呼びかけている。

「クラフト」とは、工芸という意味だが、金沢の職人気質から生まれる創造的なものづくり全体を「手仕事」という言葉で表し、「伝統に革新の営みを　手仕事のまち・金沢」をキャッチフレーズに掲げている。

また平成21年１月には、「歴史都市」として、第１号の認定も受けている。城下町の建物、そして茶の湯や能など伝統文化が今に伝わり、受け継がれている。(歴史都市には、金沢市をはじめ京都市、高山市など全国で12都市が認定されている。)

(2) 本校の概要

本校は金沢市の北部に位置し、昔ながらの街並みや住宅地が地域の大半を占めている。近くに卯辰山や浅野川があり自然環境に恵まれ、金沢の観光名所である東山茶屋街にも近い。また、茶道で有名な月心寺や心連社をはじめとする寺院も多く、和菓子店、金箔店など金沢の伝統文化を受け継いでいる店も残っている。

こうした恵まれた地域環境を活かし、これまで５・６年生の総合的な学習の時間を中心に伝統産業や郷土食品をテーマにした活動に取り組んできた。

平成21年度ユネスコスクールの認定を受け、ESD(持続発展教育)の視点を明確にし、3・4年生の総合的な学習の時間、さらに1・2年生の生活科においても地域文化をテーマに題材開発を行い、活動を展開してきた。

2．ねらい

(1) ESDの価値観を取り入れて

本校では、６年生の「加賀友禅卒業証書づくり」や５年生の郷土食品「麸」の学習、４年生の森山町小校区での「防災マップづくり」を総合的な学習の時間を中心に行ってきた。そこにESDの価値観を取り入れ、「地域の文化や人とのつながり」を研究の視点として明確に位置づけ、今までの実践を再構築してきた。

(2) 子どもたちに付けたい資質能力

子どもたちに育みたい資質能力についてもESDの価値観を取り入れて明らかにした。そして、「地域の文化や人とのつながり」にも視点をあて、評価規準に『自己の生き方・絆づくり』を新たに設定した。

○関心・意欲・態度として
・主体的、創造的、協同的に取り組む態度
・課題発見力
○情報収集力・課題追求力として
・学び方やものの考え方
・人との関わり方
○表現力として
・相手意識をもって伝えること

○自己の生き方・絆づくりとして
・地域とのつながりを意識すること
・自分には何ができるのかを考え行動すること

3．学習活動の内容

(1) 3年「発見！和菓子のひみつ」

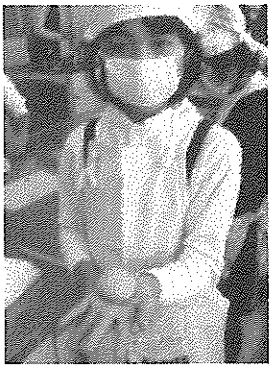
～知る・見る・体験する（和菓子づくり、お茶会など）・考え行動する・広める～

①単元の流れ

校区には寺院群があり、古くから寺詣でのお茶会も盛んに行われたことから、現在でも和菓子店が多い地域である。

そこで、3年生社会科「森山町の地域調べ」「人びとのしごととわたしたちのくらし」との関連を図り、『お寺・お茶文化・和菓子』をキーワードに学びを深めていった。

子どもたちは、陶芸家から抹茶碗づくりの指導を受け、自分の抹茶碗をつくり、和菓子店主からは、「和菓子づくり体験」をさせていただいた。和菓子の歴史・種類を調べていく中で、和菓子は季節に応じたデザインや行事に合わせて作られていること、人々の思いや願いが込められていることに気づくことができた。



【和菓子づくり体験】

さらに、学んだ知識を活かして、図工科「思いや願いを込めた和菓子を創作しよう」では、紙粘土で創作和菓子新作にも取り組んだ。子どもたちは、自分の抹茶碗でお茶をたて、自分で作った和菓子をいただく茶会を紅葉の秋に心蓮社（地域の寺）で行った。秋の深まりを味わい、地域文化のよさを感じ取り、体験したことを和菓子新聞や和菓子集会などで校内の児童や保護者に伝えることができた。

【茶道協会の方とのお茶会】

②ESDの視点

金沢が和菓子で有名なことを知り、和菓子には人々の思いや願いが込められていることに気づき、お茶文化などの情緒豊かな生活風習をこれからも大切に受け継いでいきたいという心がESDの視点である。

(2) 4年「金沢箔」

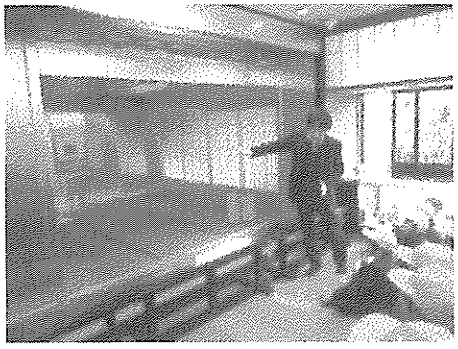
～知る・見る・かかわる（職人さん）・考え行動する・広める～

①単元の流れ

金箔体験教室「金沢箔で飾る皿づくり」制作から、「紙より薄いこの金箔はどうやってつくるのだろう？」など、自分なりの問いをもち、探究的な学びを展開していった。

校区近くには「安江金箔工芸館」や箔屋である「箔座」などがあり、実際に見学に行き、そこでの職人さんとの出会いを中心に学習を行った。

子どもたちは、浅野川が金箔づくりに使う和紙づくりに欠かせない水源となっていることや、森山町小校区には金箔を打つ職人さん（澄屋）が多いということ、金箔全国生産量の99％が金沢産のものとなっていることなどを学んでいった。



【「箔座」の金箔茶室】

そして、１００００分の１の薄さにまで箔打ちをする

技術の素晴らしさと仕事に誇りをもっている職人の姿に感動しながら学びを深めていくと同時に、稀少伝統産業となりつつある事実を知った。

そこで金沢箔を継承していくために、行政の支援・資金の補助制度があることや「箔デザイナー」の方との出会いから、未来へ向けて夢をつないでいく授業を実践した。

②ESDの視点

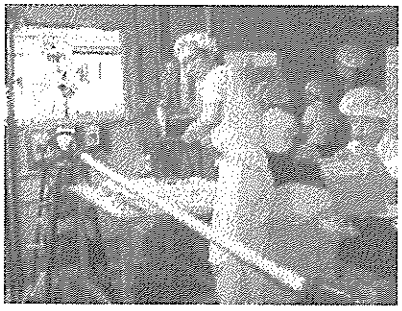
金沢箔が、全国生産量の99％を占めていながら、仏壇の需要が減り、金箔産業の衰退が懸念されている事実から、「こんなにすばらしい金沢箔が、なくなってもよいのか？」「今、自分ができることはなんだろうか？」と新たな問いを見つけ積極的に解決していこうとする子どもの姿がESDの視点である。

(3) 5年「麩を使ったレシピづくり」

～ 知る・見る（麩の工場見学）・考え行動する（創作レシピ）・広める（HPづくり）～

①単元の流れ

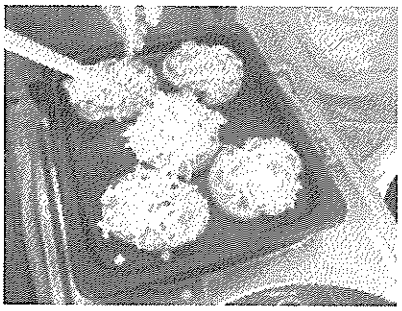
校区近くにある麩工場を見学し、できたての「麩」のおいしさから、「麩を使った創作レシピを考えて作ってみよう」と活動への意欲を引き出していった。宮田麩工場の社長さんから、「食に対する信念」や「食の安全」についての話を聞く中で、郷土食品を大切に守ることのすばらしさと大変さを知った。子どもたちは、「安全な郷土食品を提供することが使命である」と言い切る職人さんが金沢にいることを誇りに感じていった。将来、就労する際には宮田さんのように、信念をもって仕事をする大人になりたいとの思いが、子どもの心に残った。



【麩の工場見学】

②ESDの視点

金沢の郷土食品のすばらしさと継承する大切さ、そして、職人としての生きる姿を学ぶことができた。自分たちにできることとして、「麩」を用いたレシピを考え創作料理を楽しみ、麩のおいしさを家庭の食卓へ、さらに、食の安全を家族で考えようとする姿がESDの視点である。



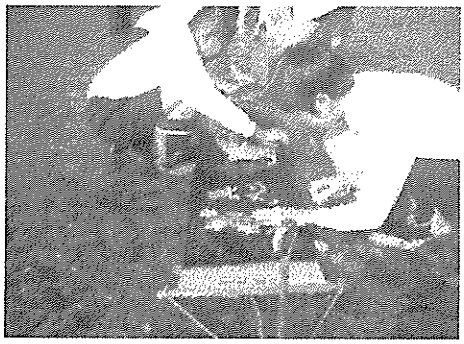
【麩を使ったピザ】

(4) 6年「思いを込めた加賀友禅卒業証書台紙づくり」

～知る・体験する（卒業証書台紙づくり）・考え行動する・伝える（HPづくり）～

①単元の流れ

本校では、6年生が加賀友禅の卒業証書の台紙づくりに取り組んでいる。卒業式には、自分の描いた加賀友禅の卒業証書を持ち、中学校への決意や将来の夢を語る。



【浅野川での友禅流し】

子どもたちは、加賀友禅が伝統工芸の街、金沢にあって、ひときわ華やかさを放っていることやぼかし、虫喰いといった独特の技法を用いた品格のある染め物であることを知った。婚礼や成人式など、華やかな場での着物として愛用され、浅野川で行われる友禅流しは、金沢の風物詩となっていることなどを学んでいった。

14の工程のうち青花下絵、糊置き、彩色、中埋め、友禅流しの5つの工程を染色師や友禅作家の先生方に教えていただきながら、卒業証書台紙づくりを行う。作業は細かく集中力が必要で、職人さんの苦労を体感し、さらに、加賀友禅への熱い思いや誇りを感じ取っていった。

また、加賀友禅のすばらしさをふり返る中で、生活スタイルの変化から、職人さんや呉服

屋さんが減少する現状を知り、加賀友禅を守るために、自分たちができることを考えていった。「金沢の人にもっと加賀友禅を大切に思ってほしい」との願いを自分たちのホームページに込め、発信した。

②ESDの視点

作業を進める中で、加賀友禅の仕事を誇りにする職人や作家の生き方にふれるとともに、後継者不足などの厳しい現状を知ることで、「自分たちが今できることは何かを考える学び」へと繋げた。そして、今後も金沢の伝統産業を大切にし、地域の文化や人との絆を意識していく姿がESDの視点である。

4. 研究の成果と課題

(1) 成　果

ユネスコスクールの認定を受けて、地域の素材・題材開発を中心に研究を進めてきた。

探究的な学習での素材・題材開発は、子どもの学習にふさわしく、価値あるものかどうかを教師が見極めなければならない。素材や題材の背景にあるもの（経済性、継続性など）を事前に把握し、子どもに伝えたいこと、学ばせたいこと、考えさせたいことなどを捉えた上で、「どんな施設を見学させるか？」「専門的な知識を学ぶために誰と出会わせるか？」などを考え、カリキュラムの再構築を進めてきた。

各題材で出会った職人さんは、金沢の伝統産業に関する学習を支えてくれている。本校の学びはこのような地域の文化や人との交流によって成立している。

各学年における取組を通して、子どもたちは地域のよさを再認識し、さらに、こうした人との絆や交流を大切にし、地域の文化を大事に思う気持ちが、子どもの姿を通して感じられるようになった。これからも地域の一員として学び、何ができるかを考えていく子どもたちを育てることが、地域にある学校として大切であると考える。

(2) 課　題

①探究的な学びを創るための支援について

総合的な学習の時間において、加賀友禅や和菓子づくりなどを学ぶ際に、その学びが単なる伝統文化の体験で終わることなく、探究的な学習活動になるよう、教師がESDの視点をしっかりともつことが必要である。

②学びを広げるための「学びの発信」のあり方

本校の学びの最終スタイルとして、「学びの発信」がある。発信する相手意識がなければ、どんな内容を伝えたらよいのか、分かりやすくするにはどんな表現の工夫が必要なのかがはっきりとしない。伝えた内容の読み手や聞き手が、どのように感じたのか知りたいところである。また、他国との文化交流をする機会を設け、自国文化との比較学習をすることで学びが深まるような機会を、今後考えていきたい。

③継続的な人との絆・地域との交流をするために

各実践をパッケージ化することや、価値ある教育資源・人材などを整理し継続していく必要がある。次年度の担当者が、その資料を活用し学習を再構成できるような仕組みが必要である。

④全教科で言語活動を充実させ、思考力・判断力・表現力を付けていくこと

ESDを取り入れたことで、子どもたちが現実問題と向き合い、自ら考える姿がみられるようになってきている。加賀友禅を着る人が少なくなっている現状から、「これから自分たちにできることはないだろうか」と考えることが、探究的な学びとなり、これが活用力の育成につながっていくものと捉えている。

今後は、こうした学びを深め、「どうしてそう思うのか」を問い、根拠を明らかにし、考えを表し伝える力が必要である。自分の思いや考えを伝えられる力、表現する力等の育成に向けた各教科における言語活動の充実が求められる。

第３学年・クラブ（４～６年生）

「無形文化遺産『能』の学習を通して」

斑鳩町立斑鳩小学校　教諭　遠藤　尊

1. はじめに

能楽「黒塚」9/22

外国の方に日本の誇るユネスコ無形文化遺産の「能」とはどんな芸能ですかと聞かれたらどのように答えますか。「能」は日本を代表するような伝統芸能であるにもかかわらず、見たこともなければ説明もできないという人がほとんどだと思います。

「能」という言葉がよく使われるのは「能面のように表情がない人だ。」というように「能」の中身ではなく形態だけを表した言葉に使われます。また、謡われる謡（うたい）で知られているのは披露宴などで「高砂やー。」と謡われる「高砂」の一節でしょう。歌舞伎の「勧進帳（かんじんちょう）」を観たことがあっても能の「安宅」を観た人は少ないでしょう。

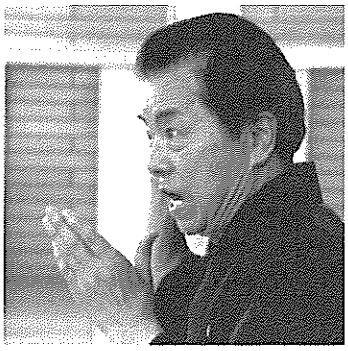
勧進帳（かんしんちょう）は源義経が奥州へ落ち延びる途中の「安宅の関」での出来事ですが実は室町時代に作られた能楽「安宅」のリメイクなのです。

あまり一般的ではない「能」ですが、「能」（猿楽（さるがく））以後に登場する日本の芸能は歌舞伎に顕著にみられるように何らかの形で「能」の影響を受けているのです。また「能」自体もそれ以前の日本文化の影響を色濃く受けているのです。「能」のことを知れば、より深く伝統的な日本文化を知ることになります。以上のようなことからも「能」を学習することは意義のあることだと思います。

2. ねらい

本校が３年生に能の学習を取り入れたのは2003年（平成15年）の９月からです。とり入れた理由の一つ目は斑鳩町の３年生社会科の副読本「わたしたちの町　斑鳩」に龍田神社境内にある「金剛流発祥の地碑」が載っていること、二つ目は生徒指導上、規範意識を高めるよい手だてはないかと探していたところ、能が本校の特色ある教育の趣旨ともうまく合致していたからです。

「金剛流発祥の地」碑



指導者　植田恭三氏

2002年の１学期から能を指導してくださる方を探し始め、金剛流の宗家とも相談した結果、奈良市在住の金剛流シテ方奈良金剛会主宰　植田恭三氏（以後先生）に頼んでみてはということになりました。2003年（平成15年）に文部科学省と奈良県教育委員会から「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業指定校」に指定され、植田恭三先生も快く引き受けてくださいました。金銭的な裏付けができ、本決まりになったのは、2003年の１学期途中です。準備を含め授業の実施まで１年以上

を費やしました。

能は子どもたちにも大人にも身近なものではなく、使われる言葉は古文でしかも文語ですから難しいのですが「地域の学習」にあわせて3年生で実施することになりました。

「小学校で能を教える？」　「何を？　どんな風に？　本当に意味があるのか？　小学生のこどもたちに理解できるのか？　効果はあるのか…。」など様々な疑問が出てきました。

わたしたち自身が能を経験したことも、能楽堂に行ったこともないのですから内容や方法についてもわからないことばかりでした。3年生の子どもたちに観阿弥や世阿弥のこと、能楽の歴史や知識を持ち出しても理解できません。また、古文で書かれた内容も理解できません。そこで、本校では

・能の簡単な謡や仕舞の学習を通して日本人の品性を支えた「礼儀」「あいさつ」「けじめ」を身に付け日本文化を大切にした国際人をめざすこと

を最も大きな目標にし、併せて

・「能楽とは」という最小限の知識と伝統の作法を身に付けさせること

をねらいとしました。

3. 学習活動の概要

□ 3年生

能の授業風景　7/2

口承文化（口承芸能）の傾向が強い能楽は教える側と教えられる側がいつもコミュニケーションを取りながら行わないと学習しにくいものです。わが校の職員は経験もなく教えることができないので、授業の進め方は実際に多くの弟子を育てられた植田恭三先生にお任せすることになりました。

具体的には「能に関する簡単な基礎知識」、「謡（うたい）の練習」、「姿勢を含む舞（まい）の練習」を主な内容にしています。また、授業では、最初と最後にはきちんと挨拶をし、けじめをつける工夫もされています。各学級に帰れば授業の「ふり返り」や、教えていただいた謡（うたい）と仕舞（しまい）の復習を行っています。

1年目は学期途中から始まったことから広い練習場所（体育館）が確保できずランチルームの椅子や机を移動させて行いました。学習が始まると同時に発表の日を11月初めの「らんらんフェスタ」（日曜参観）に設定されたため、発表までの2ヶ月で仕上げなければならず、1回の授業は2時間連続で行われました。

発表後、保護者からもよい印象を得たので、次年度も継続することになりました。

2年目からは3年生が「総合的な学習の時間」で能の学習をやることがきちんと位置づけられました。学習する日は金曜日の5時間目に設定し、体育館を使うことになりました。前年と違い単位授業が短く前年は9回だったのですが、15回（発表会を含む）を基本に学習することになりました。4年生の子どもたちの中から「クラブがあったら入りたい。」という声が出たので、能クラブが作られました。今年までに能の学習に使った曲目は仕舞（しまい）「老松」、「熊野（ゆや）」、「雪」、「岩船（いわふね）」、謡は「鶴亀」、「高砂」です。

□ 斑鳩小学校能楽金剛クラブ

平城遷都 1300 年祭(平城宮跡)

能の学習が始まって2年目、前年の学習を活かすように「能楽金剛クラブ」作られ、当初は13名で活動がはじまりました。舞や謡の基礎を3年生の時に学習しているのでその経験を生かし、曲目は長めのものを手がけています。

クラブ設立1年目は「大和猿楽サミット」が唯一の発表の場となりました。

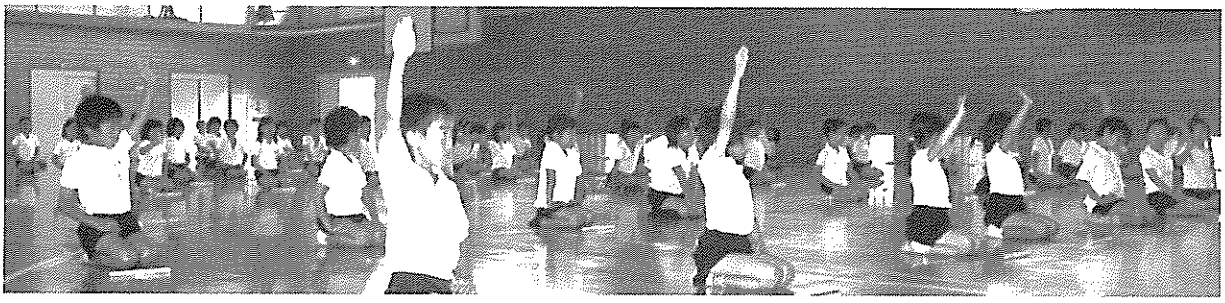
2年目以後は町内のイベントにも招待されるようになりました。発表は技量を高める上で有効と考え、招待されると積極的に参加しています。

能クラブが参加した催し物

年	月	企画名称	年	月	企画名称
2004年	9月	斑鳩町観月祭	2009年	3月	大和猿楽子どもフェスティバル
2005年	3月	大和猿楽サミット		7月	斑鳩町商工祭り
	11月	架け橋美術展		10月	奈良うたごえ祭典
2006年	3月	近畿ユネスコ部会		11月	らんらんフェスタ
	3月	大和猿楽サミット			奈良県民教育フォーラム
	7月	愛と輝き夢フェスタ			ホームページ大賞授賞式
		夢舞台	2010年	3月	大和猿楽子どもフェスティバル
2007年	3月	大和猿楽子どもフェスティバル		5月	光明皇后大恩忌法要
	7月	斑鳩町商工祭り		5月	平城遷都1300年祭
	11月	NHK ほっとモーニング		7月	近畿ユネスコ研究大会
		道徳教育フォーラム		7月	商工祭り
2008年	7月	商工祭り			
	9月	法隆寺青年会議所			
	11月	らんらんフェスタ			

クラブで手がけた曲目は仕舞は「老松(おいまつ)」、「安宅(あたか)」、「清経(きよつね)」、「猩猩(しょうじょう)」、「竹生島(ちくぶしま)」、「八島(やしま)」、「熊野(ゆや)」、「雪」です。謡(うたい)は「四海波(しかいなみ)(高砂)」、「鶴亀(つるかめ)」です。

4. 成果と課題



能の授業 3年生

手探り状態で始めた能の学習ですが、長い時間正座をするにもかかわらず子どもたちには意外に好評で、真剣に取り組んでいます。練習は暑い時期に重なり、じっとしていても汗がほお

や髪をつたって床に落ちますが、子どもたちは平気な顔で練習をしています。他の教科では考えられないことですが、これが本物のもつ「力」だと思います。

先にも書きましたが「礼儀」「あいさつ」「けじめ」を目標に授業をしており、成果は上がっているように感じます。しかし、いつも子どもたちと一緒にいますから目に見える形では分りにくいというのが正直な感想です。学習が終わった後どのように変わったか検証しにくいのですが、能の学習に関わる子どもの姿勢は他の授業とは明らかに違います。

子どもたちはこのことをどのように感じているか次のようなアンケートを昨年経験した4年生と現在学習中の3年生で採りました。

質問1　能の学習をしてどう思いましたか。（2010年9月8日調査）

	4年生(70人中)	3年生(75人中)
よかった	53%	28%
よくなかった	4%	1%
分からない	43%	71%

○「よかった」内容については

	4年生(人)	3年生(人)
正座ができるようになった	12	4
楽しい(楽しかった)	8	3
能のことが分かったから	7	4
大きな声が出せるようになった	1	3
けじめがつき集中できるようになった	6	2
斑鳩小学校だけ		1
見に来てほしいから		1

質問2　能の学習をして自分が変わったと思いますか。

	4年生	3年生
変わった	50%	44%
変わっていない	20%	12%
わからない	30%	44%

○「変わった」内容については

	4年生(70人中)	3年生(75人中)
正座が長くできるようになった	17	17
姿勢がよくなった	6	
けじめがつくようになった	6	7
声が大きくなった	2	3
落ち着いて集中できるようになった	2	3
気持ちが変わった		2
礼儀正しくなった	2	

このように学習した子どもたちは「よくなかった」と言うマイナスイメージの回答は少なく、4年生では半数以上の子が「よかった」と回答しています。わたしたちからみればあまり変化はないようですが子ども自身は「よかった」と感じ、「変わった」と感じている者が半数近くいることは成果があった証ではないかとほっとしています。

課題は指導者と指導時間の確保です。「能楽」は伝統芸能の中でも決してメジャーとはいえないので指導する方も少なく、かつ容易には技能を習得できないところから今後も続けていくには指導者の確保が不可欠です。

また、クラブを運営していくには予算の確保も必要です。すばらしいと分かっていても続けていくためには経費を含め多くの人々の協力や努力が必要だと思います。

第６学年

「今井町は、どんな町？」

～江戸時代の町並みが残る町に住む子どもたち～

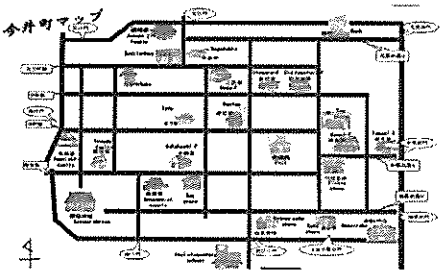
橿原市立今井小学校　教諭　山上　真一

１．はじめに

今井町は重要文化財に指定されている８軒の民家を含め、その町並みの８割が江戸期の様式を保っていることで知られている。平成５年（１９９３年）には伝統的建造物群保存地区に選定され、行政と住民が中心となり町並みが保存されている。近隣に明日香や奈良市がありクローズアップされにくい地理的条件ではあるが、毎年多くの観光客が今井を訪れている。

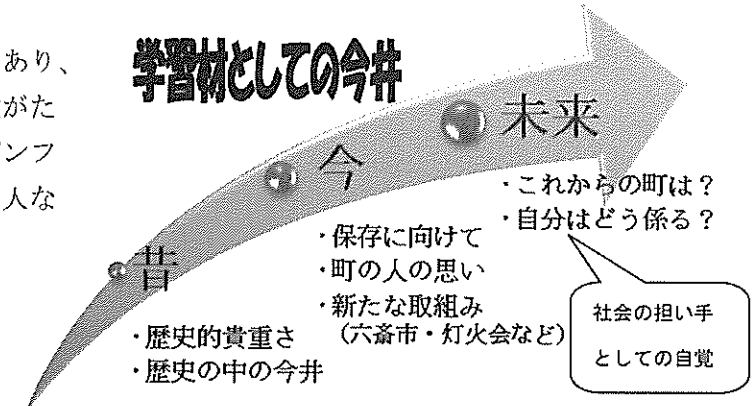
また、選定を受けてから保存に向けての整備が始まり、保存会を中心に茶行列や秋祭り、今井灯火会、冬には「茶粥の会」などの行事も行われている。今井の町を歩くと、静かでごみもなく情緒豊かな環境を守っていこうとする住民の意識の高さをうかがうことができ、町全体が、江戸時代にタイムスリップしたかのように感じられる。

今井町を校区に含む本校は、学校行事・生活科・社会科や今井タイム（総合的な学習の時間）等の時間に、今井町との関わりを柱にしながら学習を計画している。「町たんけん」では重要文化財の家屋を中心に町を学習している。２学期には毎年「全校写生大会」を実施し、今井の町を描いている。描いた作品は、地域住民に公開している。また、外国語活動の道案内の単元では、今井町の碁盤の目状のような道を教材化して取り組んでいる。しかし、目の前にあり、当たり前になっている今井の町について子どもたちはどれほど関心をもっているのか。６年間いろいろな角度から町の学習をしているが漠然とした町の輪郭だけの知識だけになっているのではないかと考え、地域教材としての今井の町を見つめ直すところから取り組み始めているところである。



○地域教材・学習材としての今井町

今井町には歴史的な建造物や道具があり、歴史を辿っていくと他の町にない特徴がたくさんある。それに、町についても、パンフレット、保存会の人やボランティアの人などから話を聞いて調べ学習をすることもできる。町の歴史は戦国時代の一向宗の寺内町・武装都市から始まり、江戸時代には商業都市になり、古い家の多い町から現在の保存していく町へと、その時代の社会や住んでいる人によって変化してきた。自分たちの町を学習する中で「町を知り、好きになり、誇りに思える」ようになってほしい。また、これからの町の内容を話し合う中で、「自分と町との関わり」を考え・深めることで、子どもたちに社会の一員としての自覚や意識が、芽生えるように取り組んでいくことが重要になってくる。その種を子どもの心に植えることができる取組にしていくこが大切であると考えている。



自分らしく歩んでいくことができる子ども

社会に積極的に参加できる人

種

自分のことばで語れる子

今井町のことを
知る・好きになる・やってみたい

身につけてほしい能力

○課題に気づける

○自分で考えることができる

今井タイム

今井町がすてきな町であることに気づく	
1年	学校のまわりのたんけん お年寄り・幼稚園との交流
2年	町たんけん こんなすてきな町なんだ 地域の人とのふれあいなどを通して 今井町のよさに気づく
今の今井町にふれる	
3年	校区たんけん （四条・小綱と比較しながら今井を学ぶ） むかしをさがそう
4年	今井を知る 今井を守ってくれる人々（防災）
今井を考える	
5年	今井町を発信しよう 幼稚園・保育園との交流
6年	歴史の中の今井 住民と行政（保存にむけて） 茶粥体験
全校	はじめましてハイキング 全校写生大会 3年　特徴のある建物 4年　お店を描く 5・6年　残したい今井の風景を描く

学校生活

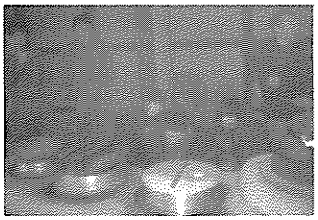
学び（経験・体験など）を通して身につけていく力

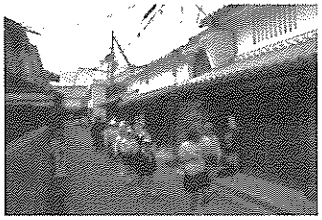
1　**関心**
気づき興味をもち
それから問題意識・疑問をもてる

2　**調べる**
その問題・疑問について知る
調べる＝調べ方を身につける

3　**判断**
自分とその事柄とのつながりを考え
自分がどのようにかかわっていける
のか考える

4　**行動力**
自分の考えを友だちと意見交流し
行動できていける


茶粥体験


はじめましてハイキング

まちたんけん

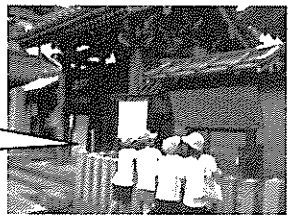
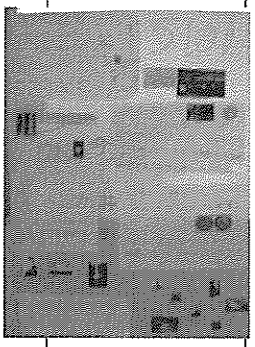
全校写生会

2．ねらい

・自分たちの校区にある今井町について調べ、知る。

・「町のこれからを考える。」ことで今井の町と自分たちとの関わりを考え、町を大切に思っている人々の願いや保存するための工夫や努力に気づくことができる。

3．学習活動の概要

	主な学習活動	学習への支援	評価
みつめる	○「今井町はどんな町？」 説明するならどう言うか。 各自考えた後、交流しながらグループで考える。 ほとんどの人が（9人/22人） **○重要文化財がある町** **○古い町なみがある町** **○古い建物・道具が残っている町** **○歴史がある町** ⇨ 具体的な事柄や聞いた事などが出てくる。また社会の歴史で学んだことも出てきた。	・今までの学習や日常の生活で知っているはずの内容であるが、意外に知っていないことに気づき、関心をもたせる。 歴史・昔　さかえた町 ・明智光秀が通った町？・道がせまい 見た目・四つ角が多い ・関所（門）が9か所 ・寺・神社が多い 現在・有名で観光客が多い ・行事が多い町 ・やさしい、きれいな、しずかな町 ・昔の状態を保つよう努力している町 	意欲的に取り組むことができる。
しらべる	○今井町の見学 町屋館や保存会などへ行き質問したり、観光客の方に「何を観に来たのか」質問したりした。 ○見学してきたことをまとめる。 気づいたことや話を聞いてわかったことなどをグループごとにまとめる。 ・信長・光秀・秀吉・家康からの朱印状等があった。 ・今井札が発行されていた。 ・堺と関係があった。 ・一向宗の寺内町であった。 ・裕福な町・商業都市として栄えた。 ・「大和の金は今井に七分」	・事前の話し合いの事や何かを発見してくるという課題をもち見学へ行く。  信長の名前が書いてある ・見学場所が違ったので、興味深い話や気づきなどをまとめるような声かけをする。 ・今井の道は狭い、一直線でない。 ・３つ角が多い。 ・静かな町きれいな町だった。 ・電信柱が無い道があった。 ・新しい家も昔風にしてあった。 ・観光客にインタビューできた。 ・マンホールのふた。茶色の自販機。 	課題をもち，協力しながら見学できている。 簡潔にわかりやすくまとめることができる。

ふかめる	○まとめたことを交流し、歴史的な事柄と現在の行事などとのつながりを考えていく。 ○ゲストティーチャーの話を聞く。 ○今井町はどのような町なのかをもう一度考える。 ○話し合い 「今井町をどのような町にしたいか」を考えて意見交流する。 ○感想を書き、自分の意見を整理する。	・歴史と現在のつながりを中心に子どもたちとまとめていく。 ・今までの学習の中から疑問や質問をもち、話を聞くようにさせる。 ・学習を通して考えたことを、自分の言葉で表現するように指導する。 ・学習したことを踏まえて今井町の将来について「自分と今井町」を結びつけて考え、話し合いができるように進める。	分かった事と歴史で学習したことのつながりを考え気づくことができる。 自分の言葉で町の事を表現することができる。
ひろげる	○今井町のいろいろな事をそれぞれ出し合い双六を制作する。	・学習を通して知ることができた今井町を整理してまとめていくことができるようにする。	

4 成果と課題

○**6年間の系統性**…歴史を社会科で学習したことで、今井の歴史上の事柄に興味をもち、学習を進めることができた。最初、漠然としか今井町を知らなかった子どもたちが、信長や秀吉など歴史上の人物との関係がわかってくると、誇らしげにしていたのが印象的であった。子どもたちに話をしてくださった方々も中学年の「まちたんけん」では、歴史学習をしていないので、「歴史に関わるいい質問をしていた。」と言っておられた。そのことからも各学年でどのようなめあてをもち取組をするのか、今井町を教材化していくのかを検討していく事が必要である。

○**人との関わり**…保存会やガイドボランティアの方々をはじめ、今井町の保存と開発いう課題の中で、活動されている人々がたくさんいる。そのような人との関わりを通して、今井町を支えていく人に自分もなっていくということに気づき自覚につなげていきたい。人との関わり大切にする取組を工夫していく必要がある。

○**文化財の保存＝町の人の思い**…地域学習は、その地域の昔・現在を知ることがスタートになる。そのことをベースに、地域の「これから」を話し合う中で、今井町の人の思いに気づくことができるのではと考える。今井町のような歴史的な文化遺産は、日本の貴重な文化財として未来永劫守っていかなければならない。しかし、その文化遺産を残すのも壊すのも人である。そう考えると、町を愛する人の素晴らしさを子どもたちに気づき考える機会をもたせることが大切である。その人たちの思いや行動が文化遺産の保存につながっているということに気づかせたい。保存のために不自由とも思える生活の中で暮らしている今の今井町の人の思いや願い、それが何よりも代え難い今井町の素晴らしさだということに気づくことができる取組にしていくことが大きな課題である。

第５学年

奈良の遺産を守るということは･･･

― 『幻の大仏鉄道』を掘り起こす人たち ―

奈良市立済美小学校　教諭　大西　浩明

１．はじめに

大仏鉄道は、現在のＪＲ関西本線の前身である関西鉄道株式会社が、名古屋方面から大阪への進展を目指して延長を急ぎ、加茂駅から現在の奈良駅の北約１kmの地点にとりあえず仮設的に作った大仏駅との間を結ぶ約９kmの路線の愛称である。明治31年(1897年)大仏駅が開業したが、伊勢や名古屋方面からの大仏参拝客が大勢利用し始め、一条通りから東大寺転害門近辺は大いに賑わったという。しかし、大仏線は明治40年（1906年）８月に廃線となった。大仏鉄道は営業期間９年という短さに加え、国有化される前に消滅したため、当時の資料に乏しく、『幻の鉄道』と言われている。この大仏鉄道を研究し、その歴史的価値をＰＲするとともに、奈良から加茂にかけて残っている遺構を美しい里山の風景とともに保存し、あわせて街づくりにも貢献することを目指して平成14年(2002年)に地元の鉄道愛好家で結成されたのが、大仏鉄道研究会である。大仏鉄道が実際に存在したことを末永く多くの人に知ってもらおうと、ガイドツアーをはじめ、紙芝居やお話会を巡回実施されている。世界遺産見学において子どもたちが感じた、なら観光ボランティアガイドの方たちの『奈良に対する熱い思い』と同様、「遺産＝たからもの」と思うからこそ、点在する大仏鉄道の遺構を何としても未来へ残していきたいという研究会の方たちの思いを、実際に遺構や研究会の方たちと触れあう中から実感させたい。そして、遺産を守るということの意義や、そのためには人の力が必要であるということ、また、奈良に生きる者として、自分たちも多くの遺産を守っていく担い手としての大切な役割があるということなどを考えさせたいと思い、本実践に取り組んだ。

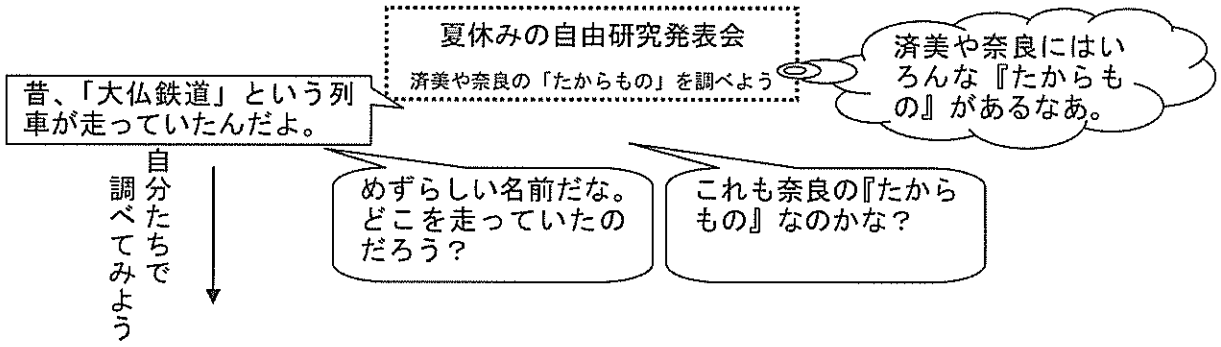
２．ねらい

○　奈良の文化遺産について、意欲的な態度で見学したり、それらを守ろうとしている人たちの思いについて積極的に考えたりする。

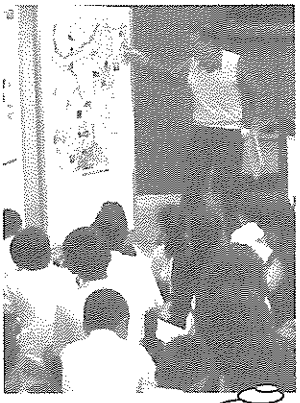
○　奈良の文化遺産を守ろうとしている人や奈良を心から愛している人が多くいることに気付き、友だちと意見を交流したりすることを通して、遺産を守っていくことの意義やそのための方策をねり上げ、それらを分かりやすく伝えることができる。

○　世界遺産をはじめとする奈良の様々な文化遺産のすばらしさを理解し、これらを奈良に住む者として未来へ大切に守っていこうとする意欲と態度をもつ。

３．学習活動の概要（全２０時間）



大仏鉄道研究会の方に話を聞こう



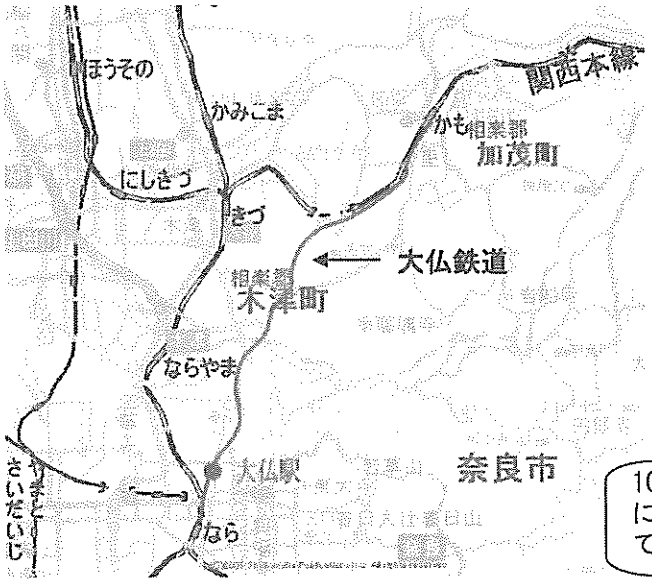
・今から約１００年前、加茂～奈良を結ぶ路線として開通した。
・伊勢や名古屋から大仏を参拝にやってくる人たちでにぎわった。
・開通から１年後には、今のＪＲ奈良駅につながった。
・赤いイギリス製の蒸気機関車だった。
・わずか９㎞を約２５分かかって走っていた。
・黒髪山が最大の難所で、村人が当番を組んで汽車を押したりした。
・坂の途中で止まると、お客さんも降りて後押しをしたらしい。
・わずか９年でなくなったので資料も少なく、「幻の鉄道」と言われている。

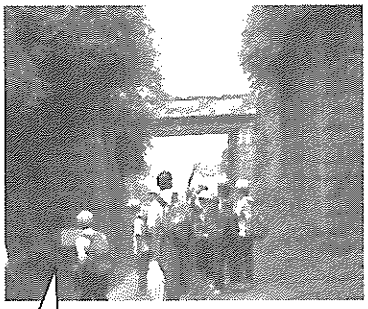
赤い蒸気機関車なんて、見てみたいなあ。

たった９年でなくなってしまったのは残念だなあ。

人が押さないと坂を上れないなんて･･･

大仏鉄道の跡をたどろう【秋の遠足】



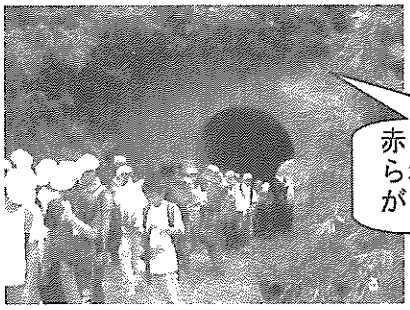


観音寺橋台

100 年前のものなのに、がっしりしていて頑丈だなあ。

鹿背山橋台

この橋台の上を赤い蒸気機関車が煙をはいて走っていたのかあ。



梶ヶ谷隧道

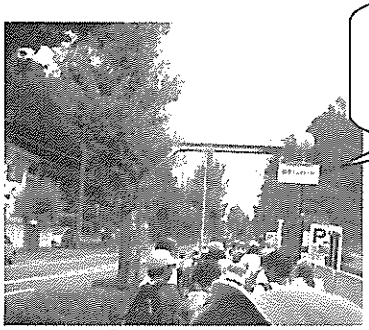
赤レンガでしっかり造られているなあ。これがこわされるの!?

上の車が走っているところに線路があったんだ。今も使われているんだ。

赤橋

今は農業用水路としてちゃんと使われているんだな。

鹿川隧道



たしかに急な坂だけど、人が押していたなんて･･･。

黒髪山トンネル跡

「佛」「鐵」という字をわざわざ使っているのは･･･？

大仏駅跡

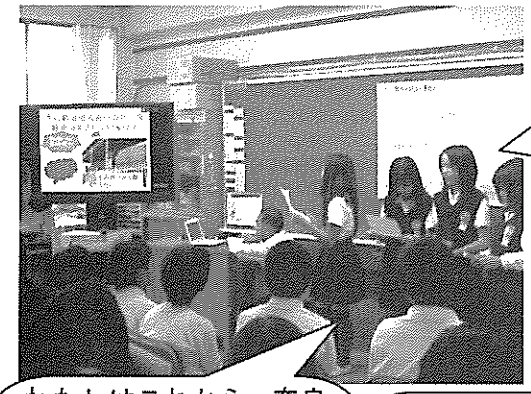
研究会の方たちは、なぜ大仏鉄道のことを掘り起こそうとしておられるのだろう？

たった９年であっても、それがあったということを何としても証明したいからじゃないかな。

大仏鉄道があったことが、『たからもの』だと感じられるからじゃないかな。

そんな『たからもの』のことを多くの人に知ってもらいたい。それはわたしたちと一緒だと思う。

大仏鉄道研究会の方に、学習の成果や自分たちの考えを伝えよう

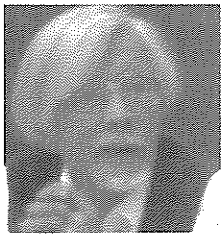


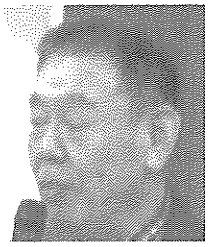
大仏鉄道を学習して、身近なところにも知らない「たからもの」があるということがわかりました。

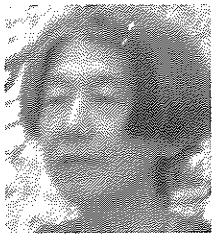
わたしはこれから、奈良にたくさん残る「たからもの」についてもっと知って、なくならないようにしていきたいです。

こわされてしまうものもあると聞いて、とても残念です。なんとか残していきたいのですが･･･。

研究会の方がいっしょうけんめい活動されるのは、大仏鉄道があったことを「たからもの」と思い、もっと多くの人に知ってほしいからだと思います。







岩崎さん
私自身は、「残さなければ」という使命感などはありません。ただ、人間として、いいものは次の世代に残していく必要がある。人間は、いいものを残そうとはできるはずですから。たったそれだけなんです。

河西さん
私は退職後、この活動が私の仕事であり、これからもそうだと思っています。なくすことは簡単ですが、一人でも多くの方に大仏鉄道のことを知ってもらって、残せるものなら何としても残していきたいです。

池田さん
私はこの活動をしていて、いろいろな方たちと触れ合いつながっていける喜びを感じています。私にとって大仏鉄道を守るということは、人の心を結び、つなげることなんです。それは大変だけど、楽しいです。

学習を終えて
大仏鉄道の残っているものも、こわされてなくなってしまうかもしれないと知ってすごく残念に思います。「なくなってしまったら、ただの思い出になってしまう。そこにあることが大切なんです。」という研究会の方の言葉が心に残りました。　（中略）
奈良には、とてもすてきなものや、大事にしていきたいものがたくさんあるので、わたしはこれから奈良のことをもっとたくさん知って、たくさんのたからものを見つけていきたいと思います。

奈良の遺産を守るということは･･･
「歴史のつながりを切らないこと」　「つくった人の意志を継ぐこと」
「一人一人の心を守ること」　「自分たちの心の中にあるたからものを守ること」
「人の絆が深まること」　「世界に一つだけのものを守ること」　「歴史を終わらせないこと」
「つくった人や守ってきた人の気持ちを大切にすること」　「日本を守ること」
「次の世代の人に歴史を受け継いでいくこと」　「次の世代の人に伝えていくこと」
「将来の人に奈良のすばらしさを知ってもらうこと」　・・・

世界遺産と同じように、それを守っていくためには人の力が必要なんだ。

他にも近代遺産が身近なところにないかな？

旧ＪＲ奈良駅舎の保存

４．成果と今後の課題

奈良に残る様々な文化遺産を未来へ大切に残し繋いでいくのは、私たちが目の前にしている子どもたち自身であり、彼らが「奈良を知り」「奈良に触れ」「奈良の人と関わる」ことで、その可能性が広がるものと信じている。今回、子どもたちがこれまで知らなかった大仏鉄道の様々な物語を知り、大仏鉄道研究会の方々の『熱い思い』に直に触れることで、身近な地域に残る世界遺産をはじめ様々な文化遺産を自分たちの誇りと捉え、大切に守っていかなければならないという思いが生まれてきた。

放ったらかしにしていては残していくことができない、そこには必ず人の力が必要だということが実感として気付けたことは大きな成果である。残すのも、壊すのも人であるということを感じられたので、今後自分がどうするかという具体的な行動目標を話し合いなどを通して考えさせていきたい。

中国のユネスコスクールにおけるESD実践と模索

中国人民大学附属中学校高校　教諭　楊　傑川

1．はじめに

今日、持続発展教育（以下ESD）は世界の共通認識といえる。中国でも、多くの小、中学校でESDの実践活動が展開されている。中国ユネスコ国内委員会が推進するESDプロジェクトでは、1000校近くの学校が加盟しており、彼らは中国のESD実践の手本として第一線に立ち、様々な取り組みを行っている。

中国ユネスコ国内委員会が進めるESDプロジェクトは、確かに大きな成果を挙げているものの、ASPnetの取り組みに目を向けると、いささか停滞気味に思える。目下、中国全土でユネスコスクールに加盟しているのはたったの6校に過ぎない。この中国におけるESD活動とユネスコスクールの関連性の薄さは、ユネスコ憲章に示された理念が学校教育の現場で依然十分な認識を得ておらず、普及していない事を反映している。例えば国際理解教育を行う学校の多くは、いまだ“国際交流”というイベントの盛んさをアピールすることや、いかに外国語教育に力を入れているか、に力点を置いている。世界遺産教育についても、“中国の伝統文化”を前面に出すやり方が主流である。

筆者の勤務校は、2003年にユネスコスクールとESD実践校のメンバーに相次いで加盟した。特に2005年以降は、日本の大阪のユネスコスクール三校（大阪教育大学附属高等学校池田校舎、大阪府立北淀高等学校、私立羽衣学園高等学校）との交流を中心とした、ASPの国際的なネットワークを通じた活動を行っている。日本の優秀なユネスコスクールの取組は、我が校のESD活動に多くの貴重な経験をもたらしてくれた。2008年から、筆者は“共に生きることを学び取る”を目標とし、国際理解教育の教材や授業展開を試みてきた。本稿では先ず、中国におけるESDとASPがどのように展開されているかを簡単に説明する。次に、筆者の勤務校での具体的なESDの取り組みとして、「各国文化調査」、「インタビュー・私の外国人の友達」、「ワークショップ・ステレオタイプが偏見に変わらないために」、の３つを紹介する。そして最後に、実践の成果と問題点について分析したい。

2．中国のESD実践概要

中国でのESDの目標は四つに分けられる。第一は、初、中、高等教育機関の教育を担う者の、ESDについての認識と技能を向上させ、素質教育の新たな教育モデルをつくる。第二に、学校教育を通して、青少年へ持続可能な発展のための科学的知識、意識、技能を身につけさせる。第三に、主体性をもち、持続可能な発展を目指す思想や能力をもった、新しい公民を育成する。第四は、持続可能な発展と教育を結びつけ、青少年、さらには社会を構成する全ての人々を動員し、人類の生存環境を改善し、経済、社会と環境の持続可能な発展ができるよう世界各国の人達と共に努力する。

この目標を基に、中国では学校を三段階に分け、ESDプログラムに取り組む。三段階とは、ESDメンバー校とESD実験校とESD模範校である。授業と授業以外の特別活動に対し、それぞれ「主体的探求から総合的浸透へ」と「主体的探求から一協力して体験する」をESDの実施原則とした。2007年、北京市教育委員会は国連の『DESD計画』をもとに、『北京市小中学校ESD指導要領』を公布し、中国のESD学習内容を提示した。では、具体的にどういった取り組みがなされているのか。以下は小学校、中学校と高校のESD活動事例である。

事例１：公民教育実践活動（江蘇省蘇州星海小学校）

この取り組みは、子供のコミュニティ意識、政治参加意識を養い、理性的に調査し、批判的に考え、有効的に人とコミュニケーションできる市民を育成するための実践である。子どもたちは主に三つのテーマ（「自転車の交通ルール違反」、「都市を汚す違法広告」、「我が校の校門前の交通渋滞現象」）をめぐって研究活動を行う。子どもたちに自ら問題を調査させることにより、市民意識と

責任意識を育成する。研究を通してその過程から、生徒たちの発見力、思考力、判断力、協調性、コミュニケーション能力など多様な問題を解決する能力を開発する。

事例２：青少年水を愛しもうプロジェクト（北京市東直門中学校）

北京市内を流れる堀と川と岸辺の歴史と文化の変遷を研究する。生徒は三つのグループに分かれ、一つは堀や川の歴史的背景を調べる。インターネットや書籍から、胡同と呼ばれる横丁に関する文化や、清朝の北京地図と旧市街の城門城壁の写真などを集める。その後資料を分類し、ポスターを作成、昔の北京城のお堀の様子を展示する。もう一つのグループは現在の堀の様子を調べる。堀や川の周りを歩いて写真を撮ったり、新聞などの資料を収集、整理したりする。別のグループは北京市の未来の都市計画を考える。国外の古い町並み保護の事例などを調べる。三つのグループは、交流を通して互いに自分の発見と成果を分け合う。その後共同で、市民たちに川や堀の保護を訴える公共広告のデザインを考え、北京の堀をどのように保護と開発するか提案する。

事例３：割り箸を利用した食用菌類の栽培（北京鋼鉄学院附属高校）

生徒たちは総合実践活動時間を利用して、北京師範大学生命科学学院の院生たちと、割り箸を利用した食用キノコの栽培という共同研究を行っている。この活動の次のような流れで行う。付近のレストランを巡回→割り箸を集める→割り箸の消毒→割り箸を袋に入れる→キノコの菌を培養させる→消毒→保温、保湿で栽培環境を整える。割り箸を再利用し、キノコを育てる事で、キノコ栽培の技術と微生物実験の方法などを身につけた。割り箸から出発した生物環境に関する討論では、環境保護とエネルギー節約の意識が育てられ、資源の再利用の必要性と現実性が実感できた。

３．中国の ASP 活動概要

現在中国で行われているユネスコスクールの取り組みとしては、主に国際理解教育と世界遺産教育があげられる。例えば、2004 年と 2006 年、北京師範大学附属実験高校が「世界遺産国際青年論壇」を主催し、北京の高校生を代表して文化遺産保護をうたった「青少年宣言」制定した。そこでは、「真の中国人になろう、中華魂を鋳造しよう、文明の火を次に伝えよう、文化の根を植えよう」と提唱されている。2008 年、中国最初の世界遺産青少年教育センターが同校で設立され、世界遺産教育の普及に努力、貢献している。

また、筆者の勤務校である人民大学附属中学高校と、日本の大阪地区ユネスコスクール三校が、協同で行う国境を越えた ESD の取り組みは、北京をはじめとする学校教育界で、徐々に注目されてきている。2008 年、人民大学附属中学高校は、アジア五カ国ユネスコスクールのネットワークによる、ESD の教材開発プロジェクトに参加した。中国のユネスコスクールとしては、国内初めての国際的な実践活動への参与である。日本のユネスコスクールは、人権保護を基礎として、日常生活レベルの態度と行動から世界的規模の問題を学ぶ意欲を開発する過程は、大きな成果を果たしたと思う。留まるところの知らない受験戦争、功利的な印象が否めない中国の教育事情にとって、日本のユネスコスクールの取り組みは新鮮であり、大きな示唆を与えてくれた。

４．“共に生きることを学び取る”を目標とした授業活動

１．活動目標

知識面では、差異を認め、自分と異なる社会、文化、家庭の背景への理解を深めることを目指す。

態度面では、文化の多様性を理解し、認め、尊重することをねらいとする。例えば、他人の気持ちを汲み取ることや相手の苦痛を理解すること、他人の感情に共鳴ができること。偏見と固定観念によってもたらされるステレオタイプを認識し、“差異”と“差別”の区別ができること。誇りと自信を確立し、日常生活における自己肯定の習慣化を促す。

技能面では、ルールを尊重し、他人と友好的に協力できる能力の取得を目標とする。例えば、資料の収集、分析、整理を通じて、感情的ではなく理性的に自分の考えを主張すること。物事を鵜呑みにするのではなく、批判的に考えることを意識させる。

２．実施概要

事例１：「各国文化調べ」学習

調査項目は経済、文化、教育、自然／地理、宗教、言語、英雄、世界遺産とした（大阪教育大学附属高校池田校舎の総合的な学習の時間を参考にした。）生徒たちは自分でグループ分けをし、抽選で調べる国を決めた。場所は教室以外に、図書館とインターネット室も活用した。成果は期末にグループごとに、ポスターとパワーポイントを使って皆の前で発表する。担当した国へより親近感を抱かせるため、生徒にはその国の“親善大使”、或いはガイドになりきり口頭発表させた。そのためか、質疑応答では、発表者と聞き手が激しく議論する場面が少なくなかった。例えば「韓国が端午の祭りを世界遺産に登録したことについてどう思うか」、「伊田助男は日本の英雄と言えるかどうか」などが討論の話題になった。

事例２．「インタビュー・私の外国人の友達」

インタビューの対象である“外国人の友達”は、校内の外国人の先生と生徒に限定した。質問事項は、あらかじめこちらで規定したものと、グループで自由に考えた内容を含む。こちらが規定した質問内容は、①最近何をしていますか。②いつから中国と接触しましたか。③中国との関係はあなたの仕事や生活に何か影響を与えていますか。④中国で一番いい思い出は何ですか。⑤中国で一番不愉快な思い出は何ですか。⑥一番好きな中華料理は何ですか。⑦あなたにとって一番「中国らしい」ものとは？⑧中国の文化で、あなたに一番強烈な印象を与えたものは？ ⑨もし可能なら、どの中国人の一日を体験したいですか。⑩中国のどの習慣や考え方を自分の国に持ち帰りたいですか。この授業のねらいは、生徒がインタビューという形式を通じて、身近にいる外国人を個人としてとらえ、彼らが「異文化」である中国で、具体的にどういった経験し、どういった態度をとっているのか理解させることである。インタビューを行う前に、グループのメンバーたちは各自役割分担し、インタビューのスケジュールをたてた。事前学習として、インタビュー相手の国の事情を調べたり、インタビューするにあたっての注意事項の確認をしたり、リハーサルをしたり、インタビューを受けてくれたお礼の準備をする時間をつくった。期末には、各グループがインタビューの結果を整理し、パワーポイントで筆者に報告するようにした。

事例３：ワークショップ「ステレオタイプが偏見に変わらないように」

中学校での実践を通じて、今日のような高度に情報化された社会に生きる生徒たちにとって、彼らの文化理解はメディアの影響が大きいことを実感した。「異文化」への好奇心は、各種メディアの往々にして自国の国民に向けて創られた一方的な報道から引き起こされることが多い。一方的にメディアの内容を受信するだけでなく、もっと批判的に情報を分析し判断する、いわゆるメディアリテラシーを養うことが必要であると感じた。

2009年9月、筆者はホームルームの時間を利用して、留学生と中国人の生徒でワークショップを実施した。アイスブレイク、スライドを使った筆者からの問題提起、そしてグループ討論を経て、生徒達は自分自身や身近に存在するステレオタイプや偏見を確認した。スライドでは、まず何枚かの印象の全く異なる写真を見せ、これがある一つの国の写真である事を説明、その国名を当てさせた。生徒の答えはばらばらで、国名を教えると、多くの生徒が自分もステレオタイプを無意識に抱いていると気づいた。グループ討論では、生徒たちに普段の生活でどのようなステレオタイプがあるか、話し合い発表させた。例えば、「中国人は不衛生」、「韓国人は皆キムチが大好き」、「中国のインターネットユーザーは皆韓国と日本が嫌い」、「中国人は皆共産党を信じている」、「成績がいい人は皆ガリ勉で真面目」など、たくさんの例が挙がりとても盛り上がった。活動後の感想で、ある生徒はこう書いた。「私たちは、自分で体験して自分で事実を発見しなくてはいけない。隣にいるクラスメイトに対してだって、ステレオタイプで見ていた部分があると分かった。色々な物事に自ら触れ、調べ、理解してこそ、そこに隠れている真実がやっと見えてくる。」

５．成果と課題

１．成果

学習活動をふりかえり、筆者の実践の成果を３点に絞ってまとめる。

第一に、共に生きることを目標にした教材開発の意味。“共に生きる”を中心理念とし、グローバル化における人類相互依存の大切さを強調している。一人一人が「事実上の相互依頼を意識的に助け合えることに転換する」ことを目指す。学校教育では特に生徒に、自らと異なる文化や価値観を尊重することの大切さを説き、社会における不公正さを体験させて、個々人の他人、社会、そして世界とのつながりと責任を見つめ考えさせることが有効であると感じる。これは ESD の学び方、考え方と一致している。上述の筆者の試みでは、調べ学習を通じて生徒に、世界は文化、経済、政治、エネルギーなど多岐にわたり繋がり、互いに支えあっていると認識させ、生徒が有意義な討論をし、批判的に物事を考え、トラブルや衝突を解決し、また適切な行動をとるための提案を出す基本的能力を鍛えた。

第二に、生徒の人格が形成される途上において、特にコミュニケーション能力をアップさせ、自分に対し肯定感を高め、誇りをもつことを意識させた。グループで分かれて作業させる方法は、中国では一般的でない。教師が一方的に講義する形ではなく、グループのメンバーとコミュニケーションをとりながら協力して任務を完成させた。例えば上記ワークショップのグループ討論で、一人の韓国人生徒が言語能力の問題で、すらすらと自分の意見を発表する事ができなかったが、中国人生徒はじっと彼がしゃべり終わるのを待ち、積極的に手助けをしていた。この生徒は、ワークショップ後も同じグループだったメンバーと会うと、挨拶をしたりおしゃべりをしたりし友達になることができた、と語った。

第三に、生徒たちが他の文化を知ることで、自文化を自覚し、アイデンティティを確認することを促した。他国の調査や他者へのインタビューを通じて、多くの生徒は無意識に自分が属する中国文化や教育制度などと対照する。それは問題の理解や反省を一層深める助けになる。

２．課題

２年にわたる実践は多くの課題を残したが、特に以下の３点に絞った。

第一に、いかに安直な「他国理解」と「異文化理解」を超えるかという問題である。各国文化調べにしても、インタビューにしても、授業では「外国」と「中国」、「外国人」と「中国人」の二次元のパターンしか提示できなかった。生徒たちは、「我が国」を軸とし、何でもひたすら単純な「比較」ですませる思考様式に慣れてしまうかもしれない。文化の相違点には、分析していくと、存在するつながりや“違うことの意義”が見えてくるはずだが、それを無視してしまう恐れがある。結局それでは、「異文化の意味をその異文化のシステムにおいて理解する」能力を育てるのは不可能なのでは、と反省する。

第二に、評価の問題。当初授業の終わりにくばる感想カードと、授業態度で評価をしようとしたが、１クラスの人数が多く、一人一人をじっくり観察するのは不可能なこと、また提出してもらったカードの量も多く、筆者への負担が大きくなってしまったので途中でやめてしまった。期末評価は学校からの要求で、具体的な点数をつけなければならないが、授業の性質から点数をつけることが本当に難しいので、どういった評価方法をとるのが適切なのかいまだ模索中である。

第三に、教師間の“横の協力”が不十分である。ESD の目標は、１つのクラス、一人の教師の活動ではとうてい達成できない。筆者は教材開発を試みたが、目標設定や具体的な行動などについて、担任の先生や他教科の先生との協力や連携を得ることができなかった。授業内外でいかに“学習共同体”を構築するか。教師間の横の協力、連携が不可欠であるものの課題は多い。

６．おわりに

中国では目下、政府主導で ESD の推進がなされ、多くの小中学校が ESD の理念に大きな興味をもち、その活動には肯定的である。しかし、学校で独自に展開される ESD と称される活動は、時に何でもありといった印象を受ける。また、中国ユネスコ国内委員会が推進する ESD プロジェクトのメンバーではないが、実は ESD 実践といえる取り組みを行っている学校も多い。今後、ESD 実践の展開につれ、ユネスコの精神を普及させ、開花させるところも多くなるようにと願う。

第１学年

ゴレ島から負の遺産の意味を考える

奈良教育大学附属中学校　教諭　吉田　寛

１．はじめに

国際交流基金の市民青少年交流の一環で、セネガル・コンゴ共和国・ベナン・フランスの教員 13 名のグループが今年 10 月に本校を訪問され、授業を視察されるという機会を得た。

これまでも本校では春と冬の毎年２回、フィールドワーク「奈良めぐり」という行事を通して、奈良を中心に世界遺産学習を行ってきたが、今回、セネガルのゴレ島に勤務されている高校教員の方が訪問団に含まれていることがわかり、16 世紀から約３世紀にわたって奴隷貿易の積み出し拠点となったセネガルのゴレ島を教材に、「負の遺産」の意味を考える授業を実施することにした。

なお、本教材は世界遺産学習の教材キット「守ろう地球のたからもの　世界遺産編」（日本ユネスコ協会連盟編）に収録されている山下欣浩教諭（鳥取県米子市立淀江中学校）の実践を一部変更して追試したものである。

２．ねらい

○　写真や資料をもとに、奴隷貿易の実相(三角貿易の仕組み・ゴレ島や奴隷船での生活など)をつかみ、人間を「商品」とする貿易がなぜ行われたのかについて考える。

○　奴隷貿易がアフリカ社会にどのような影響を与えたのか、またゴレ島が「負の遺産」として世界遺産に登録されている理由は何かを考える活動を通して、人類の犯したこの過ちを二度と繰り返さないようにするためにはどうすればよいかを考える。

○　授業を通して生じた疑問などを、ゴレ島から来訪された先生に問い、今アフリカに暮らす人々にとって奴隷貿易という歴史的事実がどのような意味をもつのかを学ぶ。

３．学習活動の概要

学習の流れ

	学　習　活　動	教師のはたらきかけ	資　料
導入	○現在のゴレ島の写真を見て、この島がどこにあるかを予想し、地図帳で確認する。	○予想させた後、各自の地図帳でセネガルとゴレ島の位置を確認させる。	ゴレ島の遠景(写真①) 世界の掛地図・地図帳
展開Ⅰ	○この島が世界遺産に登録されている理由を考え、自由に発言する。 ○二枚の写真をヒントに考え、各自の意見を発表する。 ○DVD を視聴し、ゴレ島の持つ歴史的な意味を知る。	○ゴレ島の何が評価されて世界遺産に登録されたかを問い、考えさせる。 ○自由発言後、写真②と③を提示する。 ○DVD を視聴させ、写真の場所の意味とゴレ島が 16 世紀から約３世紀にわたって奴隷貿易の拠点であったことをつかませる。	帰らざる扉(写真②)と奴隷の収容部屋（写真③) DVD(NHK「世界遺産 100」

展開Ⅱ	◎奴隷となった人々の島や奴隷船での生活について考える。 ○「ゴレ島・奴隷船での生活」の資料を、大切な所に赤線を引きながら各自で黙読する。 ○黙読後、資料から知ったことや驚いたこと、疑問に感じたことなどを発言する。 ○なかまの発言や先生の解説を通して、奴隷貿易の概要をつかむ。 ○先生の問いに答え、板書をしながら、三角貿易のしくみ(輸出入の地域・貿易品の流れ、黒人奴隷を必要とした理由など)をつかむ。	◎〔問〕「奴隷貿易というのはどんな貿易なのでしょう。又、奴隷にされた人々はどんな生活をしていたのでしょう。」 ○資料①について、初めて知ったことや驚いたこと、許せないと感じたことに下線を引きながら、じっくり読むよう指示する。 ○黙読後、資料からつかんだことや疑問に思ったことなどを複数から発言させ、受け答えや説明をしながら、奴隷貿易のしくみや奴隷の生活(ゴレ島での収容や奴隷船の様子等)の概要を理解させる。 ○「そもそも、なぜ多くの奴隷がアメリカ大陸へと運ばれていったのでしょうか。」と問い、三角貿易について図化した板書で整理して解説する。 ・地図帳で、アフリカのギニア湾に「穀物海岸」「象牙海岸」「黄金海岸」「奴隷海岸」に気づかせる。また、「これらの名称を付けたのかは誰か」と考えさせる。 ・黒人奴隷が大量に必要にされた理由を、砂糖加工業と関連付けて補足説明する。	「ゴレ島・奴隷船での生活」(資料①) 奴隷船の様子(写真④) 地図帳
展開Ⅲ	◎(ここまでの学習を踏まえて)ゴレ島がどのような意味で世界遺産に登録されているのか、理由を考えて発言する。 ・自分の考えをノートに書き、次に班のなかまと意見を交流する。 ・なかまの意見をしっかり聞いて、自分の考えを広げ、深める。	◎〔問〕「ゴレ島が世界遺産に登録されている理由はなぜだと思いますか。」 ・同じような意味で登録されている所として、原爆ドームやアウシュビッツ収容所跡などがあることを知らせる。 ○人類が二度と繰り返してはいけない過ちをしっかりと心に刻み、その記憶を次世代につなぐという強い願いが込められていることを押さえる。	原爆ドームとアウシュビッツ収容所の写真
展開Ⅳ	◎セネガルから来られたセン先生に質問したいことを考え、ノートに箇条書きにする。	◎今日、ここにはゴレ島で高校教員をされているセン先生がおられます。ここまで学んできて疑問に思ったことを、セン先生に質問してみましょう。 ・数名を指名し、質問をさせてセン先生に答えてもらう。 ・質問が出ないようであれば、山下実践で出された淀江中学校の生徒の疑問(＊)を紹介する。	

（＊米子市立淀江中学校の生徒たちから出された質問）

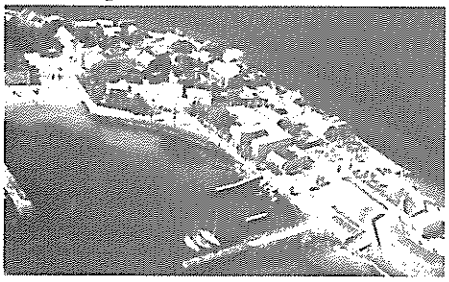
①「三角貿易を行っていたときに利用された部族間の対立は、今でもありますか？また、そのことをアフリカの人たちは現在、どう思っていますか？」

②「ゴレ島が世界遺産に指定されてから、訪れる観光客は増加しましたか？また、その観光を商売として生計をたてることに違和感はありませんか？」

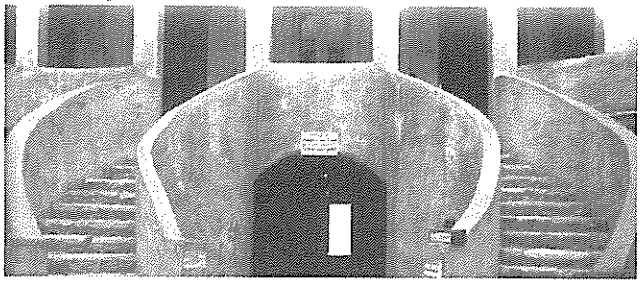
③「ゴレ島でも、奴隷貿易のことや人権に関する学習はありますか？また、こんな悲しい歴史をどのように授業で伝えているのでしょうか？また、白人に対する嫌な気持ちは今もあるのでしょうか？」

まとめ	◎ゴレ島から来られたセン先生のお話を聞く。 ・事後の課題として、本時の感想を別紙に書いてくる。	◎セン先生から日本の子どもたちに伝えたいことをお話しいただく。 ・セン先生には事前に依頼しておく。 ・事後の課題として授業の感想を書くためのワークシートを準備する。	

写真①

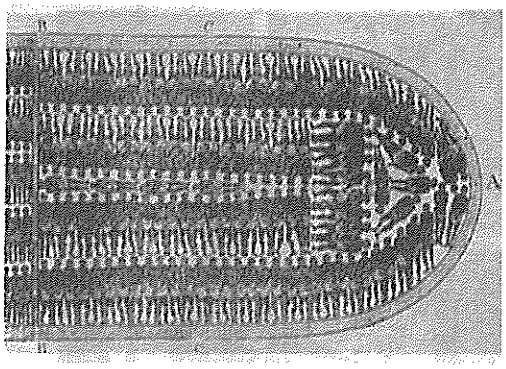


写真②



写真③

写真④



〔資料①〕

みなさんは奴隷って知っていますか。同じ人間であるにもかかわらず、物と同じように売り買いされ、自由や権利、そして時には命までもうばわれたのです。

アフリカ大陸のセネガルという国にあるゴレ島は、300年以上もの長い間、西アフリカから西インド諸島やアメリカ大陸に、奴隷を運ぶ港として使われていました。

この島にある「奴隷の家」は、２階建てで、写真②の階段の上は奴隷商人たちの部屋でした。豪華なつくりの２階の部屋とは対照的に、１階の奴隷たちの部屋は、６畳ほどの部屋に15～20人、全体では150～200人が押し込められていました。奴隷たちの足には脱走を防ぐための「足かせ」がはめられ、20kgもある重りがつけられていました。反抗すると、立つこともできないような狭い部屋に入れられ、食料も与えられませんでした。２つの階段にはさまれた中央の扉から、奴隷たちは奴隷船に乗せられ、

二度と故郷に戻ることはありませんでした。奴隷の中には、それを悲しんで海に飛び込み自殺した者もいたそうです。そのため、この扉は「帰らざる扉」と呼ばれています。

奴隷船の中では、写真④のように、狭い船室にぎゅうぎゅう詰めにされ、およそ50日もの長くつらい航海にたえなければなりませんでした。奴隷たちに許された空間は、長さ180cm、幅40cm、高さ80cmほどの、寝るだけがやっとの空間しかなく、船上につれ出された時も、鎖で常につながれ、身動きすることもできませんでした。このような船内では、熱病などの病気にかかる者も多く、その病気が他の奴隷たちにうつることを恐れた船長は、船員に指示を与え、海へと投げ捨てたそうです。そのため、奴隷船の後ろには、投げ捨てられた奴隷を食べるサメがいつもついてきたという話も残っています。

この航海を終え、どうにか生き残った人たちも、たどり着いたアメリカ大陸などの農園で、コーヒーやさとうきび、たばこ、綿花などの栽培をするために、死ぬまで働かされました。奴隷たちの生活は生きている限りその苦しみからのがれることができなかったのです。

4．成果と課題

今回、本実践は中学１年生の社会科地理的分野「世界の様々な国々」の単元で取り扱った。写真や資料をもとに、人間を「商品」として扱った奴隷貿易がなぜ行われるようになったのか、三角貿易のしくみの解説も交えながら、学習を進めることにした。

また、そのことから発展させて、ゴレ島が世界遺産に登録されている理由を考えることを通して、「負の遺産」の意味を考えるようにした。

ゴレ島は、先述の世界遺産教育の教材集で、「原爆ドーム」や「アウシュビッツ・ビルケナウ ナチスドイツの強制絶滅収容所」とともに、「平和と人権」というＥＳＤのテーマに迫るためのツールとして採り上げられている。授業の下地となる指導案と資料もあり、本授業の大筋の展開は山下実践に沿ったものである。ただ今回は、ゴレ島の高等学校で歴史の授業を担当されている教員が本校に来られるという千載一遇の機会を得たので、その先生に対し質問をぶつけ、また先生から日本の子どもたちに伝えたいことを話してもらう場面を取り入れた授業とした。

指導案では、生徒の疑問が出てこないことも想定していたが、実際に授業してみると、「なぜ、奴隷貿易の積み出し港としてゴレ島が選ばれたのか？」「現在、フランスなどヨーロッパの人々が観光でゴレ島を訪れることに対して、怒りなどの感情は抱かないのか？」という２つの質問が出た。１つ目の質問に対しては、地図を使って地理的側面から答えていただき、２問目に対しては「過去の事実として記憶には残っているが、わだかまりは全くない。」という答えをいただき、私たちが広島に来られるアメリカ人を見る視線と同じ目線でゴレ島の人々も「負の遺産」をとらえていることを理解した。この様子については、世界遺産学習全国サミット当日の分科会でもご紹介したい。

本校１年生は 11 月には国立民族学博物館の社会見学を控えており、サトウキビの圧搾機や奴隷貿易で使われた足かせや鎖を実際に目にする。モノに触れることで、改めて負の遺産について考えることを願っている。

5．参考文献・映像

□ ＮＨＫ『世界遺産 100』「セネガル・ゴレ島～奴隷の家」
□『守ろう地球のたからもの　世界遺産編』日本ユネスコ協会連盟編　2010 年
□『授業中継　最新世界の地理　－国際感覚を育てる楽しい授業』川島孝郎　地歴社　2003 年

高等学校

「木の文化」を未来に伝えるには

ー法隆寺の世界遺産登録から考えるー

奈良県立法隆寺国際高等学校　教諭　祐岡　武志

1．はじめに

本校は普通科・歴史文化科・国際英語科・国際教養科の４学科をもつ国際高校である。日本史を深く学ぶ、全国的にも珍しい「歴史文化科」、英語の学習をカリキュラムの中心にすえた「国際英語科」と「国際教養科」（両方をまとめて国際科と呼ぶ）を擁し、特徴的な学習活動を行っている。

歴史文化科には、「世界遺産学」という学校設定科目があり、これまで世界遺産学習についていくつかの実践報告をしてきた。また、2008 年２月には国際教養科の学校設定科目「異文化理解」での英語科・地歴科教員のチーム・ティーチングによる、世界遺産をテーマとした授業実践を報告した。さらに、2009 年 12 月の世界遺産学習全国プレサミットでは、「ＥＳＤを目指した課外活動」として国際科での ESD の視点を取り入れた実践の概要と、「国際理解同好会」の活動を紹介した。

今回は、日本ユネスコ協会連盟の「守ろう地球のたからもの」プロジェクトで開発した「法隆寺」と「木の文化」についての教材を使用し、高校生対象に行った授業実践を報告する。本来は小学校・中学校の児童・生徒向けの教材を高校生向けにアレンジして提供したものである。地域の文化財としてこれまでも再三学習したはずの法隆寺を「世界遺産登録」と「木の文化」というキーワードで捉えると、新たな学習素材となりえることが、実践から明らかになった。

また、「歴史文化科」では、グループで独自のテーマを設定し、自主的に研究を進める「課題研究」という授業がある。２・３年次の２年間をかけた卒業に向けてのグループ研究といえるが、１年次から調査研究に関わる学校設定科目があり、実質的に３年間かけて取り組むことになる。本年度、「文化財の保存」をテーマに研究を進めてきた３年生のグループが、「課題研究」の中間発表会において興味深い発表をした。

「世界遺産学」などの学校設定科目で様々な学びをした生徒が、これまでの学習を発展させ、独自の視点で「文化財の保存」について調査・研究していることが意義深い。この「課題研究」での生徒の研究を世界遺産学習の実践の一例として、「木の文化」の実践報告とともに紹介する。

2．実践のねらい

（１）日本の「木の文化」の価値がヨーロッパに認められ、ヨーロッパを中心とした「石の文化」と合わせて、文化の多様性への理解が広まったことを考えさせる。

（２）石に比べると傷みやすく、壊れやすい木造建築物が 1300 年以上の時を経て現代に伝えられたことから、「木の文化」を守り、伝えようとした人々がいることを考えさせる。

（３）自分たちの身近な地域にどのような文化財があり、それにはどのような価値があるのか考えさせることで、文化財を守り伝えていくために何が必要か考えさせる。

3．学習活動

（1）学習の概要

1993年、「法隆寺地域の仏教建造物」が世界遺産登録されたことは、日本の「木の文化」の価値が世界に広く認められたことを意味する。この学習では、パルテノン神殿に代表されるヨーロッパの「石の文化」と、法隆寺に代表される「木の文化」を比べながら、木の文化が認められた意義と、破損・焼失しやすい木造建築を現代に伝えた人々の所為、ひいては自然と共生する暮らしの有用性について学習する。

（2）学習の流れ

	資料	学習活動	教師のはたらきかけ
導入	写真① ユネスコのマーク	ユネスコのマークからパルテノン神殿を連想する。	●ユネスコのマーク（写真①）のデザインが何を元にしたものか、自由に連想させる。回答を板書するのも良い。 ●建物を連想する答えが出たら、具体的な建物の名前や地域をあげさせる。
展開	写真② パルテノン神殿の写真	「石の建築物」の材料について考える。	●パルテノン神殿（写真②）の材料は何か、生徒に問いかける。 ●パルテノン神殿が含まれる世界遺産「アテネのアクロポリス」について簡単に説明。石の建築物が、建造以来2400年以上も残っている理由を説明する。
	写真③ 法隆寺（中門）の写真	「木の建築物」の材料について考える。	●法隆寺（写真③）の材料は何か、生徒に問いかける。 ●日本の伝統的建築物の多くが木造であることを確認させたうえで、法隆寺は建造から1300年以上を経た「世界最古の木造建築」であることを説明する。
	発問１　石の建築物と木の建築物の違いは何でしょうか？		
	ワークシート	材料による建築物の違い、特徴について考える。	●それぞれの特徴を具体的に挙げさせる（ワークシートに記入）。 ●石の建築物が長持ちする（保存性が良い）ために世界遺産に多く選ばれていること、ヨーロッパの建造物の多くは「石の文化」によって支えられていることに気づかせる。
	発問２　石に比べて傷みやすい木の建築物（法隆寺）が1300年も壊れずに残されてきたのはなぜだろう？		
	ワークシート	木の建築物の保存を妨げる出来事や原因について話し合いをする。	●木の建築物が失われてきた地震、火事、戦争などによる事例を生徒に考えさせる。
		法隆寺の世界遺産登録は、「木の文化」が世界的に認められた事例だったと理解する。	●それまで「石の文化」中心だった世界遺産の判定に、「木の文化」を認める判断基準が加わったことを説明する。

展開	写真④ 法隆寺（中門の柱）の写真	建造物の維持、保全には補修が欠かせないと理解する。	●写真④（法隆寺）から、木の建築物には、補修や解体修理が不可欠なことを説明する。
	写真⑤ ジェンネの大モスクの写真	石でも木でもない建造物による文化の存在を知る。 住民の修復によって維持されている世界遺産の存在を知る。	●写真⑤から、「ジェンネ旧市街」（マリ共和国）を紹介。アフリカの「土（泥）の文化」に気づかせ、文化の多様性について理解を深める契機とする。 ●住民が壁の表面を定期的に塗り直す「ジェンネの大モスク」を例に、修復によって維持されている世界遺産があることを知らせる。
	資料① 塔組みは 木の癖組み 人の心組み	「木の文化」を伝えた人々と、その姿勢について知る。	●資料①の西岡常一の言葉を導入に、「木の文化」を守り伝えようとした人々がいること、「木の文化」を伝える技術の奥深さを生徒に理解させる。 ●木を守ることは、自然を生かすことであり、文化財と自然はつながっていることに気づかせる。
まとめ	発問３　私たちの地域で大切にされている文化財は何か、考えてみよう。		
	ワークシート	地域の文化財の価値を評価し、維持には何が必要か考える。	●地域の文化財の価値を自分たちで評価し、未来に伝えていくために何が必要か考えさせる。

（写真①～⑤、資料①は、掲載許可の問題があり、省略しました。）

（３）生徒の感想（原文のまま一部を引用）

歴史の深さが分かった。 日本人の考え方でいくと、木にはあたたかみがあって、石は冷たさを感じると思っていたけど、それは文化の違いであって、どちらも大切に受け継がれていると感じた。
「木の文化」が世界に認められていなかったことに驚いた。法隆寺がすごい事は知っていたけれど、世界遺産の判断基準を変えてしまったことは知らなくて、改めてすごい文化財なんだなぁと思った。これからも残していって欲しいけれど、檜の木がないから、どうにかしてほしい。
樹齢 1000 年以上の檜がもう手に入らないと知って、すごく恐怖感を覚えた。 自分たちのグループが調べている内容とリンクする部分が多数あったので参考になった。☆
「木の文化」が今あるのは、色々な人の努力があったからだと改めて思った。森林を切り開いてばかりいる今の日本人は本当にバカだと思う。 木は何千年もかけないと立派な木にならないので、今から大切にするべきだし実行するべきだと思う。 西岡さんの言葉がすごく胸に響いた。
「技術は教えられるが、木がないと作業はできない」という西岡常一さんの言葉は「なるほど。」と思えた。 世界各地で、補修を何度も何度も繰り返してでも後世に残したい物があるというのは、凄いこと、「素晴らしい」ことだと思う。

元々、ユネスコの中心だった欧米は石造物が多かったので、木造建造物が残らないだろうという欧米人の考えは分からなくもないが、他文化の理解をもっと早くからしていれば、もしかしたら消失せずに済んだ文化財もあったかもしれないと思った。☆
木造の文化財を長く、そしてなるべくオリジナルの状態で保つ。それはただ保存していくだけではなく、人を育て、材料を育てることであると感じました。 また、世界には木でも石でもない建造物があり、それが文化財になっているというのは、初めて知りました。☆

（表中で、☆印は「文化財の保存」の調査・研究を行っているグループの生徒の感想。）

この授業を通して、生徒は全体的に素直な反応を示した。「ユネスコのマーク」からは、ほとんど全ての生徒がギリシャのパルテノン神殿を連想した。しかし、それ以上にイメージが広がることはなかったことが残念である。これは１学期の授業内容でユネスコについて学習した実績があったためだと思われる。また、発問の１と２については、概ね教師が期待する回答が得られた。この問いかけは、高校生にとっては簡単なものだったのかもしれない。しかし、発問３については、幅広い回答が得られた。世界遺産である代表的な寺社だけでなく、地域の神社仏閣や古墳が数多く示された。また、「文化財」に規定されず、「大切なもの」として評価されたものとしては、「地域の祭り」や「樹齢 1000 年近いと考えられる木」、「桜並木」、「地域に古くから残されている集会所（建築物として価値がありそうな）」があげられたことが注目された。

４．成果と課題

今回の実践の成果としては、次の３点をあげることができる。

（１）地域を代表する世界遺産である法隆寺の価値について、「木の文化」の観点から生徒が新たな認識を深めることになった。

（２）世界遺産を通して「石の文化」と「木の文化」を比較し、さらに「土（泥）の文化」を紹介することで、文化の多様性に目を向けることができた。

（３）文化財を未来に伝えることの難しさを目の当たりにし、文化財の保護と自然の保護とのつながりに気づくことができた。

歴史文化科では、１年次に「斑鳩学」という学校設定科目で法隆寺について学習するが、「木の文化」の象徴として法隆寺をとりあげた今回の授業に、新鮮な気持ちで取り組んでいたことが注目される。同じ教材（世界遺産）でも、切り口を変えることで学びが深まることが実感できた。特に、生徒が法隆寺の「木の文化」について認識を深め、未来に伝えたいと思えたことが大きい。

その一方で、未来に伝えることが現実的には困難を伴うことを、生徒は考えさせられることになる。「木の文化」は「木を使う」技術だけでなく、「木を守り、育てる」行為と密接に関わっており、文化財を保護することが自然を保護することにつながることが理解できた。

このように、法隆寺の「木の文化」を通して、生徒にＥＳ（Sustainability Education：持続可能性のための教育）の視点を持たせることはできたが、持続可能性を保つために、次にどのような行動（Action）をとればいいのか、解決の糸口の見出せていないことが課題といえよう。

奈良の民話と語りの文化が持つＥＳＤ力

奈良教育大学　特任教授　竹原　威滋
特任講師　青木　智史

１．はじめに

奈良県は「法隆寺地域の仏教建造物」、「古都奈良の文化財」、「紀伊山地の霊場と参詣道」という３つの世界遺産を有する我が国でも希有な地域であり、同時に数多くの民話や祭りなどの伝承文化が現在も残されている地でもある。世界遺産に代表される奈良の文化遺産は、長い歴史の中で様々な伝承の舞台・主題となってきた。例えば「古都奈良の文化財」に含まれる元興寺には、退治された盗賊が鬼（がごぜ）になって出没し、小僧が鬼と格闘の末、追い払い、小僧は後に立派なお坊さんになったという「元興寺（がごぜ）」の話が伝わっており、同様に春日大社や興福寺の近辺には猿沢池に伝わる「采女の恋」の話、鹿をめぐる悲しい話の「十三鐘の石子詰め」などがある。また東大寺二月堂辺りには、東大寺の開山である良弁僧正の伝説「良弁杉」の話や「鬼子母神とザクロ」の話などが伝えられている。「紀伊山地の霊場と参詣道」の地域でも、吉野には旅人を襲い高僧に封じられたという「伯母峰の一本足の鬼」の話や、源義経が身を隠したという「義経隠れ塔」の伝説、また近年絶滅したニホンオオカミに関わる民話も数多く伝えられている。これら民話などの伝承文化は、地域の歴史や風土、特色などを世代を超えて語り継ぐものであり、かつては地域コミュニティの中で様々な教育的役割を担ってきた。また、民話は「語りの文化」であり、民話を「語る」ことにより人との繋がりを構築し、家庭内や地域内、世代間の関係性を保ち、地域コミュニティを将来にわたって維持していく働きを有していた。近年は地域コミュニティの希薄化や核家族化などに伴いその役割も減少しつつあるが、かつて伝承文化が担ってきた「生きる力」を育む働きはその有意性を失ってはいないだろう。伝統文化の尊重、生活する地域に対する理解の深化、人間愛や礼節、価値観、思いやりや助け合いなどのコミュニケーション能力の育成、自然に対する畏敬と知識など、民話と語りの文化の持つ地域社会を支える重要な力を養い育む働きは、現在も、そして将来においても大切なものといえる。このような働きは、ＥＳＤおよびユネスコスクールの理念と重なる部分も多い。また、民話の持つ地域文化、自然環境、歴史、生活、礼節、災害、人権などの多様な内容は、様々な分野をつなげて総合的に扱っていくことが求められるＥＳＤにとって大きな可能性を秘めていると思われる。そこで、徐々に失われつつある伝承文化をＥＳＤの取組として再び掘り起こし、伝承文化を将来に伝えるとともに、民話と語りの文化の持つＥＳＤ力を活用し、それを担う人材を地域の中で育てていくことで、ユネスコスクールとして大人たちと子供たちが共に参画できる活動を目指していきたい。

２．取組のねらい

先述のように、奈良には多くの世界遺産があり、それらは文化拠点として様々な伝承文化を育んできた。これらの民話・伝承を導入として世界遺産、そして奈良文化・日本文化を学んでいくことで、より広範囲にわたる持続的な学びの展開を図りたい。奈良に伝承された物語・行事のうちで直接的に世界遺産に関連するものは一部に過ぎないが、それはそれら世界遺産が奈良の豊かな文化の一要素であることを示しているといえる。幾世代にわたって守り伝えられてきた世界遺産を次世代

に損なうことなく伝えなければならないように、世界遺産と共に歩んできた伝承文化もまた、未来に対しての責任として継承していかなければならない。これは他の文化遺産と伝承文化にとってもいえることである。伝承文化を将来へと伝えるとき、不可欠となるのが担い手の育成であろう。民話の語りについても同様である。

我々は、奈良教育大学が地域と緊密な教員養成系大学である点を活かして、民話を用いたＥＳＤを担う人材の育成と機会の提供を図り、将来にわたって持続的に展開できるものとすべく取組を始めた。また同時に、民話を通して市民のＥＳＤ活動を促し、奈良における継続的・循環的なＥＳＤ事業を模索している。

奈良教育大学は、様々な奈良の地域文化や伝統文化に関する研究調査を行ってきたが、民話に関しても豊かな調査・研究の成果が蓄積されている。例えば、本取組の代表者である竹原威滋（たけはらたけしげ）は、１９８３年１２月に比較民話研究会を設立し、花園大学の丸山顕徳（まるやまあきのり）氏とともに奈良県下の民話調査を始め、これまでに奈良県内を広く調査してきた。今までに行った民話調査の地域は、大塔村（おおとうむら）、東吉野町、吉野町、橿原市の旧耳成村（みみなしむら）、月ヶ瀬村（つきがせむら）、奈良市となっている。これらの報告書の一つである『奈良市民間説話報告書』は総合学習開発教材「わが町の伝承と世界の文化」基礎資料としてまとめられたものであり、「総合的な学習の時間」と共通点の多いＥＳＤの取組にとっても重要な基盤資料となるものである。奈良の地で民話を取り入れたＥＳＤ活動を始めていく上で、まず竹原がこれまで蓄積してきたこれらの成果を基にして展開していくこととした。

３．学習活動の概要

本取組は４つの柱で成り立っている。（１）民話の面白さと語りの文化の大切さを伝える、（２）民話の語り手・担い手の育成、（３）語りの実践と語りの場の提供、（４）教材の作成と利用、である。上記４つの柱を念頭に置き、以下に活動の概要を述べる。

・民話（語りの文化）・伝承文化の担い手の育成としての「語り手養成講座」の開講

竹原は、奈良教育大学の一般教養科目として「グリム童話を読む／奈良の民話を語る」を２００７年・２００８年に展開し、語りの文化の面白さを大学生に伝えてきた。これを引き継ぎ、奈良教育大学大学院で展開されている「地域と伝統文化」教育プログラムの取組の一つとして、大学院生や学部生、地域住民や現職教員などを対象とした「奈良の民話・語り手養成講座（以下、語り手養成講座）」を開講した。これは、先述の一般教養科目の経験を活かして、受講者が語りのノウハウを身につけて、幼稚園、保育園、図書館、学校現場や家庭で子どもたちや孫たちに奈良の民話などを語る実践力を身につけさせることを目的としており、現在失われつつある民話の語り手・担い手を養成していくことを目指したものである。２００９年度は、受講登録数は２４名（大学院生：２名　学部生：３人　一般：１９名）であり、年齢は２０代から８０代の幅広い層に及んだ。今年度も、１２月２日から持続発展教育（ＥＳＤ）プログラム「なら・語りの入門講座」を開講する予定であり、２０数名の参加が見込まれている。

・「奈良の民話を語りつぐ会」の活動と語りの実践の場としての「奈良民話祭り」

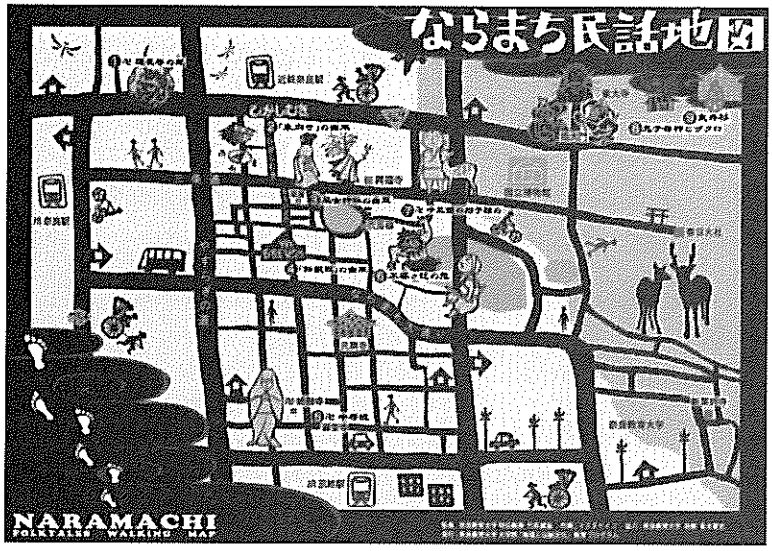
我々は、２００７年から２００９年の間、「ＮＨＫおはなしステージ　ｉｎ　なら燈花会（とうかえ）」に参画した。このイベントは、８月第２土・日曜日にＮＨＫ奈良放送局が奈良の夏の風物詩「なら燈花会」の関連イベントとして実施したもので、なら燈花会会場内の特設ステージで奈良に伝わる「おはな

し」を映像や音楽を背景に語り、奈良の歴史の奥深さ・文化の素晴らしさ、そして言葉のもつ力強さを伝えていこうというものであった。前述の「語り手養成講座」とこの活動を基にして、２００９年6月に奈良の民話・昔話などを語りや紙芝居などで多くの人々に伝えることを目的に、市民が自主運営する「奈良の民話を語りつぐ会（以下、語りつぐ会）」が発足した。この会は、前述の「語り手養成講座」を支え、奈良の民話を広く伝えるために「奈良民話祭り」を開催し、将来「奈良民話祭り」が奈良の文化的風物詩として定着することを目指して活動している。２０１０年１０月現在で市民２５名のメンバーが参加している。２０１０年4月１日・２日には「春の奈良民話祭り」を、８月１１日・１２日には「夏の奈良民話祭り」を開催した。それぞれ両日合わせて、約６０名および約８０名の参加者があり、子供たちとその父母、祖父母など、参加者は幅広い世代にわたった。「奈良民話祭り」は、語りつぐ会のメンバーが企画・立案・実施を行い、奈良の民話を語り、紙芝居を行い、わらべ歌を歌い、訪れた人々が実際に参加して体験する形で行われた。本年はあと一度、１１月２７日・２８日に「秋の奈良民話祭り」が開催される予定となっている。

写真：夏の奈良民話祭りの様子

・奈良の民話を周知・活用するための教材「ならまち民話地図」と「吉野民話地図」の作成

元興寺旧境内にあたる「ならまち（奈良町）」は、江戸時代に栄えた商工業都市で、いまも随所に江戸時代以降の町屋がみられる伝統的建造物群として奈良有数の観光資源となっている。ならまちの内外には、元興寺、興福寺、東大寺、春日大社などの世界遺産があることもあり、奈良観光の拠点ともなっている。ならまち周辺は長く奈良文化を代表する地域であったこともあり、界隈には様々な民話が残されている。奈良各地に伝わる民話の教材化を進める上で、まず第一弾として奈良を代表する民話密集地である「ならまち」に注目し「ならまち民話地図」の作成を行った。この地図には、ならまち周辺に伝わる代表的な民話を９つ選び掲載した。ならまち民話地図の制作は２００８年から２００９年にかけて行われ、奈良教育大学の大学院生（美術教育専修）であった増田恵子が地図および民話キャラクターのデザインを担当した。地図表面にはシンプルに表現された「ならまち」マップが描かれ、その上の９つの民話ポイントに個別のキャラクターが配されている。裏面にはそれぞれに対応した民話テキストが掲載された。この地図を持って「ならまち」周辺を巡ることで、民話の舞台を実際に訪れ体感し、ときに裏面の民話テキストを読み語ることで奈良の民話の持つ魅力を学び、そして楽しんでもらうことを目指した。この教



図：ならまち民話地図（表面）

材の想定対象層は、第一に奈良在住の子供たちと大人たち、第二に奈良に訪れる国内外からの観光客である。前者に対しては、自分たちが生活する奈良には民話という無形の素晴らしい文化が存在することを示し、奈良文化の奥深さと面白さを改めて感じてもらうための糸口になることを期待した。後者に対しては、奈良に訪れる観光客が単に「物見遊山（ものみゆさん）」で終わるのではなく、民話という目には見えないが魅力的な文化に接する機会を提供することで奈良の文化に対してより本質的な興味が触発されることを目的とした。

「ならまち民話地図」は、まだ制作されたばかりで適用例は限られているが、機会を捉えて利用の促進を図っている。例えば、２００８年１１月に開かれた、東大寺に縁ある市町村が集い郷土の歴史と文化遺産を保護又は活用した魅力ある個性豊かな地域づくりをすすめることを目的とした「東大寺サミット」では、「ならまち民話地図（初版）」を当日教材資料として配布し、民話地図を手に取りながら語り手が奈良の民話語りを実践した。また、この「ならまち民話地図」を修学旅行に活用する中学校も出てきており、少しずつ利用が広がっている。観光客へのアプローチとして、現在ＪＲ奈良駅の旧駅舎内の奈良市総合観光案内所にも掲示されている。加えて、海外からの来訪者にも奈良の民話を知ってもらうために英語版も制作した。現在、中国語版とドイツ語版を作成中であり、近く公開を予定している。さらに、デジタル教材としても「ならまち民話地図」はWeb上で公開を始めている。２０１０年６月からは奈良県吉野地方に伝わる民話の地図教材化を進めており、本年度中に公開し、吉野地域における民話学習教材としての展開を模索してきたい。

４．成果と課題

奈良の民話を用いたこのＥＳＤ取組は、２００８年から２００９年にわたる準備期間を経て２０１０年から具体的に動き始めている。上述した「語り手養成講座」「奈良の民話を語りつぐ会」「奈良民話祭り」の一連の活動を通じて、手探り状態ながら着実に前に歩を進めている。今後は、よりＥＳＤおよびユネスコスクールとしての実質的な取組につなげていかなければならないだろう。現状、成果としてあげられるものは限られているが、「語りつぐ会」では奈良市内の幼稚園等に出向いて奈良の民話を語る試みを始めており、まだ第一歩に過ぎないが実践における成果といえる。民話教材の作成も成果の一つであろう。また、本年が２年目となる語り手養成講座もさらに継続・発展を図り、今後、大学の講義として単位化を模索するなどして学生をより多く取り込み、教師・人材としての力量醸成のための民話ＥＳＤ力を体得できる機会としたい。そして、今後、初等中等教育機関に取組を紹介し、民話を用いたＥＳＤを実践していきたいと考えている。特にＥＳＤに積極的に取り組んでいる奈良教育大学附属中学校との連携も模索しながら、奈良の特色あるＥＳＤ実践としていきたい。また、ユネスコスクールを通じて他地域の加盟校とも連携して方法論と成果を共有し、様々な課題に取り組み、教育資本としての民話と語りの文化をアピールしていきたい。

昨年度の語り手養成講座事後アンケート結果をみると、もともと民話そのものに関心があったこと、この講座を受けてさらに高まったこと、語ることの有意性に気づいたこと、民話を語るイベントなどがあれば積極的に参加してみたいという気持ちが持てたこと、などが読み取れる。これは、民話と語りそのものに潜在的な需要があることを示している。ただし、民話を語る習慣や機会はほとんど無いというのが現状のようである。かつては地域コミュニティ内に当たり前にあったそれらの習慣や機会が、今はほとんど無くなってしまっている。過去に戻ることはできず取り戻すことも容易ではないが、新たな機会を提示していくことは我々の努力次第で実現可能であろう。本取組をその契機としたい。

平成２２年度　日本／ユネスコパートナーシップ事業　報告書

世界遺産学習全国サミット２０１０ｉｎなら
奈良教育大学ユネスコスクール教育実践研究会

国立大学法人　奈良教育大学
〒630-8528　奈良県奈良市高畑町